

平成 27 年度文部科学省受託事業

武道等指導充実・資質向上支援事業

(テーマ 4 : 成果検証)

ダンス領域を実践するまでの成果と
課題の把握並びにその解決策の方策



平成 28 年 3 月
研究代表者 横浜国立大学 高橋和子

関係各位

平成 28 年 3 月 3 日 研究代表者 横浜国立大学 高橋和子

文部科学省受託事業 武道等指導充実・資質向上支援事業(テーマ4:成果検証)

ダンス領域を実践するまでの成果と課題の把握並びにその解決策の方策

文部科学省から委託を受け、平成26年度は、全国の中学校における柔道とダンスの指導状況等調査を行いました。平成27年度は継続事業として、特に創作ダンスを実践している神戸市の指導状況等調査、並びに、リズム系ダンスの支援教材開発や外部指導者の状況調査を行いました。文部科学省、各県教育委員会、神戸市教育委員会、横浜市教育委員会はじめ、多くの関係者にご協力いただきましたことに、心より感謝申し上げます。

教員への質問紙調査時にはダンス研修会を同時に開催し、教材や指導法を提供させていただきました。ダンス研修会を初めて受講した教員の皆様も、変身世界に興じたり、日頃スポーツで鍛えた心身を使い、全身で表現したり、リズムに乗って踊ったり、仲間と協働して創作作品を完成させたりと、生き生きとした姿を見ることができました。柔道は教員自身の経験に基づいての指導がなされているのに比べ、ダンスは自身の経験が少ないため自信をもって指導できない状況もある中で、ダンスの方が多く指導している状況も見られました。さらに、中学生女子の運動離れが危惧されているなか、特にダンスの影響力も期待できることが分かりました。また、中央教育審議会の『論点整理』でも挙げられている「自立・協働・創造」を目指すアクティブ・ラーニングについても、ダンスは戦後70年間、その学習法に基づいて実践してきており、今後の教育界への発信が、さらに期待できそうです。最後になりましたが、本委託事業で明らかになったことや提供した映像が、指導支援につながることを祈念しております。

平成26・27年度の調査で明らかになったことは、次の点です。

【平成26年度】

- ①男子中学生は柔道を、女子はダンスをより肯定しており、性差がみられた。
- ②教員の指導経験や得意（技能を身につけ）になるための研修が重要である。
- ③柔道の指導内容は、「受け身・基本動作」は約6割、「固め技・投げ技」は約5割が指導しているが、特に「投げ技」の安全な指導法開発が必要である。
- ④ダンスの指導内容は、リズム系約8割、表現系約6割、フォークダンス約4割である。基本的内容（即興表現、自由に踊る）の指導があまりなされていない。
- ⑤上記を受け、指導支援のための小・中での実践事例や映像資料を作成した。

【平成27年度】

- ①男子は柔道を、女子はダンスを肯定しているが女子の運動離れにはダンスが歯止めになる。
- ②リズム系ダンスは約8割、表現系は約6割、フォークダンスは約5割の生徒が履修している。リズム系では振付・発表が多く、リズムに乗り自由に踊るのは5割弱。表現系では簡単な作品創作・発表が多く、即興表現は約3割。外国のフォークダンスが約4割。つまり、学習指導要領（解説）等で提示している「基本的な内容」はあまり教えていないが、この「基本的な内容」は教員自身の経験や指導経験があるほど指導している。
- ③神戸市では、表現系の成果発表会を57年にわたり開催しており、教員のダンス指導が可能になっていている。生徒自身がダンスで身に付いた力として、神戸市では「表現力」「創造力」「コミュニケーション力」を挙げているのに対し、リズム系の履修が多い全国では「身体感覚」が高い傾向である。
- ④ダンスの外部指導者の活用はほとんどされていないが、横浜市では「横浜市芸術文化教育プラットフォーム」を活用した授業が好評であり、その好循環を導くにはコーディネーターの役割が重要である。

＜報告書の章構成と概要＞

第1章は、平成26年度に実施した「全国の中学校における柔道とダンスの指導状況等調査」の継続事業として、神戸市立全中学校にも行った結果について、全国調査との比較も行いながら記述した。主な内容は次の通りである。①女子はダンス、男子は柔道を好む傾向がある。②神戸市の生徒はダンスで「創造力」「表現力」が身に付いたとしており、特に創作ダンスは21世紀型能力育成につながると考えられる。③神戸市教員はダンスを得意とする者は少ないが指導経験は多く、指導資料や講習会の充実がそれを支えていることが分かった。④神戸では創作ダンスが、全国ではリズム系ダンスの履修が多く、どの地域においても基本的内容の指導が少ないことが分かった。なお、この調査結果に基づき、『舞踊学教育学』『体育科教育』『女子体育』で発表した論考も掲載した。

第2章は、リズム系ダンスの指導の取組みについて、次の3項目を記述した。①映像教材の有効活用、②導入段階での習得型実践事例、③リズムダンスコンクールの実態。

第3章は、ダンスの基本的内容や導入として活用できる事例を紹介すると共に、ダンス指導法の特徴を明らかにした。また、ダンスの学習法は、戦後70年間、アクティブ・ラーニングを先導してきたことについても言及した。

第4章は、外部指導者活用の実践事例を、横浜市の「横浜市芸術文化教育プラットフォーム」や神奈川芸術劇場、附属鎌倉小学校での取組みを紹介しながら、コーディネーター役が重要であることについて記述した。

第5章は、ダンス映像編であり、「1.事例」「2.作品」から構成されている。

「1-1：ダンスの基本的内容を考える」は表現系、リズム系、フォークダンスの3領域の基本的内容とは何であり、発達や指導の留意点も押さえたレクチャーである。

「1-2：リズム系の指導事例」はダンス初心者に対して「導入・基本・簡単な振りの作品」

「1-3：カポエイラ」はブラジル格闘技の基本的な動きを応用した2人組での即興的な展開。

何もないと動けない女子や、恥ずかしさを克服してもっと激しく動きたい男子にとっても、動く（舞う）ことが楽しくなるような導入として提示した。

「1-4：全国小・中学校リズムダンスふれあいコンクール」はTBS(2016.1/2)放映の抜粋映像。

リズム系コンクールは全国至る所で開催されているが、このコンクールはクラスや学校単位で出場することが条件になっている。苦手な男子生徒も舞台に乗る意味を考え、協働して一つの作品を創るプロセスがドキュメンタリータッチで描かれている。

「2.作品」は、横浜国立大学の学生がイベントや大会に出展した作品である。

「2-1：Dance Dance Dance@ YOKOHAMA 2015」ダンス年と位置付けた横浜の様々な企画の一つ。

『エンノシタ』は「アーティスティックムーブメント・イン・トヤマ」で特別賞受賞作。

「2-2：DYAD」は第30回ヨコハマダンスコンペティションで「赤い靴賞」の男性デュオ。

「2-3：TWITER症候群」は日本教育大学協会第35回全国創作舞踊研究発表会出展の授業作品。

専門科目ダンス受講学生が授業時間（90分×7回）内で創作し、初舞台も半数はいた。

「2-5：戯～鳥獣戯画から見た世界」は第28回全国高校大学ダンスフェスティバル神戸受賞作。

日本女子体育連盟会長賞受賞。出演者の中には、大学で小学校教員養成課程の5回の必須ダンス授業を契機に、2か月後には全国大会に出場した学生もおり、ダンスは特別な身体能力や経験がなくとも、誰でもができる可能性があることがわかつていただけるであろう。

資料編は、①平成27年度に実施した「全国の中学校における柔道とダンスの指導状況等調査」の集計結果（図表）、②調査票（生徒用・教員用）である。

目次

第1章 中学校における柔道・ダンスの指導状況等の継続調査:神戸市を中心に 1p

横浜国立大学 高橋和子・高橋耕平・山本光

1. 中学校におけるダンス指導実態調査:神戸市の場合 高橋和子
日本教育大学協会全国保健体育・保健研究部門舞踊研究会『舞踊教育学』2016年掲載
2. 平成27年度調査結果調査 ①中学生 ②教員 ③男女別・生徒教員別等の比較 高橋和子・高橋耕平
3. 改訂期のダンスでいま、何がどう問題か 『体育科教育』2016年掲載 高橋和子
4. ダンスはどんな扉を開くのか 『女子体育』2015年掲載 高橋和子
5. 日々のダンス・身体活動を振り返る視点:数値・楽しさ・レジリエンス・ふれあい 『女子体育』2015年掲載 高橋和子

第2章 リズム系ダンスの取組み 28p

1. ダンス授業における映像教材の活用:和歌山県・北九州市の取組みをもとに 横浜市立橘中学校 三浦明希子
2. 導入段階での習得型実践事例 吉備国際大学 高田康史
「小学校体育科におけるリズムダンス授業の習得—活用型授業モデルに関する事例研究」
日本教育大学協会全国保健体育・保健研究部門舞踊研究会『舞踊教育学』2016年掲載
3. リズムダンスコンクールの実態から見えてくるもの 高橋和子

第3章 ダンスの指導法について 35p

1. ダンスの基本的内容を考える:体育科教育学会ラウンドテーブル【映像あり】 高橋和子・共立女子大学 伊藤史織
2. 中学男子も取組みやすい導入の工夫 横須賀市立武山中学校 斎藤昌子
3. カポエイラの動きからの導入【映像あり】 湘北短期大学 小笠原大輔
4. 男子が取組みやすいダンス実践のコツ 小笠原大輔
5. 幼児期に培われる身体表現の基礎力 共立女子大学 足立美和
6. ダンスの学習指導は、体育に何をもたらしたのか 東京学芸大学 松田恵示
7. アクティブ・ラーニングを先導するダンス学習 東京学芸大学 鈴木直樹

第4章 外部指導者活用ダンスプログラム 60p

1. 横浜市芸術文化教育プラットフォームの取組み NPO法人STスポット横浜 小川智樹
2. KAAT 神奈川芸術劇場の取組みから探るアウトリーチの意義 共立女子大学 伊藤史織
3. 開かれた場所から始まる化学反応 『女子体育』2015年掲載 伊藤史織
4. Dance Dance Dance@ YOKOHAMA 2015 次世代育成事業【映像あり】 高橋和子

第5章 ダンス映像

横浜国立大学 上原征大・伊藤史織

1. 事例

1-1 ダンスの基本的内容を考える 高橋和子

1-2 リズム系の指導事例 伊藤史織・高橋和子・横浜国立大学モダンダンス部

1-3 カポエイラの動きからの導入 湘北短期大学 小笠原大輔・横浜国立大学学生

1-4 全国小・中学校リズムダンスふれあいコンクール

2. 作品 横浜国立大学学生出展

2-1 Dance Dance Dance@ YOKOHAMA 2015 作品『エンノシタ』『チューリップ』

次世代育成プログラム Dance Dance Dance@Queen's Circle 出展

2-2 作品『DYAD』 第30回ヨコハマダンスコンペティション 赤い靴賞受賞

2-3 授業作品『Twitter症候群』 日本教育大学協会第35回全国創作舞踊研究発表会出展

2-4 作品『「たわむれ 戯～鳥獣戯画から見た世界～』

第28回全国高校大学ダンスフェスティバル神戸 日本女子体育連盟会長賞受賞

資料編

70p

1. 「全国の中学校における柔道とダンスの指導状況等調査」の集計結果(図表) 高橋耕平

2. 「全国の中学校における柔道とダンスの指導状況等調査票」

2-1 生徒用調査票

2-2 教員用調査票

委託事業組織・調査協力者一覧

87p

あとがき

88p

第1章 中学校における柔道・ダンスの指導状況等の継続調査：

神戸市を中心に 横浜国立大学 高橋和子・高橋耕平・山本光

【第1章の概要】平成26年度に実施した「全国の中学校における柔道とダンスの指導状況等調査」の継続事業として、神戸市立全中学校にも行った結果について、主にダンス領域に焦点化して、全国調査との比較も行いながら記述した。なお、この調査結果に基づき、『舞踊学教育学』『体育科教育』『女子体育』で発表した論考も掲載した。

1. 中学校におけるダンス指導実態調査:神戸市の場合 高橋和子

日本教育大学協会全国保健体育・保健研究部門舞踊研究会『舞踊教育学』2016年掲載

I 研究目的：神戸市立中学校では、半世紀前から創作ダンスの授業が活発に行われていることから、ダンスの指導状況を把握分析し、中学校で新たに必修化されたダンス領域の成果と課題を検証することを目的とする。

II 研究方法

1. 対象：神戸市立の全中学校82校を対象に、ダンス・体育履修等に関する質問紙調査（中学生25項目、教員28項目、内14項目は同じ）を4段階評定（一部複数回答）で神戸市教育委員会を通じて依頼。並行して全国調査も実施。

2. 有効回答数

中学生30,196名（神戸市17,273、全国12,923） 教員448名（神戸市202、全国246）

3. 調査実施日

2014年7月～2015年5月

4. 分析方法

1)統計ソフトIBM SPSS Statistics22にて調査項目を単純集計後、一元配置分散分析と多重比較検定、カイ二乗検定と残差分析を実施。

2)比較分析：次の資料も比較資料として使用。

①文部科学省『平成26年度・27年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査報告書』（以下「文科報告書26・27」）。

②平成26年度文部科学省委託研究（研究代表：高橋和子）『中学校における柔道・ダンスの指導状況等の調査報告書』（以下「文科委託26」）。

3)分析の観点：「神戸市と全国（生徒と教員）・神戸市の男子と女子・ダンスと柔道」で比較。神戸市の顕著な傾向を示した項目（有意な確率p<.05以下）について考察した。確率p値は未表示、有意差がないものにはn.s.を表示した。

III 結果と考察

1. 中学生の体育・運動全般に関する傾向

①対象：神戸市は全国に比べ男子生徒並びに中学1年（神戸市34.7%、全国18.8%）が多い。

②「運動部所属」「授業を除く運動実施状況」：2項目とも全国の方が高く、神戸市の中では男子

が高い割合であった。この傾向は「文科報告書 26・27」と同様であり、その影響からか神戸市の体力合計点は全国平均を下回っていた。

- ③「体育・スポーツ好き」「授業は楽しい」：神戸市が全国より高い割合を示し「文科報告書 27」の結果も同様であった。授業での楽しさを契機に、運動実施に繋がる可能性が示唆される。
- ④「もっと運動してみたいと思う条件は何か」：神戸市は“好き・できそうな種目があれば”を、全国では“体型の変化に効果があれば”を挙げ、この 2 項目とも女子が有意に高い割合を示した。男子は「自由な時間があれば」を挙げていた。この性差の特徴を体育授業に活かせば、運動に取り組む可能性が生まれのではないだろうか。

2. 体育・ダンス指導の生徒・教員の意識（表 1）

- ①体育の指導：「丁寧に教わる」では、全国の生徒の方が、神戸市では男子が肯定的であった。しかし、神戸市教員は全国よりも高く、生徒と教員間の意識の違いが見られた。「運動のコツやポイントが分かる」では、全国の生徒の方が、神戸市では男子が肯定的であった。女子生徒への言葉かけや示範に工夫が必要になろう。
- ②ダンス授業の成果：「楽しい」「踊れるようになった」「スポーツにも関心が持てた」では、全国の生徒・教員の方が、神戸市では女子が肯定的であった。なお柔道では神戸市の生徒（特に男子）・教員の方が全国よりも肯定的であった。
生徒は「ダンスや柔道はどこでやりたいか」の質問では、「授業や部活」はダンスでは全国、柔道では神戸市が高く、「やりたくない」はダンス・柔道とも神戸市が高い割合を示した。女子はダンスを、男子は柔道を肯定する傾向は「文科委託 26」でも同様であったことから、性差を意識した指導がより求められる。
- ③ダンスで身に付いた力は何か：「表現力」「創造力」「コミュニケーション力」は神戸市（特に女子）が高く、「身体感覚」は全国が高い割合を示した。表現力や創造力は 21 世紀型能力とも一致すると共に、創作ダンスの履修が多い神戸市の傾向であると推察できる。

3. 教員のダンス経験・得意度・指導経験

- ①調査対象の教職歴：神戸市は 1～5 年の若い教員が多く回答していることから、全国に比べ、体育授業の指導歴も短いと言える。
- ②「ダンス経験・得意度・指導経験」：神戸市の「ダンス指導経験」「柔道指導経験・得意度」が高く、神戸市では教職歴が少ないにも関わらず、ダンスや柔道をしっかり指導していた。特に柔道では得意な指導者のもと授業展開がなされたことから成果が高いと推察される。逆にダンス指導は自身の経験が少なく得意でなくとも、指導できる領域とも考えられる。ダンス指導に際し、神戸市は「研究会・学校作成資料」、全国は「民間企業作成資料」の活用が高かった。これについて神戸市教育委員会に尋ねたところ、授業作品発表会を学校や区単位で行い、それを経て市大会において上演し、その時の映像を次年度に各学校に配布していた。同時に創作ダンス指導法講習会も 50 年以上継続しており、これらのシステム構築により、どの教員もダンス指導ができると推察できる。

4. ダンス3領域の履修状況・授業内容

- ①生徒が回答したダンスの履修学年（表2）：創作ダンスでは神戸市が、リズム系・フォークダンスでは全国が各学年とも上回っていた。未履修の割合は創作ダンスでは神戸15.7%，全国38.3%，リズム系では神戸は48.1%，全国18.3%，フォークダンスでは神戸は81.2%，全国51.6%であった。このことから、神戸市は創作ダンスの履修に力を入れていることが分かる。
- ②生徒と教員が回答したダンスの授業内容（表3）：授業内容を学習指導要領・解説等に提示された技能内容と現状から4択を設定し聞いたところ、生徒と教員は類似傾向であった。教員の方が高い割合を示した為、詳細に見てみる。創作ダンスの指導内容は「簡単な作品創作・発表鑑賞（応用）」「即興的な表現（基本）」「体育祭等で踊る（発展）」の順であった。神戸市では作品創作と発表が、全国では体育祭等での発表も重視されていた。リズム系の指導内容は「振付ダンス」「リズムに乗って自由に踊る（基本）」「発表鑑賞（応用）」「体育祭等で踊る（発展）」の順であり、振付ダンスの実施も特徴的であった。

以上のことから、神戸市も全国においても、作品創作や振付ダンスや発表の前に、基本的内容をきちんと指導することが、課題として浮かび上がった。

IV 結論

1. 女子はダンス、男子は柔道を好む傾向がある。
2. 神戸市の生徒はダンスで「創造力」「表現力」が身に付いたとしており、特に創作ダンスは21世紀型能力育成につながると考えられる。
3. 神戸市教員はダンスが得意な者は少ないが、指導経験は多く指導資料や講習会の充実もあった。ダンスが必修化した現在、神戸のダンス指導システムに学ぶところが大きい。
4. 神戸では創作ダンスが、全国ではリズム系ダンスの履修が多く、神戸・全国ともフォークダンスの履修は少なかった。どの地域においてもダンスの基本的内容の指導が少ないと見える。

表1 生徒・教員の意識 *有意に高い方を表示

生徒	性 (神戸)	教員
体育実技		
丁寧に教わる	全国	男子
ほめられた	全国	n.s.
分かる	全国	男子
ダンス(柔道)授業		
楽しい	全国(神戸)	女子(男子)
できる	全国(神戸)	女子(男子)
関心持つ	全国(神戸)	女子(男子)

表2:生徒		1年	2年	3年	累計	未履修
創作系	神戸	73	47.6	20.9	141.5	15.7
	全国	32.1	26.5	14.9	73.5	38.3
リズム系	神戸	30	24.3	10.7	65	48.1
	全国	47.4	38.2	19.5	105.1	18.3
表3:教員		基本	応用	発表	体育祭	累計
創作系	神戸	31.9	78.9	79.3	11.3	201.4
	全国	30.6	57.2	48.1	27.7	163.6
リズム系	神戸	30.5	48.4	24.4	23.5	126.8
	全国	48.5	57	48.5	29.4	183.4

*表中数値は%，複数回答の為100%を超える

*本研究は文部科学省の「武道等指導充実・資質向上支援事業」の一環であり、ご協力頂いた方に感謝致します。

2. 平成 27 年度調査結果

高橋和子・高橋耕平

ここでは、主にダンス領域に焦点化して、神戸市立全中学校（生徒・教員）と全国との比較を行った。性別や生徒・教員別の顕著な傾向についても分析した。調査目的・方法・分析の方法については、前掲「第 1 章の 1」を参照のこと。分析にあたって、質問紙の回答が 4 択になっている場合は、次のように 2 群まとめて表記した。「得意・やや得意」「好き・やや好き」「そう思う・ややそう思う」をまとめて「肯定群」、「やや苦手・苦手」「やや嫌い・嫌い」「あまりそう思わない・まったくそう思わない」を「否定群」として記載した（集計結果は巻末の資料編に掲載）。

① 中学生

有効数は 30,196 名、内訳は神戸市の中学校が 17,273 名、全国の中学校が 12,923 名である。なお、全国の中学校は岩手・山形・神奈川・千葉・長野・岐阜・大阪・京都・香川・鳥取・福岡・沖縄の 12 府県を調査した。以下、集計結果を神戸/全国の順に表記していく。

1.1. 対象者の属性

(1) 対象中学生の性別（問 1）

男子が 8,882 名（神戸）／6,381 名（全国）、女子が 8,377 名（神戸）／6,522 名（全国）で、神戸・全国共に男女比はほぼ同じ割合である。

(2) 学年（問 2）

学年の内訳は、1 年生が約 35%（神戸）／約 19%（全国）、2 年生が約 36%（神戸）／約 38%（全国）、3 年生が約 29%（神戸）／約 43%（全国）である。全国の中学校で 1 年生が少ないのは、本調査期間を 12 月までとしたために、柔道やダンスの履修が 3 学期の学校は、中学校 1 年生を調査対象から除いた学校もあった。その結果、調査対象は 2・3 年生が多かったと考えられる。神戸に関しては 3 月締め切りとしたため、各学年ほぼ均等な割合で回答を得られた。

(3) 運動部への所属（問 3）

運動部へ所属している生徒は 65.2%（神戸）／66.5%（全国）である。その一方、運動部へ所属していない生徒は 28.6%（神戸）／27.1%（全国）いる。

(4) 授業を除く運動（柔道・ダンス含む）実施状況（問 4）

「週に 3 日以上」「週に 1～2 日」運動を行っている割合は 58.2%（神戸）／63.2%（全国）、「全く運動していない」生徒は、32.3%（神戸）／25.5%（全国）おり、これらの数値は問 3 の「運動部に所属している・していない」割合とほぼ同率である。このことから、約 3 割の生徒は授業のときだけ運動をしている状況であり、授業をきっかけとして、少しでも体を動かす習慣や運動が好きになる工夫が大切になると言えよう。

1.2. 体育やスポーツに対する意識

(1) 体育やスポーツは得意ですか・好きですか（問 5、問 6）

「体育やスポーツは得意ですか」の質問で、「肯定群」は 62.4%（神戸）／62.1%（全国）。「体育やスポーツは好きですか」の質問で、「肯定群」は 83.1%（神戸）／81.4%（全国）である。神戸・全国共に地域差はないが、それぞれの男女差で見ると、男子の方が女子に比べ体育やスポーツを肯定的に捉えている。（性差については後述）

(2) もっと運動してみたいと思う条件は何ですか（問7：複数回答）

この質問は複数回答である。そのため集計の合計が100%を超える場合もありうる。「好き・できそうな種目があればもっと運動をしてみたい」と答えたのは70.3%（神戸）／69.2%（全国）、「自由な時間があれば」は35.7%（神戸）／36.7%（全国）、「友達と一緒にできたら」は34.7%（神戸）／35.2%（全国）、「体型の変化に効果があれば」は12.7%（神戸）／15.5%（全国）の順である。

1.3. ダンスや柔道に対する意識

(1) ダンスは得意、柔道は得意ですか（問8、問9）

「ダンスは得意ですか」の質問で、「肯定群」は30.0%（神戸）／37.1%（全国）、「柔道の肯定群」は31.6%（神戸）／29.6%（全国）であり、これらの値は「文科報告書26」の他種目と比べ低い値である。

(2) ダンスや柔道でどんな力が身に付きましたか（問10、問11：複数回答）

この質問は複数回答である。ダンスで身に付いた力として、「表現力」と答えたのは47.1%（神戸）／42.1%（全国）、「創造力」は37.5%（神戸）／25.7%（全国）、「コミュニケーション力」は26.4%（神戸）／25.3%（全国）、「身体感覚」は23.4%（神戸）／35.3%（全国）の順である。

柔道で身に付いた力として「技術」と答えたのは40.0%（神戸）／37.5%（全国）、「護身」は40.2%（神戸）／29.8%（全国）、「日本の伝統文化への興味」は20.8%（神戸）／18.8%（全国）、「仲間との協調性」は17.6%（神戸）／18.2%（全国）の順である。

(3) ダンスや柔道はどこでやりたいか（問12、問13：複数回答）

この質問は複数回答である。ダンスをやりたい場所について聞いたところ、「どこでもやりたくない」は42.3%（神戸）／33.5%（全国）、「授業でやりたい」と答えたのは40.6%（神戸）／47.4%（全国）、「外部のおけいこ場」12.9%（神戸）／12.5%（全国）、「部活」は11.3%（神戸）／13.4%（全国）の順である。

これらの項目では、神戸では「柔道」、全国では「ダンス」がそれぞれ高い数値を示した。特に、神戸の生徒が「柔道」に肯定的であったのは、柔道経験者（指導経験含む）が教員に多かつたことが起因していると考えられる。全国の生徒が「ダンス」に肯定的であったのは、全国は体育に力を入れている学校を教育委員会が調査対象にしているのに対し、神戸では全中学校を対象としていることや、表現系ダンスの履修率が高いことも、あまり肯定的でなかった原因と考えられる。もう一つ特徴的な点は、「ダンスで身に付いた力」として、表現系ダンスを履修させている神戸は「創造力」「表現力」が高く、リズム系ダンスを履修させている全国は「身体感覚」が高い数値を示した。このことより、創作ダンスで身に付く力は「創造力」「表現力」と言えよう。

1.4. 中学校の保健体育の授業に対する意識

(1) 運動のコツやポイントが分かる・体育は自分にとって大切なものか（問15・16）

「授業で運動のコツやポイントが分かったか」の質問に、「肯定群」は75.4%（神戸）／78.5%（全国）。「授業を通して体育は自分にとって大切なものと思ったか」の質問では、「肯定群」は80.3%（神戸）／81.2%（全国）であり、両者とも同様の傾向であった。

(2) 教師の指導（問17、問18）

「先生にはめてもらえたか」の質問に、「肯定群」は 55.5%（神戸）／62.2%（全国）であり、全国がより肯定的であった。また、「先生にていねいに教えてもらったか」の質問では、「肯定群」は 78.6%（神戸）／79.9%（全国）であり、神戸・全国とも差はなかったが、教員と生徒との受け止め方に違いが見られた。（教員調査結果の項で後述）

1.5. 中学校のダンス授業に対する意識

(1) ダンス授業の成果（問 19、問 21、問 23）

「ダンスの授業は楽しかったか」の質問に、「肯定群」は 58.7%（神戸）／60.8%（全国）。 「ダンスの授業で踊れるようになったか」の質問では、「肯定群」は 46.9%（神戸）／57.7%（全国）であった。これは神戸では「創作ダンス」を、全国では「リズム系ダンス」を中心に教えていたため、差異が生じたと考えられる。リズム系の指導の現状は振り付けが多く、「踊れるようになった」という判断基準が明確であるのに対し、創作ダンスはゴールフリーと言われるように明確な答えがあるわけではないため、生徒の判断に影響を及ぼしたと考えられる。本来はリズム系ダンスも自由に踊ることが基本であり、その意味ではゴールフリーの領域なのである。「ダンスの授業を経験してスポーツにも関心が持てたか」の質問に、「肯定群」は 45.6%（神戸）／48.3%（全国）と、「ダンスの授業は楽しかったか」と同様な傾向であった。

(2) ダンス授業の履修形態（問 25、問 27）

「ダンス授業は男女共習か別習か」では、「男女共習」は 35.4%（神戸）／27.8%、「別習」は 52.7%（神戸）／51.9%（全国）、「学年によって違う」は 4.8%（神戸）／8.4%（全国）。「ダンス授業はなかった」は 4.3%（神戸）／4.5%（全国）である。次に「外部指導者からダンス授業を受けた学年」を聞いたところ「中学 1 年」は 4.7%（神戸）／9.8%（全国）、「中学 2 年」は 3.6%（神戸）／8.5%（全国）、「中学 3 年」は 1.3%（神戸）／3.9%（全国）と、どの学年とも 1 割弱であり、「全く受けていない」と答えた者も 86.4%（神戸）／71.5%（全国）おり、全国の方が外部指導者を導入していることが分かった。

(3) ダンス領域の履修学年（問 29、問 31、問 33：複数回答）

「ダンスの履修学年」と「ダンス 3 領域の授業内容」が本研究の最も関心事であり、学習指導要領（解説）をどのように受け止めて実践しているかを把握する上で、重要な項目になる。「創作ダンス」「リズム系ダンス」「フォークダンス」の履修学年を質問した。

3 つの領域とも、中学 1 年時、2 年時、3 年時の順に履修割合が多い。1・2 年が多いのは必修化した影響と考えられる。領域別では「リズム系」は約 8 割、「表現系」は約 6 割、「フォークダンス」は約 4 割が履修しており、多くの学校で「リズム系」を教えている現状が浮き彫りになった。また神戸では表現系、全国ではリズム系を中心に教えていた。

創作ダンス	：中学 1 年は 73.0%、2 年は 47.6%、3 年は 20.9%、履修なしは 15.7%（神戸）
創作ダンス	：中学 1 年は 32.1%、2 年は 26.5%、3 年は 14.9%、履修なしは 38.3%（全国）
リズム系ダンス	：中学 1 年は 30.0%、2 年は 24.3%、3 年は 10.7%、履修なしは 48.1%（神戸）
リズム系ダンス	：中学 1 年は 47.4%、2 年は 38.2%、3 年は 19.5%、履修なしは 18.3%（全国）
フォークダンス	：中学 1 年は 5.5%、2 年は 4.2%、3 年は 1.2%、履修なしは 81.3%（神戸）
フォークダンス	：中学 1 年は 26.2%、2 年は 10.5%、3 年は 4.0%、履修なしは 51.6%（全国）

(4) ダンス 3 領域の授業内容（問 30、問 32、問 34：複数回答）

3 領域とも、選択肢の初めに提示した項目は、学習指導要領や解説に載っている基本的な内容である。「創作ダンス」の授業内容については、「即興的に表現する」は 27.5%（神戸）／19.2%

(全国)、「簡単な作品創作」は58.1%（神戸）／36.3%（全国）、「発表・鑑賞」は68.1%（神戸）／36.7%（全国）、「体育祭や地域で踊る」は7.6%（神戸）／15.9%（全国）であり、基本的な内容よりも、発展的な内容を中心に教わっている。「リズム系ダンス」の授業内容については「リズムに乗り自由に踊る」は13.8%（神戸）／33.9%（全国）、「振付ダンスを踊る」は29.3%（神戸）／45.8%（全国）、「発表・鑑賞」は17.3%（神戸）／36.1%（全国）、「体育祭や地域で踊る」は16.0%（神戸）／13.4%（全国）である。「フォークダンス」の授業内容については「外国のフォークダンス」は5.3%（神戸）／24.9%（全国）、「日本の民踊」は4.8%（神戸）／14.4%（全国）、「発表・鑑賞」は7.1%（神戸）／10.2%（全国）、「体育祭や地域で踊る」は6.4%（神戸）／11.1%（全国）である。即興的な表現やリズムに乗って自由に踊るといった基本をおさえずに、体育祭や地域で踊るという発展応用が多いことが問題である。

1.6. 中学校の柔道授業に対する意識

(1) 柔道授業の成果（問20、問22、問24）

「柔道の授業は楽しかったか」では、「肯定群」は58.0%（神戸）／47.1%（全国）。「柔道の授業で技がかけられるようになったか」では、「肯定群」は54.3%（神戸）／48.3%（全国）。「柔道の授業を経験してスポーツにも関心が持てたか」では、「肯定群」は48.5%（神戸）／41.2%（全国）であり、どの項目も神戸が肯定的であった。

(2) 柔道授業の履修形態（問26、問28）

「柔道の授業は男女共習か別習か」では「男女共習」は21.0%（神戸）／17.7%（全国）、「別習」は65.7%（神戸）／54.4%（全国）、「学年によって違う」は2.0%（神戸）／4.8%（全国）。「柔道の授業はなかった」は3.0%（神戸）／7.2%（全国）。「外部指導者から柔道授業を受けた学年」を聞いたところ、「中学1年」は4.9%（神戸）／7.3%（全国）、「中学2年」は4.1%（神戸）／5.3%（全国）、「中学3年」は1.4%（神戸）／3.7%（全国）と、1割弱であり、「全く受けていない」と答えた者も82.9%（神戸）／70.7%（全国）であった。このことから必修化しても授業を外部委託はしていないと考えられ、特に神戸市の委託率は低いことが分かった。

(3) 柔道の履修学年（問35：複数回答）

履修学年では、中学1年は79.8%（神戸）／64.4%（全国）、2年は53.4%（神戸）／41.9%（全国）、3年は20.3%（神戸）／14.3%（全国）、履修なしは4.8%（神戸）／12.1%（全国）であり、中1、2、3の順に履修割合が高く、必修の影響が考えられる。

(4) 柔道の授業内容（問36、問37、問38、問39、問40：複数回答）

選択肢のなかでもはじめに提示した項目は、学習指導要領や解説に載っている基本的な内容である。柔道の授業内容については、「基本動作」は74.4%（神戸）／64.5%（全国）、「受け身」は83.1%（神戸）／66.4%（全国）、「投げ技」は42.7%（神戸）／42.6%（全国）、「固め技」は68.0%（神戸）／57.1%（全国）であり、神戸の履修率が高いと言える。また、基本的な内容の中でも「受け身」「基本動作」「固め技」は半数以上が教わっているのに比べ、「投げ技」の割合は4割程度であった。

次に、「基本動作」「受け身」「投げ技」「固め技」の具体的な内容を聞いた。

「基本動作」の授業内容については「姿勢と組み方」は76.1%（神戸）／63.5%（全国）、「進退動作」は23.1%（神戸）／24.5%（全国）、「崩し」は34.4%（神戸）／35.0%（全国）であり、基本中の基本である「姿勢と組み方」を重視していることが分かる。

「受け身」については「前回り受け身」は 67.9%（神戸）／55.8%（全国）、「横受け身」は 71.8%（神戸）／59.6%（全国）、「後ろ受け身」は 73.9%（神戸）／58.6%（全国）、「前受け身」は 29.7%（神戸）／25.9%（全国）であり、「前回り受け身」「横受け身」「後ろ受け身」を神戸では約 7 割弱の生徒が教わっていた。

「投げ技」については「支え技系（膝車から支え釣り込み足等）」は 23.3%（神戸）／28.7%（全国）、「刈り技系（大外・大内・小内）」は 25.3%（神戸）／27.9%（全国）、「まわし技系（体落とし・大腰）」は 35.5%（神戸）／33.5%（全国）、「投げ技は教わっていない」は 35.6%（神戸）／24.2%（全国）であり、どの投げ技も神戸では約 3 割の生徒が教わっていた。

「固め技」については「けさ固め」は 74.6%（神戸）／64.2%（全国）、「横四方固め」は 57.0%（神戸）／53.3%（全国）、「上四方固め」は 39.7%（神戸）／40.1%（全国）、「縦四方固め」は 15.7%（神戸）／20.2%（全国）であり、「けさ固め」「横四方固め」は神戸・全国共に半数以上の生徒が教わっていた。

② 教員

1. 対象者の属性

(1) 有効数（問 1）

教職員 448 名で、内訳は神戸市の中学校が 213 名、全国の中学校は 12 府県 235 名である。以下、集計結果を神戸/全国の順に表記していく。

(2) 対象の学校規模（生徒数）（問 2、問 3、問 4）

学校規模の内訳は、小規模校 56 校（26.7%・神戸）／62 校（26.7%・全国）、中規模校 99 校（47.1%・神戸）／91 校（39.2%・全国）、大規模校 55 校（26.2%・神戸）／79 校（34.1%・全国）であり、男子生徒数、女子生徒数の割合も、学校規模の割合とほぼ同じである。

(3) 質問紙調査への記入者、及び教師歴（年数）（問 5、問 6）

質問紙調査への記入者で、一番多いのは保健体育教諭の 152 名（72.0%・神戸）／128 名（55.9%・全国）、次に多いのは保健体育主任 49 名（23.2%・神戸）／68 名（29.7%・全国）である。教師歴は、1～5 年が 81 名（38.2%・神戸）／75 名（31.9%・全国）、6～15 年が 54 名（23.5%・神戸）／70 名（29.8%・全国）、16～25 年が 42 名（19.8%・神戸）／44 名（18.7%・全国）、26 年以上が 35 名（16.5%・神戸）／46 名（19.6%・全国）であり、30 代まででほぼ 6 割を占めている。これは団塊の世代の教員の大量退職の影響で教員の若返りが進んでいると考えられる。神戸市では 5 年以下の経験が少ない教員が多く記入している。

(4) 記入者のダンス経験・指導経験・得意度（問 7、問 8、問 9）

ダンス経験がある者は 50 名（24.2%・神戸）／71 名（31.3%・全国）、指導経験がある者は 198 名（93.0%・神戸）／191 名（81.3%・全国）である。ダンスの得意度について「得意」「やや得意」と答えた「得意群」は 44 名（20.6%・神戸）／68 名（29.0%・全国）である。ダンス経験がある者の割合と得意とする割合は、ほぼ同率である。また、自身のダンス経験の有無にかかわらず、ダンスを指導しており、特に神戸市はその傾向が高い。

(5) 記入者の柔道経験・指導経験・得意度（問 10、問 11、問 12）

柔道経験がある者は 116 名（55.8%・神戸）／111 名（47.6%・全国）、指導経験がある者は 178 名（85.2%・神戸）／122 名（52.8%・全国）であり、自身の柔道経験が指導を促進していると推

察される。柔道の得意度において、「肯定群」は109名(51.6%・神戸)／97名(42.6%・全国)であり、柔道経験群と得意群の割合は、ほぼ同率である。柔道の指導経験者は全国に比べ神戸は高い割合であるため、神戸の生徒も全国に比べ柔道を肯定的に捉えている。その一方で、柔道は生徒の怪我というリスクも高まるため、未経験者が指導するのに慎重な側面もある。そのため、研修会や授業研究が必要であるが、教員の多忙化がそれらを遠ざけている現状も推察される。

ここで、ダンスと柔道を比べてみると、自身の経験が多い方は柔道であり、経験の有無にかかわらず指導しているのはダンスである。また「経験はないが指導する予定もない」と応えたのは、ダンスは2名(0.9%・神戸)／11名(4.7%・全国)、柔道で14名(6.7%・神戸)／90名(39.0%・全国)であることから、柔道は経験がないと指導につながりにくいことがわかる。このことからダンスは誰でもが指導できる領域とも考えられる一方で、柔道の実技指導には自身の経験が大きく影響していると考えられる。

2. ダンスの指導法全般に対する意識

(1) 授業の冒頭で目標を生徒に示す・授業の最後に学習の振り返りをする(問14・15)

「授業の冒頭で授業目標を生徒に示している」と答えた教師は206名(96.7%・神戸)／210名(92.5%・全国)。「授業の最後に学習の振り返りをしている」と答えた教師は197名(92.5%・神戸)／201名(88.9%・全国)である。「文科報告書26」では体育「授業目標を生徒に示している」は97.4%、「振り返りをしている」は92.3%であり、これに比べ本調査は若干低い値を示しているものの、授業の初めで目標を示し、授業の最後に学習の振り返りを行うのは定着しており、神戸がより高い値を示している。

(2) 生徒同士で助け合うことを大切にしている(問16)

「生徒同士で助け合うことを大切にしている」と答えた教師は209名(98.1%・神戸)／215名(95.6%・全国)であり、「文科報告書26」の99.2%と比べ、本調査は若干低い値を示しているが、ダンス授業はグループ学習の形態が多いために、生徒同士の助け合い(学び合い)を重視していると、当然のように考えているのではないだろうか。

(3) 昨年研究授業を行った(問17)

「昨年ダンスの研究授業を行った」と答えた教師は41名(19.2%・神戸)／90名(40.2%・全国)である。「文科報告書26」では「平成25年度に第1学年で保健体育に係る研究授業を行いましたか」という全領域の授業を対象としており、40.8%が「行った」と答えている。両者は異なる質問ではあるものの、本調査では4割近くの中学校教師がダンスの研究授業を行ったことは、驚きでもある。筆者は小学校ではよく研究授業は行うが、中学校ではあまり行わないと思っていたからである。授業研究を行った理由を推測すると、質問紙の記入者は、教師歴が1～5年が3割以上いたこと、初任の教師は研究授業を行う場合が多いこと、ダンスが必修化したことなどが要因とも考えられる。

神戸市より全国が高い割合なのは、調査方法に起因していると考えられる。全国の抽出は各県教育委員会にお願いしたために、研究推進を熱心に行っている中学校が選ばれたのに対して、神戸市は全中学校を対象としたために、この差が出たと思われる。この理由は、他の項目にも当てはまることが多いと推測される。

(4) 教師のダンス指導(問18、問19、問20)

「運動のコツやポイントを指導しているか」の教師への質問に「そう思う」「ややそう思う」と答えた「肯定群」は204名(95.7%・神戸)／207名(91.6%・全国)である。生徒は「保健体育授業について、運動のコツやポイントが分かった」と答えたのは75.4%(神戸)／78.5%(全国)であり、教員のほうが有意に高い値を示している($p<.001$)。ダンス授業で「生徒をほめるようしているか」の質問に、「肯定群」は205名(96.7%・神戸)／220名(97.4%・全国)である。それに比べ「保健体育授業で先生にほめてもらえた」と受け止めている生徒は75.4%(神戸)／78.6%(全国)であり、教員のほうが有意に高い値を示している($p<.001$)。ダンス授業で「ていねいに教えようとしているか」の質問では、「肯定群」は207名(97.2%・神戸)／201名(89.4%・全国)である。それに比べ「保健体育授業で先生にていねいに教えてもらえた」と受け止めている生徒は55.5%(神戸)／62.7%(全国)であり、教員のほうが有意に高い値を示している($p<.001$)。

以上の結果から、指導時の意識を教師側と生徒側で比較して見ると、教師が思っているようには、生徒は思っていないことが明らかになった。つまり、教師は自身の指導を肯定的に捉えているのに対して、そのことが生徒側には同じようには伝わっていないため、教員はこのことをしっかりと認識する必要がある。

(5) どんな資料を活用しているか (問21:複数回答)

「研究会・学校作成資料」147名(71.4%・神戸)／137名(62.3%・全国)、「文科報告書26」では45.7%。「文科省作成資料」84名(40.8%・神戸)／98名(44.5%・全国)、「文科報告書26」では53.9%。「民間企業作成資料」53名(25.7%・神戸)／90名(40.9%・全国)、「文科報告書26」では58.6%。「都道府県・市町村資料」は58名(28.2%・神戸)／83名(37.7%・全国)、「文科報告書26」では41.8%である。

本調査では、「研究会・学校作成資料」の活用のみ「文科報告書26」の数値を上回っており、身近なところの資料を活用していることがわかる。ただし、他の項目は「文科報告書26」の数値より全て低い傾向である。「ダンス授業は何をしたらよいか分からぬ」という教員が多いと先行研究では言われているが、様々な資料を参照してダンス授業に臨んでいる訳でもないことが伺える。本調査でご協力いただいた小学校、中学校の先生方のなかにも、「文科省作成資料」の指導資料集を知らない先生もおられた。文科省のホームページからもダウンロードできるシステムになっている。

(6) 努力を要する生徒への取り組み (問22:複数回答)

比較の対象として「文科報告書26」の数値を挙げてみた。「個別にコツやポイントを教える」は160名(76.2%・神戸)／170名(76.2%・全国)、「文科報告書26」では前者は93.4%である。「友達同士の教え合いを促す」は共に151名(71.9%・神戸)／176名(78.9%・全国)であり、「文科報告書26」では85.2%である。本調査が「文科報告書26」より低い値なのは、ダンスはグループ学習が主に行われていることから、「個別にコツやポイントを教える」働きかけをするよりも、グループで動きづくりをしている時に、グループ全体に働きかけていること。「友達同士の教え合い」は「努力を要する生徒」だけでなく、グループ全体の中で当たり前に行われていることから、敢えて促すことをしていない実態があると推察できる。「練習の工夫を促す」は81名(38.6%・神戸)／115名(51.6%・全国)、「文科報告書26」では50.4%である。「自分の動きの映像を見せる」は31名(14.8%・神戸)／45名(20.2%・全国)で、「文科報告書26」

の設問「授業中に自分の動きを撮影したビデオを見られるようとする」では 25.1% である。ダンス授業では、努力を要する生徒にのみ映像を見せるのではなく、グループの動きを撮影して見せることの方が多いので、文科省に比べ、低い割合になっていると考えられる。

3. ダンス授業の指導実態

(1) ダンス授業の成果 (問 23、問 24、問 25、問 26、問 27)

「ダンスの授業はやっていて楽しいですか」の質問に、教員側の「肯定群」は 141 名 (87.2%・神戸) / 168 名 (75.6%・全国)、生徒側は 58.7% (神戸) / 60.8% (全国)。「ダンスを経験してスポーツにも関心が持てたか」の質問に、教員側の「肯定群」は 76 名 (36.0%・神戸) / 130 名 (58.5%・全国)、生徒側は 45.6% (神戸) / 48.3% (全国)。「ダンスは生徒にとって大切なものであるか」の質問に、教員側の「肯定群」は 141 名 (66.8%・神戸) / 185 名 (83.7%・全国)、生徒側は 80.3% (神戸) / 81.2% (全国)。「ダンスの授業を通して自分が踊れるようになったか」の質問では、教員側の「肯定群」は 79 名 (37.4%・神戸) / 135 名 (60.8%・全国)、生徒側は 46.9% (神戸) / 57.7% (全国) である。教師は生徒以上に、授業を楽しみ、ダンスを経験して「スポーツにも関心が持てた」と思い、「ダンスは生徒にとって大切なものである」と捉えている半面、技能習熟の点では、生徒より若干厳しい評価をしている。しかも神戸の教員は全国の教員に比べると肯定的に捉えていない。これは神戸の生徒と同様、創作ダンスに対してどうすれば技能習得と言えるのかの明確な判定が下せないからではないだろうか。

(2) ダンス授業の履修形態 (問 27、問 31)

「授業は男女共習か別習か」の質問に、「男女共習」で行っていると応えた教員は 77 名 (36.3%・神戸) / 100 名 (45.0%・全国)、生徒側は 35.4% (神戸) / 27.8% (全国)。「別習」は、教員は 106 名 (50.0%・神戸) / 83 名 (37.4%・全国)、生徒側は 52.7% (神戸) / 51.9% (全国)。「学年によって違う」は、教員は 29 名 (13.7%・神戸) / 39 名 (17.6%・全国)、生徒側は 4.8% (神戸) / 8.4% (全国)。ダンスは男女別習、共習の順で多いことがわかった。教員と生徒側に差異があるのは、教員はこれまでの経験を踏まえて答えているのに比べ、生徒は自分が受けた時の履修形態のみを答えているからだと思われる。

次に、「ダンス授業に外部指導者を導入している学年」を教員に聞いたところ、「中学 1 年」では 1 名 (0.5%・神戸) / 13 名 (6.4%・全国)、生徒側は 4.7% (神戸) / 9.8% (全国)。「中学 2 年」は 2 名 (0.5%・神戸) / 16 名 (7.8%・全国)、生徒側は 3.6% (神戸) / 8.5% (全国)。「中学 3 年」は 0 名 (0%・神戸) / 12 名 (5.9%・全国)、生徒側は 1.3% (神戸) / 3.9% (全国) と、どの学年とも 1 割に満たない状況であり、生徒側の認識と同じような割合である。このことから、必修化が完全実施されても、外部指導者の導入はあまり行っていないと考えられる。

(3) ダンス 3 領域の授業内容 (問 28、問 29、問 30 : 複数回答)

中学校のダンスは「創作ダンス・現代的なリズムのダンス・フォークダンス」3 つの領域があり、各内容とも質問の選択肢の初めに提示した項目が、学習指導要領や解説に載っている基本的な内容である。この質問項目が本研究では一番知りたい項目である。

「創作ダンス」の授業内容では、「即興的に表現する」と答えた教員は 68 名 (32.4%・神戸) / 72 名 (34.6%・全国)、生徒側は 27.5% (神戸) / 19.2% (全国)。「簡単な作品創作」は教員 168 名 (80.0%・神戸) / 134 名 (64.4%・全国)、生徒側は 58.1% (神戸) / 36.3% (全国)。

「発表・鑑賞」は教員 169 名 (80.5%・神戸) / 113 名 (54.3%・全国)、生徒側は 68.1% (神戸) / 36.7% (全国)。「体育祭や地域で踊る」は教員 24 名 (11.4%・神戸) / 65 名 (31.3%・全国)、生徒側は 7.6% (神戸) / 15.9% (全国) である。教員の方が生徒側よりも高い割合を示している。具体的には、「簡単な作品創作」「発表・鑑賞」は半数以上が指導しており、基本的な内容である「即興的に表現する」と応用発展の内容である「体育祭や地域で踊る」は、共に 3 割くらいが指導している。創作ダンスも簡単な作品創作をして、発表する流れが多く取られていることがわかる。

「リズム系ダンス」の授業内容では「リズムに乗り自由に踊る」と答えた教員は 65 名 (36.5%・神戸) / 114 名 (52.8%・全国)、生徒側は 13.8% (神戸) / 33.9% (全国)。「振付ダンスを踊る」は教員 103 名 (57.9%・神戸) / 134 名 (62.0%・全国)、生徒側は 29.3% (神戸) / 45.8% (全国)。振付ダンスといつても、教師の振付か、生徒たちの振付か、それとも DVD の映像の振り移しなのかは分からぬ。「発表・鑑賞」は教員 52 名 (29.2%・神戸) / 114 名 (52.8%・全国)、生徒側は 17.3% (神戸) / 36.1% (全国)。「体育祭や地域で踊る」は教員 50 名 (28.1%・神戸) / 69 名 (31.9%・全国)、生徒側は 16.0% (神戸) / 13.4% (全国)。「リズム系ダンス」は「振付ダンスを踊る」「リズムに乗り自由に踊る」「発表・鑑賞」が約半数指導しており、創作ダンスよりも基礎基本を押さえた指導がされていると考えられる。

「フォークダンス」の授業内容については「外国のフォークダンス」と答えた教員は 41 名 (37.3%・神戸) / 103 名 (71.5%・全国)、生徒側は 5.3% (神戸) / 24.9% (全国)。「体育祭や地域で踊る」は教員 36 名 (32.7%・神戸) / 56 名 (34.4%・全国)、生徒側 6.4% (神戸) / 11.1% (全国) である。「発表・鑑賞」は教員 27 名 (24.5%・神戸) / 34 名 (20.9%・全国)、生徒側 7.1% (神戸) / 10.2% (全国)。「日本の民踊」は教員 24 名 (21.8%・神戸) / 54 名 (33.1%・全国)、生徒側 4.8% (神戸) / 14.4% (全国)。「外国のフォークダンス」を体育祭等で踊っていることがわかった。

4. 柔道授業の指導実態

(1) 柔道授業の成果 (問 32、問 33、問 34、問 35)

「柔道は生徒にとって大切なものであるか」の質問に、教員側の「肯定群」は 158 名 (81.0%・神戸) / 127 名 (85.8%・全国)、生徒側は 80.3% (神戸) / 81.2% (全国)。「柔道の授業はやっていて楽しいですか」の質問に、教員側の「肯定群」は 163 名 (84.0%・神戸) / 115 名 (79.3%・全国)、生徒側は 58.0% (神戸) / 47.1% (全国)。「柔道の授業を通して自分が上達したか」の質問では、教員側の「肯定群」は 132 名 (68.4%・神戸) / 108 名 (84.5%・全国)、生徒側は 54.3% (神戸) / 48.3% (全国)。「柔道を経験してスポーツにも関心が持てたか」の質問に、教員側の「肯定群」は 127 名 (65.5%・神戸) / 95 名 (64.4%・全国)、生徒側は 48.5% (神戸) / 41.2% (全国) である。

以上の結果より、教師は生徒以上に、「柔道は生徒にとって大切なものである」と捉えて、授業を楽しみ、技能も向上し、柔道の授業を経験して「スポーツにも関心が持てた」と思っている。この割合はダンスよりも高い。その背景には、柔道を指導した教員は約 6 割で、その多くが柔道経験者であり、なおかつ得意としているため、柔道においては指導の成果を肯定的に捉えていると推測される。

それに比べダンスを指導した教員は、柔道よりも2割も多い約8割であるものの、ダンス経験者や得意とする教員は柔道の半分にも満たない現状がある。この大きな差は全国においても同様であることから、ダンスは誰でもが指導できる可能性があるが、柔道は経験を積まないと指導に結びつかないことを示唆していると考えられる。

(2) 柔道授業の履修形態（問36、問42）

「授業は男女共習か別習か」の質問に、「男女共習」と応えた教員は50名（26.2%・神戸）／50名（34.0%・全国）、生徒は21.0%（神戸）／17.7%（全国）。「別習」は、教員は123名（64.4%・神戸）／82名（55.8%・全国）、生徒は65.7%（神戸）／54.4%（全国）。「学年によって違う」は、教員は18名（9.4%・神戸）／15名（10.2%・全国）、生徒側は2.0%（神戸）／4.8%（全国）である。以上、柔道は別習、男女共習の順で多いことが分った。教員と生徒に差異があるのは、教員はこれまでの経験を踏まえて答えているのに比べ、生徒は自分が受けた時の履修形態を答えているからだと思われる。

次に、「柔道授業に外部指導者を導入している学年」を教員に聞いたところ、「中1」では2名（1.1%・神戸）／6名（4.4%・全国）、生徒側は4.9%（神戸）／7.3%（全国）。「中2」は1名（0.5%・神戸）／3名（2.2%・全国）、生徒側は4.1%（神戸）／5.3%（全国）。「中3」は神戸・全国共に0名、生徒側は1.4%（神戸）／3.7%（全国）と、どの学年とも1割に満たない状況である。「外部指導者を導入していない」と答えた教員は180名（98.9%・神戸）／130名（94.9%・全国）である。柔道のこれらの項目に答えたのは約319名なので、ほぼ全員が導入していないと答えており、必修化が完全実施されても、外部指導者の導入はほとんど行っていないと考えられる。

(3) 柔道の授業内容（問37、問38、問39、問40、問41、問42：複数回答）

選択肢の初めに提示した項目は、学習指導要領や解説に載っている基本的な内容である。授業内容については、「基本動作」について教員は176名（91.2%・神戸）／134名（93.1%・全国）、生徒側は74.4%（神戸）／64.5%（全国）。「受け身」について教員は187名（96.9%・神戸）／137名（95.1%・全国）、生徒側は83.1%（神戸）／66.4%（全国）。「投げ技」について教員は133名（68.9%・神戸）／100名（69.4%・全国）、生徒側は42.7%（神戸）／42.6%（全国）。「固め技」について教員は163名（84.5%・神戸）／110名（76.4%・全国）、生徒側は68.0%（神戸）／57.1%（全国）である。基本的な内容の「基本動作」と「受け身」は約9割の教員が指導しており、続いて「固め技」「投げ技」の順であり、生徒が教わったとする割合と類似傾向である。

次に、「基本動作」「受け身」「投げ技」「固め技」の具体的な内容を聞いた。

「基本動作」の授業内容については「姿勢と組み方」は教員183名（95.8%・神戸）／140名（97.2%・全国）、生徒側は76.1%（神戸）／63.5%（全国）、「進退動作」は教員97名（50.8%・神戸）／71名（42.3%・全国）、生徒側は23.1%（神戸）／24.5%（全国）、「崩し」は教員134名（70.2%・神戸）／87名（60.4%・全国）、生徒側は34.4%（神戸）／35.0%（全国）である。教員は基本中の基本である「姿勢と組み方」と「崩し」を重視している一方で、生徒側は「崩し」はあまり教わった意識はないようである。

「受け身」の授業内容については「前回り受け身」は教員174名（90.2%・神戸）／128名（89.5%・全国）、生徒は67.9%（神戸）／55.8%（全国）。「横受け身」は教員174名（90.2%・神戸）

／137名（95.8%・全国）、生徒は71.8%（神戸）／59.6%（全国）。「後ろ受け身」は教員181名（93.8%・神戸）／137名（95.8%・全国）、生徒は73.9%（神戸）／58.6%（全国）。「前受け身」は教員78名（40.4%・神戸）／52名（36.4%・全国）、生徒側は29.7%（神戸）／25.9%（全国）である。「前回り受け身」「横受け身」「後ろ受け身」は約6割の教員が指導しており、生徒が教わったとする割合と類似傾向である。

「投げ技」の授業内容については「支え技系（膝車から支え釣り込み足等）」は教員93名（49.7%・神戸）／82名（60.3%・全国）、生徒は23.3%（神戸）／28.7%（全国）。「刈り技系（大外・大内・小内）」は教員87名（46.5%・神戸）／77名（56.6%・全国）、生徒は25.3%（神戸）／27.9%（全国）、「まわし技系（体落とし・大腰）」は教員38名（20.3%・神戸）／25名（18.4%・全国）、生徒は35.5%（神戸）／33.5%（全国）、「投げ技は教えていない」教員は38名（20.3%・神戸）／25名（18.4%・全国）、生徒は35.6%（神戸）／24.2%（全国）であり、どの投げ技も約3割の教員が指導しており、生徒が教わったとする割合と類似傾向である。

「固め技」の授業内容については「けさ固め」は教員185名（98.9%・神戸）／133名（96.4%・全国）、生徒は74.6%（神戸）／64.2%（全国）、「横四方固め」は教員157名（84.0%・神戸）／121名（87.7%・全国）、生徒は57.0%（神戸）／53.3%（全国）、「上四方固め」は教員122名（65.2%・神戸）／83名（60.1%・全国）、生徒は39.7%（神戸）／40.1%（全国）、「縦四方固め」は教員33名（17.6%・神戸）／25名（18.1%・全国）、生徒は15.7%（神戸）／20.2%（全国）であり、「けさ固め」「横四方固め」は約5割の教員が指導しており、生徒が教わったとする割合と類似傾向である。

これらをまとめてみると、姿勢と組み方と崩し、受け身（後ろ受け身、横受け身、前回り受け身）を習得したあと、固め技（けさ固め、横四方固め）を教えていたことがわかる。

③ 男女別・生徒教員別等の比較

各項目間の関係性を調べるために統計的な検定を行い、有意差が顕著にみられた質問項目について考察する。有意なものにはその確率p値を、有意でなかったものにはn.s.を表示する。なお、表中の数値は平均値であり、数値が少ない方が肯定している度合いが高いことを意味している。検討する項目は「生徒の性差」「生徒と教員」「教員のダンス・柔道経験や得意度」である。

1. 生徒の性差による違い（表1）

男子と女子によって有意差が顕著にみられた5項目について考察する。「体育やスポーツは得意か」「体育やスポーツは好きか」「体育は大切か」「柔道は得意か」「ダンスは得意か」と、「性」についてクロス集計を行った。その結果、5項目とも有意差($p < .001$)がみられた。「体育やスポーツは得意・好き」「体育は大切」「柔道は得意」については男子が肯定的であり、「ダンスは得意」については女子が肯定的であった。この傾向は「文科報告書26」と同様である。男女の性差については神戸・全国共に地域差はなかった。中学校1・2年では、ダンスも武道も必修化して5年が経過し、性差に関係なく誰もが履修することになったが、本調査結果からは「ダンスは女子、柔道は男子」という図式が見えてきた。昭和22年から昭和64年までの学習指導要領は「ダンスは女子・格技は男子」という履修形態であり、「男（女）らしさ」という固定観念も起因していると推察される。中学女子の運動離れへの対処としては、中学1・2年の必修化の時期に、女子にはとりわけダンスを積極的に導入することが一策である。

次に、「授業は楽しかった」「ダンスや柔道を経験してスポーツにも関心が持てた」「技が身に付いた」の3項目について、生徒の性差との関係をみた（表2）。その結果、3項目とも、女子生徒は「ダンス」に、男子生徒は「柔道」に肯定的であり、性差で違いがみられた。

表1	男子	女子
体育やスポーツ得意	2.10	2.47
体育やスポーツ好き	1.53	1.87
体育は大切なものの	1.68	1.87
柔道は得意	2.76	2.98
ダンスは得意	3.07	2.63

表2	【ダンス】		【柔道】	
質問項目/	男子	女子	男子	女子
授業楽しかった	2.43	1.91	2.16	2.30
スポーツに関心	2.60	2.34	2.31	2.54
技が身に付いた	2.60	2.19	2.22	2.40

*表中の数値は平均値であり、数値が少ない方が肯定している。全項目に有意差($p < .001$)あり。

2. 「授業の成果」に対する意識の違い

(1) 生徒の性差と教員の違い

「授業の成果」をみる2項目「技が身に付いた」「ダンス・柔道は大切なものの」について、生徒と教員間に差があるかをみた（表3）。「ダンス」では教員は生徒に比べ「技が身に付いた」とはあまり思っていないのに比べ、「柔道」では教員は生徒に比べ「技が身に付いた」と思っていることが分かった。これは、ダンス指導では教員自身が模範演技や示範することは、ウォームアップや課題提示やフォークダンスの踊り方などでは多いと思われるが、創作活動をグループ学習で行う際は少なくなる。しかし、柔道では、様々な技を明確に示範することは重要であるため、授業実践を通して教員自身は「技が身に付いた」と認識しているのではないかと考えられる。また、「ダンスや柔道は生徒にとって大切なものですか」の質問に対して、教員間の差をみたところ、ダンスや柔道を「大切だと思っている」より「やや大切だと思っている」の方が高かった。教員にとってはダンスや柔道だけでなく、体育の他の領域も大切だと思っているために、「そう思う」よりも「ややそう思う」が多かったのではないかだろうか。

表3	【ダンス】	生徒	教員	【柔道】	生徒	教員
技が身に付く	肯定群	55.6%	49.4%	肯定群	61.0%	71.1%
	否定群	44.4%	50.5%	否定群	39.0%	59.0%
大切なものの	そう思う	25.5%	25.5%	そう思う	31.8%	31.8%
	やや思う	50.0%△	50.0%△	やや思う	51.3%△	51.3%△

*表中△は限りなくその確率が高いことを意味する。対象の生徒数は30,196名、教員の母数は448名である。

(2) 教員の経験や得意度との違い（表4）

次に、教員のダンスや柔道の「得意」「自身の経験」「指導経験」の差と、「授業の成果」との関係をみた。「授業の成果」は「楽しい」「技が身に付いた」「ダンスや柔道を経験してスポーツにも関心が持てた」「ダンスや柔道は生徒にとって大切なものの」の4項目である。その結果、ダンスが「得意」で「経験」がある教員ほど、「授業の成果」を認めているが、「指導経験」は「授業の成果」に影響を及ぼさないことが分かった。このことから、ダンスでは、自身の「経験」を増やして「得意」になるような機会を増やすことが「成果」につながるのではないだろうか。柔道では「得意」な人ほど「授業の成果」は認めているが、自身の柔道「経験」や「指導経験」は「授業の成果」の項目によって影響に違いが見られた。具体的には「柔道は楽しい」と感じた

のは「経験・指導経験」がある教員であり、「柔道は大切」「柔道を経験してスポーツにも関心が持てた」「技が身に付いた」については、自身の「経験」や「指導経験」は関係していないことが分かった。このことから、柔道では「指導経験」を積むことが、「楽しさ」をより感じることにつながるのではないだろうか。

質問項目	【ダンス】			【柔道】		
	得意	経験	指導経験	得意	経験	指導経験
授業は楽しかった	p<.001	p<.001	n. s.	p<.001	p<.001	p<.001
大切なものの	p<.001	p<.001	n. s.	p<.001	n. s.	n. s.
スポーツにも関心	p<.001	p<.001	n. s.	p<.001	n. s.	n. s.
技が身に付いた	p<.001	p<.001	n. s.	p<.001	n. s.	n. s.

3. 指導方法に対する意識の違い（表5）

次に、指導方法に関する3項目について、生徒（性差）と教員間の関係をみてみた。その結果、「運動のコツやポイントがわかった」「ていねいに教える」と思ったのは男子生徒であり、「先生にほめてもらえた」と思ったのは男女同じ割合であった。このことから、男女共に少しのことでもほめることに留意し、さらに男子生徒には技能を中心に指導すれば、授業への意欲を喚起できると思われる。生徒と教員の受け止め方では、教員は「運動のコツやポイントを指導している」「生徒をほめるようにしている」「ていねいに教えようとしている」つもりでも、生徒側はそれほど肯定的ではなく、両者の受け止め方にギャップがあることが分かった。これらを踏まえれば、教員は今まで以上に意識して、生徒の指導に当たる必要性が示唆された。

表5	男子	女子	有意差	生徒	教員	
	コツやポイント指導	1.93	2.06	p<.001	肯定群 否定群	
ほめる	2.30	2.30	n. s.	肯定群 否定群	59.2% 40.8%	
	ていねいに教える	1.85	1.90	p<.001	肯定群 否定群	97.0% 2.9%
					80.0% 20.0%	93.2% 6.8%

*表中の数値は平均値であり、数値が少ない方が肯定している。

4. 教員の経験や得意度と指導内容の違い

次に、教員のダンスや柔道の「得意」「自身の経験」「指導経験」の差と、「指導内容」との関係をみた。クロス集計の結果を表6・7に示す。

（1）ダンス

学習指導要領（解説）のダンス領域では、表現系、リズム系、フォークダンス（FDと略す）の具体的な内容が提示されている。しかし、先行研究によると、「振付ダンス」や「体育祭等の特別活動で踊っておしまい」にしている現状も見聞しており、それらも考慮して4つの設問を設定した。表現系、リズム系においては、自身の経験や指導経験があるほど、基本的な内容である「即興的に表現する」や「リズムに乗って自由に踊る」を行っていることが分かった。また、指導経験があるほど、創作ダンスや現代的なリズムのダンスでは、作品創作や振付ダンス、作品を発表・鑑賞するところまで、FDでは日本の民踊を行っている傾向があった。これには、教員のダンス得意度や経験はあまり影響していないことが分かった。この結果は、大きな課題もはらんでいる。

表現系では作品創作や発表鑑賞、リズム系では振付や発表鑑賞を行っていても、教員の指導は作品発表までの数時間のやり方（学習の進め方や段取り）だけ指示すれば、何も教えなくとも成立する可能性もあるからであり、教員の得意や自身の経験は反映されていないのかもしれない。

表6

創作ダンス	得意	経験	指導	リズム	得意	経験	指導	F D	得意	経験	指導
即興表現	***	***	***	自由	***	***	n. s.	外国	n. s.	n. s.	n. s.
作品創作	n. s.	n. s.	***	振付	***	n. s.	***	民踊	n. s.	n. s.	***
発表鑑賞	n. s.	n. s.	***	発表	n. s.	***	***	発表	n. s.	n. s.	n. s.
体育祭	n. s.	n. s.	n. s.	体育祭	n. s.	n. s.	n. s.	体育祭	n. s.	n. s.	n. s.

@表中の***はp<.001（有意水準0.1%以下）を示す。

（2）柔道

柔道の指導内容は『中学校学習指導要領解説 保健体育編』の中に例示された内容を設問にしている。教員の柔道の「得意」「自身の経験」「指導経験」の差によって、「指導内容」に違いがあるかをみた。「得意」「自身の経験」「指導経験」がある教員ほど、「基本動作」「受け身」「投げ技」「固め技」を指導していることが分かった。つまり、経験に裏打ちされて得意と思えた教員は指導経験もあり、そうでない教員はこれらの内容を「教えていない、教えられない」とも考えられる。これらの傾向は、ダンスと比べ大きな違いである。この背景には、柔道は習得すべき技が明確であり、経験がなければ教えられないということになる。基本動作、特に姿勢等は経験の有無に関係なく指導しているが、未経験者は投げ技を指導していない。生徒のケガというリスクを考えると投げ技に慎重にならざるを得ないのが現状である。以上の結果から、柔道指導においては「自身の経験」を積むことが必須であることが示唆できた。

表7	指導内容	得意	経験	指導
	基本動作（姿勢・進退・崩し）	***	***	***
	受け身（前回り・横受け身・後受け身）	***	***	***
	投げ技（支え技・刈り技・まわし技）	***	***	***
	固め技（けさ固め・横四方・上四方）	***	***	***
	前受け身	***	n. s.	***
	縦四方	n. s.	***	***

@表中の***はp<.001（有意水準0.1%以下）を示す。

以上の結果の概要と今後の課題については、『体育科教育』に論考を掲載した。また、全国の平成26年度のダンス実施状況が文部科学省から発表されており、地域によって大きな差が見られるが、概して「現代的なリズムのダンス」を指導しているのがわかる。

3. 改訂期のダンスでいま、何がどう問題か『体育科教育』2016年3月

横浜国立大学 高橋和子

1. 女子の体力、過去最高：性差の壁

平成27年度「全国体力等調査」結果が出た直後の朝日新聞（27年12月12日）に、女子の体力が過去最高になったとの記事が掲載された。中2女子の体力低下や運動離れに悩んでいる現場にとっては朗報である。24年度から中学校で必修化されたダンスなら、女子も楽しんで取り組み、運動不足解消にもつながると考えた和歌山県や北九州市は、独自のダンスDVDを作成し、授業で活用したこと。鈴木スポーツ府長官もこの成功例を会見で取り上げている。ダンスは体力向上が主目的ではないものの、他者とかかわりながら全身でリズムに乗って踊ることが、からだを動かす喜びや楽しみにつながったのだろう。このような映像教材の利活用は教育現場では大流行のようである。

この功罪も含め、本稿では、全国の中学生約3万人と教員450名へのダンス・柔道の実態調査^{註1}も紹介しながら、必修化したダンスの成果と3つの問題（壁）に迫り、学習指導要領改訂に向けての発信になればと願っている。

中学生への意識調査によると（表1）、「女子はダンス、男子は柔道」を「得意」「楽しい」「技能が向上」と答えたことから、運動をあまりしない女子にとってのダンス授業は運動欲求をかきたてることにつながる可能性を示唆している。新聞報道はこれを実証する。しかし、ダンスを「やりたいのは女子・やりたくないのは男子」、柔道を「やりたいのは男子・やりたくないのは女子」という顕著な性差は、全運動領域が男女必修になっても色濃く残っている。

ダンス指導の1つ目の壁は「性差の壁」と言える。これについては戦後の学習指導要領に起因しているため、中学校保健体育（ダンス）の改訂の経緯を概観する。昭和22年から昭和64年までは「ダンスは女子・格技は男子」であったが、平成元年に初めてダンスも武道も男女共修という大転換を迎えた。平成10年にはこれまでの創作ダンス（以下、表現系）とフォークダンスの内容に、「現代的なリズムのダンス（以下、リズム系）」が加わった。そして平成20年には中学校1・2年においてダンスや武道も含め、全運動領域が男女必修になった。明治以来の大改革であり、100年以上を経て中学男女のダンス必修が実現したのである。なお、小学校のダンス（現在は「表現運動」という名称）は戦後ずっと男女とも必修である。一方、スポーツ界では学校に先んじて、柔道、レスリング、マラソン、サッカー、水泳等での女性の活躍があり、ダンス界でも歌舞伎舞踊、舞踏、コンテンポラリーダンス、クラシックバレエ、ヒップホップ等での男性の活躍は著しい。学校ダンスの「性差の壁」がなくなるには、もうしばらくの時間が必要だろうが、性差を考慮した指導の工夫によって乗り越えられると思っている。

2. ダンス指導のむずかしさ：指導者の壁

2つ目の壁は「指導者の壁」である。特に男性教員は「踊った・指導した」経験に乏しく、ダ

ンス指導が難しいと言う。経験がないのに教えることが難しいのは当然である。この背景には、「小中高でダンス授業を受けていない、教員養成大学でダンスが必修化されていない、教員採用試験でのダンス実技がない、ダンスの指導内容が分からないので教えたことがない」等、「ないないづくし」が厳然としてある。「指導内容が分からぬ」については、平成20年改訂の学習指導要領解説には、3つのダンス領域の指導内容が詳細に記述されている。それを理解するには教員の体験が必須である。このため行政も研修を積極的に行っているが、中学教員は部活動や生徒指導で多忙を極め、研修を受講できない現状もある。また、運動会や体育祭で踊ったことでダンスをおしまいにする学校もあり、なぜかダンスではこれがまかり通っている。このことは、運動会で障害物競争（走って跳んでタッチ等）をしたから、陸上競技の授業をしないのと同様ではないのか。

そんななか、表現系授業を50年以上にわたり活発に行ってきたのが神戸市である。神戸市では授業作品発表会を学校や区単位で行い、それを経て市大会において上演し、その時の映像を次年度に各学校に配布している。同時に講習会も毎年開催しており、長年のシステム構築により、初心者の中学校教員でもダンス指導ができるようになっている。実態調査で回答した教員の中で、神戸市は5年未満の教員が多いのだが、全国よりダンス指導が12%高い率であった。

ダンス指導を外部指導者に求める学校もあるが、授業を丸投げにしてしまい問題が生じることもある。例えば、外部指導者の目標が「全員そろってカッコよく踊ること」であると、「カウントで縛り、合わない子にはゲキを飛ばして」ダンス嫌いにさせたり、カッコよく踊れない教員は生徒を引き付けられなくなったりしている。授業では何を目指すのかの共通理解を外部指導者と共に図る必要がある。そのためにはコーディネーター役や授業支援システムの構築が必須である。

その成功例が「横浜市芸術文化教育プラットフォーム・学校プログラム」^{註2}である。このプログラムは平成16年度からスタートし、10年間で約560校の横浜市の中学校、特別支援学校で、8万人を超える児童生徒たちが、アーティストと時間をともにしている。コーディネーターは37芸術団体が務め、NPO法人STスポット横浜が事業の東ね役を担っている。ダンスが必修化した24年度からはコンテンポラリーダンスの体験型プログラムが急増し、27年度は24校で実施している。教員からは「コーディネーターの重要性と密な連絡・要望への対応・アーティストの事前の見学・雰囲気づくりやのせ方のすごさ・3日間の充実した体験・普段見られない子の姿」等のほか、子どもからも肯定的な感想が寄せられている。

3. ダンス履修の実態：ダンスイメージの壁

次に、中学必修化後の履修の状況を見てみよう。

生徒が答えた履修学年は、必修が導入された中学1・2年が多く、3領域の履修状況（全国）は、表現系約6割、リズム系約8割、フォークダンス約5割であった（表2）。さらに全国と神戸市を比較すると、全国はリズム系を多く履修したのに対し、神戸市では表現系を多く履修したことが分かる。

教員に3領域の指導内容を聞いてみたところ（表3）、表現系では「簡単な作品創作（応用）」「発表鑑賞」「即興的な表現（基本）」「体育祭等で踊る」の順であった。全国と神戸市で比較すると、全国では「体育祭」、神戸市では「応用」「発表」の割合が高く、有意差が見られた。リズム系では「振付ダンス（応用）^{註3}」「リズムに乗って自由に踊る（基本）」「発表鑑賞」「体育祭等で踊る」の順であった。「振付ダンス」の高い実施率について、教員への聞き取りからは、映像教材

や教師やダンスが得意な子らが提示した振りを習得するやり方が多く行われていた。これは、戦前の振り写し教育の現代版とも言えよう。フォークダンスでは「外国のフォークダンス」「体育祭等で踊る」「日本の民踊」「発表・交流」の順であった。

3つ目の壁は「リズム系=振付」に代表されるように、「ダンスイメージの壁」である。生徒も教員も身近に目にするダンスは、TVに映し出される振付ダンスやよさこいソーラン等であろう。それらはカウントに合わせ皆がそろって決まった振りを習得するダンスである。表現系も作品創作後、リズム系やフォークダンス同様、発表の場を運動会や体育祭に設定することが多い。戦後70年定着してきたダンスイメージが変わるには、あと70年かかるかもしれない。しかし、必修化したいま、「振付・そろえる・見せる」という学習の進んだ段階以前に、子どもに学ばせたいこと。それは、あるがままに感じたままに即興的にイメージを表現すること。リズムに乗って全身で自由に弾んで踊ること。伝承された踊りを交流して楽しむこと。そのようなダンスイメージに、子どもや教員が抱くイメージを変えることである。そのためには、具体的な教材を、どのように指導するのかを中心とした研修会が必要である。研修を通じて、すでに全国で素晴らしい実践が行われている。私もイタリア、ベトナム、キューバで日本のダンス実践を紹介したが、どの国でも絶賛された。

4. ダンスで身に付く力：アクティブ・ラーニングを先導

昭和22年の学習指導要綱においてダンス領域は、戦前の教師が創った既成作品を踊ることから、子どもが思い思いに表現する学習へと大変換があった。このために取られた指導方法は、子どもが主体的に協働して問題を解決していく方法であった。いま、まさに注目されている「アクティブ・ラーニング」を先導してきたのである。

実態調査によれば、生徒が「ダンスで身に付いた力」として、表現系の履修が多い神戸市では「表現力」「創造力」「コミュニケーション力」を挙げ、リズム系の履修が多い全国では「身体感覚」が高い割合であった。リズム系においても本来は、多様なリズムを共有しながら交流する方法を取るべきで、そうなれば身に付く力も多様な広がりを持つと思われる。また、表現系の基本である「即興的な表現」の典型教材「新聞紙」(写真)を60分でも体験した学生は、「レジリエンス」(生きる力)が高まったことも実証されている^{註4}。「表現力」「創造力」「生きる力」は21世紀型能力とも一致し、協働して創っていくダンスへの期待が高まると共に、中教審の改訂への方向とも合致している。

本稿で取り上げた「3つの壁」は、ダンス実践で乗り越えるしかない。子どもの可能性を引き出すことに大きな特徴があるダンス指導法により、教員自身のこれまでの指導観、教育観が大転換した多くの先生を、私は数多く知っている。

註

- (1)平成26・27年度文部科学省委託事業[武道等の指導成果の検証]研究代表者高橋和子
- (2)学校プログラムの事業目的に「横浜の次世代を担う子どもたちの創造性をはぐくみ、ゆたかな情操を養う機会を拡大するためのプログラムを実施する」を掲げ、コーディネーターが授業を支援している(平成26年度報告書より)。
- (3)「振付ダンス」は指導要領解説に提示された技能の内容ではない。解説には「現代的なリズム

のダンスでは、既存の振り付けなどを模倣することに重点があるのではなく、変化とまとまりを付けて、全身で自由に続けて踊ることを強調することが大切である」（中学3年）と明記されている。しかし、学校現場では映像教材やYouTubeからの模倣が多い現状もあるため、あえて選択肢に加えた。

(4)高橋和子「ダンス必修化に対応した即興表現の影響をレジリエンス尺度からみる」

第66回日本体育学会発表資料

表1 中学生の意識

項目	性差	ダンス		柔道	
		肯定群	否定群	肯定群	否定群
得意	男子	24.2	75.8	39.2	60.8
	女子	43.8	56.2	28.5	71.5
楽しい	男子	53.5	46.5	65.5	34.5
	女子	74.3	25.3	58.8	41.2
技能向上	男子	46.4	53.6	65.1	34.9
	女子	64.4	35.6	56.4	43.6

*表中数値は%,n=29,335(男子14,602 女子14,733)

表2 履修学年

	1年	2年	3年	累計	未履修
表現系	全国	32.1	26.5	14.9	61.7
	神戸	73	47.6	20.9	84.3
リズム系	全国	47.4	38.2	19.5	81.7
	神戸	30	24.3	10.7	51.9
フォーク	全国	26.2	10.5	4	48.4
	神戸	5.5	4.2	1.2	18.7
ダンス					81.3

*表中数値は%,複数回答の為100%を超える.

表3 ダンスの指導内容

領域・地域\内容	基本	応用	発表	体育祭	累計
表現系	全国	30.6	57	48.1	27.7*** 163.4
	神戸	31.9	78.9***	79.3***	11.3 201.4
リズム系	全国	48.5***	57	48.5***	29.4 183.4
	神戸	30.5	48.4	24.4	23.5 126.8
フォーク	全国	43.8	23	14.5	23.8 105.1
	神戸	19.2	11.3	12.7	16.9 60.1

*表中数値は%,複数回答のため100%を超える.***p<.001,n=448(全国235,神戸213)

フォークダンスの基本の欄は外国のフォークダンス、応用は民踊を示す.



参考：都道府県別・ダンス実施(予定含む)種目

(単位:学校)

番号	都道府県名	①創作ダンス	割合	②フォークダンス	割合	③現代的なリズムのダンス	割合	④その他	割合
1	北海道	6	30.0%	3	15.0%	19	95.0%	0	0.0%
2	青森	9	45.0%	8	40.0%	16	80.0%	0	0.0%
3	岩手	9	45.0%	5	25.0%	16	80.0%	0	0.0%
4	宮城	11	55.0%	5	25.0%	17	85.0%	0	0.0%
5	秋田	12	60.0%	7	35.0%	18	90.0%	0	0.0%
6	山形	7	35.0%	5	25.0%	17	85.0%	0	0.0%
7	福島	5	25.0%	3	15.0%	20	100.0%	0	0.0%
8	茨城	8	40.0%	6	30.0%	18	90.0%	0	0.0%
9	栃木	14	70.0%	13	65.0%	13	65.0%	0	0.0%
10	群馬	8	40.0%	12	60.0%	18	90.0%	0	0.0%
11	埼玉	13	65.0%	5	25.0%	18	95.0%	0	0.0%
12	千葉	14	70.0%	8	40.0%	18	90.0%	0	0.0%
13	東京	9	45.0%	6	30.0%	17	85.0%	0	0.0%
14	神奈川	13	65.0%	8	40.0%	13	65.0%	0	0.0%
15	新潟	4	20.0%	3	15.0%	18	95.0%	0	0.0%
16	富山	13	65.0%	5	25.0%	18	95.0%	0	0.0%
17	石川	10	50.0%	6	30.0%	18	95.0%	0	0.0%
18	福井	11	55.0%	6	30.0%	18	95.0%	0	0.0%
19	山梨	7	35.0%	8	40.0%	18	90.0%	0	0.0%
20	長野	6	30.0%	5	25.0%	17	85.0%	0	0.0%
21	岐阜	7	35.0%	2	10.0%	20	100.0%	0	0.0%
22	静岡	9	45.0%	8	40.0%	13	65.0%	0	0.0%
23	愛知	14	70.0%	3	15.0%	15	75.0%	0	0.0%
24	三重	9	45.0%	4	20.0%	15	75.0%	0	0.0%
25	滋賀	6	30.0%	6	30.0%	18	90.0%	0	0.0%
26	京都	10	50.0%	5	25.0%	18	90.0%	0	0.0%
27	大阪	8	40.0%	4	20.0%	18	90.0%	0	0.0%
28	兵庫	16	80.0%	2	10.0%	15	75.0%	0	0.0%
29	奈良	7	35.0%	3	15.0%	16	80.0%	0	0.0%
30	和歌山	7	35.0%	3	15.0%	16	80.0%	0	0.0%
31	鳥取	7	35.0%	1	5.0%	16	80.0%	0	0.0%
32	島根	8	40.0%	9	45.0%	14	70.0%	0	0.0%
33	岡山	9	45.0%	9	45.0%	18	90.0%	0	0.0%
34	広島	9	45.0%	8	40.0%	16	80.0%	0	0.0%
35	山口	9	45.0%	4	20.0%	14	70.0%	0	0.0%
36	徳島	4	20.0%	16	80.0%	10	50.0%	0	0.0%
37	香川	6	30.0%	7	35.0%	13	65.0%	0	0.0%
38	愛媛	9	45.0%	10	50.0%	15	75.0%	0	0.0%
39	高知	12	60.0%	7	35.0%	11	55.0%	0	0.0%
40	福岡	8	40.0%	3	15.0%	14	70.0%	0	0.0%
41	佐賀	2	10.0%	8	40.0%	17	85.0%	0	0.0%
42	長崎	12	60.0%	9	45.0%	14	70.0%	0	0.0%
43	熊本	11	55.0%	9	45.0%	14	70.0%	0	0.0%
44	大分	12	60.0%	8	40.0%	12	60.0%	0	0.0%
45	宮崎	12	60.0%	7	35.0%	10	50.0%	0	0.0%
46	鹿児島	6	30.0%	14	70.0%	11	55.0%	0	0.0%
47	沖縄	4	20.0%	9	45.0%	13	65.0%	0	0.0%
合計		422	44.8%	305	32.4%	746	79.4%	0	0.0%

※「割合」のうち、都道府県欄については都道府県毎の調査対象校(20校)に占める割合であり、合計欄は全調査対象校(940校)に占める割合である。

※網掛け部分については、各都道府県で実施予定が最も多い運動種目

公立中学校保健体育科におけるダンスの実施状況

I. 調査内容

各都道府県域内の公立中学校各20校(全国940校)を対象に、平成26年度の保健体育科におけるダンス領域の実施状況を抽出調査

II. 調査実施期間

平成26年11月～平成26年12月

III. 調査結果の概要

①平成26年度実施(予定を含む)種目(複数回答可)

種目	割合
①創作ダンス	44.9%
②フォークダンス	32.4%
③現代的なリズムのダンス	79.4%
④その他	0.0%

※都道府県別については、別添「参考」を参照

②複数種目を実施(予定を含む)

区分	割合
複数種目を実施している学校	46.4%

③ダンスに配当する単元の時間数

区分	平均
年間平均授業時数	8.8 時間

④指導体制

区分	割合
地域の人材を活用	10.0%

4. ダンスはどんな扉を開くのか

高橋和子

公益社団法人日本女子体育連盟機関誌『女子体育』巻頭言 2015年4月掲載

「開けゴマ」の呪文は未知の世界に通じる

今年も美しい春の季節がやってきました。進学、就職、引っ越しなどの大きな出来事を迎える人も、日常を淡々と過ごす人も、誰もが心なしかウキウキ、ドキドキする季節です。春の扉を開けると、どんな風景が見えるのでしょうか。ここで「春」の語源にふれてみます。冬が去って万物が「晴」れやかに開けるとき。草木が「張る」とき。田畠を「墾(ハ)る」とき。何かを「発(ハ)る」とき。どの語源も納得がいきますが、実際に春の「ハッ！」と発音してみると、からだの中から何かが飛び出てくるようで、合点がいきます。次にお話の世界を覗いてみます。『日本神話』では、アメノウズメノミコトの扇情的な踊りと天手力男の力で、天照大神を岩戸から引っ張り出し、暗闇から太陽と平和な秩序を取り戻すことができました。『アリババと40人の盗賊』では「開けゴマ」と唱えると宝物が隠された洞窟が開き、アリババは財宝を手に入れることができました。盗賊の頭領に命を狙われたときも、召使の踊りでアリババは命拾いしました。「開けゴマ」の呪文は、「ゴマ」を炒るとパンと弾けるので、それが「開く」に通じると考えられています。米国の幼児向け番組「セサミストリート」は呪文「OPEN SESAME」からきています。子どもたちに「新しい世界や知識の扉を開いてほしい」願いが込められており、教育も扉を開く素晴らしいアイテムなのです。このように昔は踊りや魔力や呪文で、今は知識や科学技術や教育も加わり、扉を開ける鍵になっています。古今東西、扉を開けば、未知（路）の世界に通じると言わされてきました。

ダンスの力はどんな扉を開けるのか

人間が言葉を持たない時代からあったダンス、グローバル化した時代でも存続し続けているダンスは、どんな扉を開くのでしょうか。言い換えればダンスをやることによって、どんな力が身に付くのでしょうか。本連盟は2014～2015年度は「ダンスの力をすべての人へ」をテーマに掲げて、年間の事業を展開してきました。2014年の創立60周年記念大会では、国や年齢や性別を越えて、ダンスで一体になりました。2013年の国際女子体育会議第17回キューバ大会においては、言語や宗教や思想を越えて、ダンスに興じることができました。このようにダンスは多くの人と「感じ合える力」を持っています。

2012年日本の中学校1・2学年においては、武道・ダンスが男女必修化しました。国内外からも注目された出来事です。ダンスのコミュニケーション力にも期待が寄せられています。必修化して3年が経過しましたので、生徒1万人にダンスを通してどんな力が付いたかを聞いてみました^註。「表現力」「身体感覚」「創造力」「コミュニケーション力」の順でした。また、履修したダンスの種類と具体的な内容も聞きました。一番多かったのは「現代的なリズムのダンス」です。約8割の生徒が受けており、「振付ダンス」の「発表」が多く、「リズムに乗り自由に踊る」と答えたのは5割弱でした。「創作ダンス」は約6割が受けており、その内容は「簡単な作品創作」の「発表」が多く、「即興的に表現する」と答えたのは約3割でした。「フォークダンス」は約4割が受けており、主な内容は「外国のフォークダンス」でした。学習指導要領（解説）等で提示されている「基本的な内容」はあまり教えられていないことがわかりました。ダンスの基礎的・基本的な内容を体験してこそ、個性的で独創的なダンスが生まれるではないでしょうか。

性差が顕著に見られたのは、女子はダンスを、男子は柔道を、より肯定しており、性差の壁がまだ厚いことを実感しました。また、女子は褒めて指導すれば、男子は運動のコツやポイントを指導すれば、運動意欲が喚起されることが明らかになりました。リズム系ダンスの指導法では、ダンス教材映像をスクリーンに流し、生徒はそれをアレンジして発表することも多いようです。ここでの指導者はどんな役割を果たしているのでしょうか。（平成26年度文部科学省委託研究「中学校における柔道・ダンスの指導状況等の調査」高橋和子2015）。

指導者は色々な教材や指導法を駆使して、指導に挑戦しなければ受講者の様々な能力や個性を引き出すことはできません。世阿弥の『風姿花伝』には、「物数を尽くし、工夫を極めて後、花の失せぬところをば知るべし」と書かれています。稽古の重要性を説いているこの言葉を指導に置き換えてみると、「指導の鍛錬をし尽くし、ダンス技術の数々を極めし尽くした後に、はじめて個性的で独創的な子どもたちが生まれてくる」のではないかでしょうか。

ダンスは、まるごとのからだで同じ時代を生きる国内外の人たちに、何かを伝えることができる、未知なる身体表現です。それを引き出すのは指導者です。

註：平成26年度文部科学省委託研究「中学校における柔道・ダンスの指導状況等の調査」2015. 研究代表者 高橋和子

5. 日々のダンス・身体活動を振り返る視点 ～数値・楽しさ・レジリエンス・ふれあい～ 『女子体育』ダンスマーブメント 2015年10月掲載

高橋和子

1. 数値にこだわる

古今東西、長寿は万人が望むことである。そして、自分らしく幸福な人生を送るためには、健康は欠かせない条件になっている。ひとたび健康を損なうと、そのありがたみを感じ、自分の生活に健康处方をほどこし始める。一番簡単なのは体重測定。昨今は体脂肪も同時に測れるようになっている。年齢があがってくると血圧や血糖値、中性脂肪の数値も気になるし、がん検診も欠かせない。腸内環境を整えるには乳酸菌、80歳までは20本の歯をキープ等、自分の健康は自分で守ろうとする人が増えている。かく言う私も、唾液で遺伝子情報を読み取り、病気にかかるリスクを判定する遺伝子検査を行ったばかりである。数値が一つの指標（評価=振り返る材料）として、日常生活においても活用されることが多い。本稿では、「振り返りから学ぶ」という月テーマに対して、自身のダンスや身体活動や指導法を改めて振り返り、次へのステップに役立てみたいと思う。

さて、2014年の「体力・運動能力調査」結果が、創設したばかりのスポーツ庁から発表された。その中で注目すべき点は「スポーツと健康との関係」である。運動している高齢者ほど、日常生活の基本動作（立ったままでズボンやスカートがはける等）が維持できていることがわかった。60歳以上のジムに通う運動愛好家が10年前に比べて増えていることも、経済産業省から報告されている。ジムやダンスに通い始めてからは日々の生活の中に歩くことを積極的に取り入れた結果、息切れがしなくなったり、つまずいて転ぶことがなくなったり、四季のうつろいが目に入ったりと、自身に起こる変化に気がつくことも多くあるようである。この「変化に気づく」ことが振り返りの視点になる。また、高齢者にとってのジムは社交の場なのだという。子どもの頃は体育が不得意だったとしても、健康志向が動機であったとしても、さわやかな汗を流し大笑いできる場であると、人は集まり、身体活動が継続できる。ここでは数値より「楽しさ」が重要になる。

2. 楽しさにこだわる

学校の教員も「体を動かす楽しさを伝える」ことを優先しており（朝日新聞 2015.10.8）、JAPEW-DMIL (DANCE MOVEMENT INSTRUCTOR LICENSE) の指導者たちも、「楽しさ」の重要性を感じておられることだろう。身体を動かすこと、女性にとって特にダンスが、「楽しさ」を引き起こすことは多くの研究者が述べており、体験上も納得がいく。その「楽しさ」は、「学ぶ場の雰囲気」（自由で開放的で肯定的な人間関係）や「学びの勢い」（安全で清潔で規律が明確な中で活動量や学びの密度が高い）や「学びの成果」に影響を受けている。そのため、指導者は日々、よい雰囲気や勢いのある活動や成果をあげることに、注意を向けなければならない。特に、「学びの成果」をあげるには、今日やるレッスン（課題）を明確に示し、達成できる手立てを個々に応じて与えることが大切になる。その課題は目の前の対象者に応じて、柔軟に設定することも必要である。例えば、膝が痛い場合には座ったままとか、腕があがらない場合には肩までの高さでよいとか、走るところは歩いてみようとか、無理をさせないような配慮の一言が救いになる。受講者はまじめで頑張り屋さんが多いので、指導者のこの一言によって、楽に活動ができるようになる。その一方で、もう少しやれるのにあきらめてしまう人には背中を押す一言があると、成長を促すこと

ができる。このように、個々の心身の状況を把握した上で指導を心がけたいものである。

時には、課題に対して受講者自身が小さな目標を設定することも、活動が活発化するし意欲的に取り組むことにつながる。「小さな目標達成」は自信につながり、これも振り返りの視点になる。そのためには、受講者がいつも受け身ではなく、「私が主人公になれる」仕掛けがレッスンのなかで体験できれば、生活の中に還元できる。例えレッスンに来られない日があっても、家でストレッチやウォーキングや呼吸法や音楽をかけての一人レッスンなどを行う姿勢が醸成され、素晴らしい効果があらわれる。私たちは通常何かをやる時には、計画をたて、行ってみて、どうだったのかを振り返る。この流れをひとくくりにして考える癖がついていれば、うまくいかなかつた時には、その原因を探し、同じ失敗を繰り返さないようになる。指導者も受講者も学びの場をどうデザインしたのか、「雰囲気・勢い・成果・楽しさ」は十分満たされていたのか。なぜ、レッスンや発表会を行うのか、貴方にとてダンスとは何かを一度立ち止まり振り返ってみることも、大事かもしれない。ちなみに私がダンスに没頭するゆえんは、「生きる力」を得たいためである。

3. レジリエンス（生きる力）にこだわる

「生きる力」は「レジリエンス」（立ち直る力）とも言われている。昨今の度重なる天災や人災を目の当たりにするたびに、「人生は何が起こるかわからない」と思わずるを得ない。そんな危機的状況に陥っても立ち直る力を得る方策として、楽しくリラックスできる活動や定期的な運動の有効性があげられる。このことは生涯スポーツを推進する根拠にもなっている。現に 104 歳になられた今も、年間 100 回以上の講演会を行う日野原重明聖路加病院名誉院長は、健康長寿の秘訣として、呼吸法、歩き方、寝方など、身体運動に気を配っておられる。それ以上に、「生き甲斐を持って生きる」「若い人と日常で触れ合う」ことを大切にされ、哲学者マルティン・ブーバーの「人は、新しいことを創ることを忘れない限り、いつまでも若い」の言葉を紹介している。

これらのこととは、DMIL 指導員の方々や輝いている高齢者の方々にも同様に感じることである。彼ら彼女らは、身体運動の他にもどんなことに気をついているのだろうか。レジリエンスを高める要因とされる「健康、教育、情緒的・行動的発達、家族関係と仲間関係、アイデンティティ、社会的自己表現」を次にあげ、自身に足りないことを振り返るヒントにしたい。

【健康】 気はながく、心はまるく、腹たてず、口をつつしめば、命ながらえる

【教育】 潜在能力（五感、直感、創造性、想像性）、問題解決能力、自律的学習力、

場を読み全体を見る力、矛盾を受け入れ多様に開かれた柔軟性、長期的な展望

遊び心にみちた好奇心を發揮し主体的に学ぶ

【情緒的・行動的発達】 感情の調整、苦境を受け入れ前に向かって行動する、希望を持つ
きっぱりと行動する、変化を人生の一部として受入れる

【家族関係と仲間関係】 関係をつくる、共感性、コラボレーション能力

【アイデンティティ】 自信、自分を肯定的に捉える、自己発見の機会を探す

【社会的自己表現】 ソーシャルスキル、コミュニケーション能力、実現可能な目標を持つ、生き残るという強い意志を持つ

4. ふれあいにこだわる

最後に、私と学生たちが行った「多様な人と日常で触れ合う」実践を紹介する。このような事業を仕掛けるには、大学や自治体への企画説明や情報提供などを含め少しの手間が必要になるが、それ以上に私たちにもたらされる宝物が多い。

赤ちゃんの動きを模倣する「人間関係論」では、赤ちゃん(人)は興味があることに向かって移動することに学生は気づく(写真④⑤)。赤ちゃんと保護者を対象とした「ふれあいダンス教室」

(写真④⑥、足立美和共立女子大学准教授協力)では、しがみつく子や自由奔放に踊る子がいることを知る。地域住民と一緒に活動する「ダンスエクササイズ」では、ペアを組んで踊る時に個々に応じた配慮の必要性を実感する(写真④⑦)。20~90歳代まで参加した放送大学の「しなやかに生きる身体論ワーク」では、年齢や肩書や経験に捕らわれず表現世界に興じることができるダンスの魅力を感じる(写真④⑧「群像：オレらヤンキー！」)。

以上、本稿では「振り返る視点」について述べたが、目標をどう設定するかで、この視点が変わることは当然である。勇気をもって新しいことを創めよう！



第2章 リズム系ダンスの取組み

【第2章の概要】

ここでは、リズム系ダンス（中学校・高等学校では「現代的なリズムのダンス」という名称）の指導の取組みについて、次の3項目について記述した。

①映像教材の有効活用、②導入段階での習得型実践事例、③リズムダンスコンクールの実態
リズム系ダンス指導においては、本調査においても、映像視聴や振付ダンスが多くなされている現状が見られたことから、映像教材の有効活用のための留意点や、導入時に教員が提示する簡単な振りを手掛かりにして、習得型の実践事例を紹介する。この事例は、高田康史先生（吉備国際大学）に掲載のご協力を頂いた。本来、リズム系は「自由に踊る」ゴールフリーの学習法であるが、「習得型」を提示することによって、リズム系の学習法を考える契機になればと思っている。また、リズムダンスコンクールは現在、小学生から大人まで相当数の開催があり、大勢がエントリーして競い合う状況である。その中で、クラスや学校単位で出場することが条件になっている「全国小・中学校リズムダンスふれあいコンクール」について紹介する。

1. ダンス授業における映像教材の活用:和歌山県・北九州市の取組みをもとに

横浜市立橘中学校 三浦明希子

1. はじめに

中学校においてダンスが必修化して3年が経ち、生徒にとって男女ともにダンスの授業を行うことに抵抗はなくなってきた。地域のスタジオやスポーツクラブのプログラムでもダンスが気軽に習える時代になり、特にリズムダンスが好きだという生徒が多いように感じる。25年前に中学生だった私の頃と比べて、いまの生徒にとってのダンスは、余程、身近になっている感がある。

ダンスの単元は、それぞれの学校の実態に合わせ、「創作ダンス」「フォークダンス」「現代的なリズムのダンス（以下、リズムダンスと略す）」から選択して授業を行うようになっている。生徒の興味関心が高いことから、リズムダンスを選ぶ学校は多い。しかし、ダンスに馴染みのない指導者にとって、教えるのには苦労が伴う。

DVD等の映像教材は、そのような状況下では心強いアイテムである。必修化に向けて、ここ数年ダンスのDVD教材の種類も増えている。ステップや様々な振りを、映像のように真似をすれば、形としてダンスが踊れるようになる。できるようになったという満足感も得られるかもしれない。しかし、見本通りに踊れるようになることが、この単元の目標ではない。映像教材を使って授業を行う際、指導者が留意しなければならない点があるよう思う。

本稿では、ダンスの映像教材を独自に制作し、積極的に普及を行った和歌山県教育委員会と北九州市教育委員会のDVD教材をもとに、授業に取り込みやすい映像教材について考察する。また映像教材の活用の仕方について、考えていきたい。

2. 和歌山県の取組み

2.1. 体つくり運動とダンス授業の取組み

和歌山県では児童・生徒の体力低下を改善するために、課題となる体力要素を盛り込み、音楽

を効果的に活用した「紀州っ子かがやきエクササイズ&ダンス」(2014年)を開発した。体育の授業で、小学校では「リズムに乗って、心が弾むような動きのエクササイズ」を、中学・高校では「全身を使って仲間と楽しく踊れるダンス」を実施している。そして、同年「紀州っ子かがやきダンス」をベースにして、生徒の創作意欲をかき立て、新たな動きづくりに発展させるための多様な「動きの参考例」と「解説書」を集録した指導用DVDを作成し、中学・高校での活用を促進している。運動やスポーツの楽しさを実感させること、体力の向上、中高生女子の運動離れを食い止めること、小学校体育の体つくり運動領域、中学・高校体育のダンス領域の充実させることをねらいとし、和歌山スタンダードプログラムとして、県内すべての学校で取り組み、定着を目指している。筆者もそのDVDを視聴し、以下、特徴を考察する。

※全国知事会 先進政策バンク先進政策創造会議HPを参照

2.2. ダンスDVD『STORY』(中学生用)の内容構成

アップテンポで歌詞付きの曲に合わせ、男女2人のペアで作品を踊っている。弾みながら行う振りやステップが多いため、4分強の作品を踊りきるとかなりの運動量である。フロアを使った振りや、相手を意識しながら踊る構成なども盛り込まれている。振りの種類が70もあり、参考になる反面、一曲すべてを踊るには、かなりの練習時間が必要であるように思う。DVDには、1曲を通して踊られたものの他に、背面で踊られたパターン1、ステップ等をアレンジしたパターン2、作品中の8つのステップについて解説しているステップ練習編の4部構成となっている。

また、小学生用エクササイズの『ワクワクわかやまワンダーランド』、高校生用ダンスの『キミだけの場所』も同DVDに収録されている。

2.3. 『プログラムを発展させる為の指導DVD:観る・知る・わかるダンスの授業』

『STORY』の簡単なステップを取り出し、そのステップを生かしてひと流れの動きが作れるよう、たくさんの例が示されている。リズムパターンの変化のさせ方、ステップに腕の動きを加えてアレンジする方法、向きを変えたり、空間のくずし等、構成の例示も多く、オリジナル作品に仕上げていく際の参考になる。ダンスに馴染みのない指導者にとっても、どのようにステップを変化させ、工夫させていくかというヒントが多く、指導に活かしやすい。リズムダンスの学習だけでなく、創作ダンスの学習にも活用できるよう、工夫されている。

3. 北九州市の取組み

3.1. ダンス授業の取組み

北九州市教育委員会は、ダンスを通して楽しく運動に取り組む習慣づくりを目的として、小学校版DVD『北九州市キッズダンス』(2009年)を制作し、市内小学校に配布した。また、2012年ダンス必修化を受けて中学校版DVDを作成し市内中学校に配布すると共に講習会を開催し、教員が教材を活用できるような取組みを行ってきた。その結果、DVD教材をダンスの準備運動や様々な場面で活用されるようになった。

3.2. 『Dance for the future』(中学生用)の内容構成

ヒップホップの基本的なステップをもとに、4人構成で作品を踊っている。右に移動した後は左に移動するなど、対称の動きが続き、体軸をバランスよく使えるように工夫されている。

地面を踏みしめるステップや跳ね上がるようなステップにより、下半身の筋肉を効果的に使い、一曲踊りきることで持久力向上にも効果が期待できる。また、ペアダンスのパートや、4人がステップを踏みながら移動して構成を変化させる場面もあり、仲間と一緒に踊る楽しさも感じやすい内容となっている。

DVDは比較的簡単な8種類のステップを繰り返しながら踊る「基本編」、動きをアレンジした「応用編」、ヒップホップのアップやダウンのリズム練習ができる「基本的のステップ」の3部構成で編集されている。

3.3. 『北九州市キッズダンス』（小学生用）

全身を使ってリズムに乗り踊ること、多くの友達とペアになって笑顔で踊ることをテーマとしたダンスである。足のステップだけでなくへそ（体幹）を動かして「弾み」、パートナーをチェンジしながら多くの「交流」が行える内容となっている。振り付けは、1時間の授業で覚えられる簡単なダンスである。2人組で向かい合い手をつないでスキップ（弾む）ところから始まり、相手を意識しながら5種類のステップを行う。最後のステップで相手とさよならをし、パートナーをチェンジする内容である。

DVDは教師編と児童編の2部構成で編集されている。教師編には児童を相手に、ダンスのベラン指導者が授業している場面が盛り込まれている。模範演技はもちろん、導入や振りの教え方、通じで踊っている際によりテンションを上げるための声のかけ方等、実際の授業で参考になる部分が多く見られる。このDVDを児童に見せながら授業を行うこともできるが、教師の指導力を高めることに主眼をおいたDVDもある。

4. 『STORY』『Dance for the future』の活用例

- ① 1時間の授業でDVDにある2～3ステップの習得を目指す。その授業内で隊形やステップの順番をアレンジし、グループ発表する。特に1、2回目の授業では、人前で踊ることに慣れていないため、数グループが同時に発表するよう留意する。前半の授業では、人数を含めグループを変えながら行い、様々な構成を考えたり、発表が楽しめたりするよう導いていく。授業の回数が進むにつれ、固定グループにし、発表も交流会へとシフトさせる。オリジナルの振付けやポーズ等も加えて、それぞれの作品に仕上げ、最終的に全体で交流会を行う。
- ② 『Dance for the future』の「基本のステップ」の部分を授業で取り上げ、アップやダウンの練習をウォーミングアップとして行う。ステップを踏むときに、足の運びだけではなく、体幹（胸やお腹）をどのように動かすかを学習することができる。
- ③ DVDにあるステップの中からグループで1、2種類選択する。この時他グループとは違うステップを学習できるようにする。授業の終わりには発表順を決めて交流会を行う。次の段階ではグループを合体させ、それぞれ練習したステップを生徒同士で教え合い、人数とともに作品もグレードアップさせていく。

5. 映像教材を活用した「現代的なリズムのダンス」の授業

ダンスの単元で私たち教師が、授業で行うべきことは何か。生徒が学習すべきことは何か。DVD

活用の授業を展開する際、再度、学習指導要領を開き、目標を確認すべきである。「現代的なリズムのダンス」の単元目標は「ロックやヒップホップなどのリズムの特徴をとらえ、変化のある動きを組み合わせて、リズムに乗って全身で自由に踊ることができるようする(技能)」とある。

見本の映像を前に踊っている時点では、「全身で自由に踊ること」はできない。視線は前からははずすことができず、振りを一生懸命真似しているにすぎない。DVDを流しっぱなしでは、この状況を打破できない。なるべく早く生徒自身で踊ることができるよう、導いていきたい。また、正確に踊ることが重要ではなく、「リズムに乗って全身で」踊ることが目標であるので、そのためには、振りやステップを間違えてもいいという雰囲気をつくっていくことも大切になる。正確性を求めるとき、生徒は失敗をおそれて委縮してしまい、逆効果である。

このように考えると、映像教材の作品を全てそのまま踊り、単元目標を達成することは、とても難しいように思う。映像のダンスを見本として練習を続けるとき、イメージが頭に残り、映像のように踊ることがよいと勘違いしてしまう。自由に踊ることが難しくなってしまう。覚えて踊ることも楽しい学習内容ではあるが、「変化のある動きを組み合わせて、リズムに乗って全身で自由に踊る」ことが目標である以上、振りをアレンジして踊ることができるよう導く方が効果的だと思った。

映像教材の選び方として、振付は覚えやすくアレンジがしやすいもの、少し練習すればできる程度のステップが提示されているものがよいと思う。長い振付が続くよりも、同じステップのアレンジが多く例示されていた方がよい。また、ダンスの振付映像だけでなく、それをオリジナルの作品に仕上げていくためのノウハウがわかる教材が、特にダンスに馴染みのない教師に必要である。

最後になるが、今回2つの教育委員会が企画したDVD教材を視聴した。和歌山県内・北九州市内の全中学校に配布されていることを知り、大変羨ましく思った。和歌山県は『STORY』の制作だけでなく、教育委員会のWEB上に単元計画や学習カード例、動画や音楽を配信している。また、教員のダンス指導力向上のための補助教材『プログラムを発展させるための指導DVD』も作成している。特にこの教材は振り真似で終わらずリズムダンス授業を行う際に必要なノウハウが詰まっており、素晴らしいと思った。北九州市ではDVDの配布後、ダンスの指導に困らないように教員対象の講習会が開かれている。地元のダンスインストラクターが『Dance for the futuer』の振付を行ったため、中学校で直接指導にあたることもあったようだ。

近隣学校で同じ教材を所有していれば、活用方法などの情報交換も容易にできるだろう。ダンスに馴染みのない指導者にとって、身近な先生に授業の相談ができる環境は、ありがたいものだ。共有している教材が、より自由で楽しいダンスの授業を作り上げる、きっかけになるのではないかと思った。

ダンス必修化によって全国の中学生が嬉々として踊ることをもたらしたならば、素晴らしいことである。生徒には、リズムダンスのよさだけでなく、イメージを表現できる創作ダンスや、伝統文化を体験できるフォークダンスにもふれてほしい。そのためには、良質の教員向け講習会や、本質を抑えた指導者による出前授業などが手軽に利用できることを期待したい。

2. 導入段階での習得型実践事例 吉備国際大学 高田康史

「小学校体育科におけるリズムダンス授業の習得－活用型授業モデルに関する事例研究」

日本教育大学協会全国保健体育・保健研究部門舞踊研究会『舞踊教育学』2016 年掲載

1. はじめに

平成 24 年度ダンス領域の男女必修化が完全施行されて以降、リズム系ダンス（中学校における現代的なリズムのダンス及び小学校におけるリズムダンス）の指導方法・指導内容に関する実践及び研究は以前にも増して進んできている。ダンス領域全般の課題として、「系統的な内容の整理」（片岡, 2000）が挙げられているが、これは、実施率が増加傾向にあるリズム系ダンスにもいえることである。他方で、戦後から日本のダンス教育の主流であった、表現系ダンス（中学校における創作ダンス及び小学校における表現）では、多くの典型教材を課題学習としてダンス授業内に取り入れることで発展してきたといえる。高橋（2014）は、即興表現の典型教材の例として「笑う体操・動きのカルタ 36・身体部位ダンス」など 20 種類の教材を紹介しており、小学生から中学生まで使用できる教材としている。これに関してリズム系ダンスでは、上述したように必修化以降、実践及び研究は進んできたものの未だ黎明期である。そのため、リズム系ダンスにおいても表現系ダンスと同様に、多種多様な教材や授業モデル、方法論が検討される必要がある。また、中学校での必修化を省みるとダンス専門の教員のみならず、ダンスを専門としない教員にも指導可能な典型教材が生み出されていく必要がある。

しかしながら、学校現場の教員の現状として以下のような課題が存在する。中村（2010）によれば、中学校現場の教員のうち、ダンス授業に際して研修や教材研究に取り組んでいるものは 25.6% に留まっており、これは教員多忙のため時間確保の難しさが原因であると指摘している。OECD の国際教育指導環境調査（TALIAS）においても 1 週間あたりの仕事にかける時間は、日本は 54 時間（うち授業 18 時間）と参加国中最大である。つまり、日本の学校現場の教員は多忙を極めており、その結果、教材研究・研修に当てる時間や意欲が少なくなっていると推測される^{*1}。

そこで本研究では、ダンスを専門としない教員においても指導可能なダンス授業について模索するため、小学校現場での体育科におけるリズムダンスの授業実践を行うこととした。その内容を検討・考察することにより、今後のリズム系ダンス授業の発展に寄与する基礎的な資料を得ることを目的としている。

2. 研究方法

1) 研究対象：O 市立 Y 小学校 3・4 年生（各学年 2 クラス）及びクラス担任。担任については、教職歴平均 11 年（5 年～19 年）であった。すべての教員がダンスを専門としない教員である。

2) 研究の概要

(1) 授業計画及び参考資料の作成：2014 年 3 月から、大学教員及び実施校の教員（大学院に在籍し、担任及び授業担当ではない）により、授業計画及び参考資料を作成。参考資料については、授業内で使用するステップの DVD である。

(2) 授業計画及び参考資料の配布：2014 年 5 月から、授業を実施するクラス担任に対して授業計画及び参考資料の配布を行った。この際、授業やステップに関する詳しい解説や打ち合わせについては未実施である。これは、クラス担任が特別な追加業務（打ち合わせ）等を行うことなく、日々のルーティーンワークの中での教材研究と同等な取り組みで授業を実施する為である。

(3) 授業実践: 2014年6月に事前に配布した資料をもとに、各担任の解釈により授業を実践した。
3) 授業計画の作成方法: 授業計画については、先行研究（高田,2015）をもとに、前半をステップ習得学習^{*2}（1時間目: ボックス、スライド、2時間目: サイドステップ、スマーフ、バックランニングマン）、後半を交流学習として、習得-活用型モデルの計画を作成した。上記の先行研究は中学生対象であるが、習得-活用型の計画で実践を行っており、即興技能の上昇や運動有能感への好影響などの成果を得ている。

4) 分析対象

- (1) 教員対象の事前質問紙調査: クラス担任を対象に、授業で使用するステップに関して、事前の質問紙調査を実施した。
- (2) 児童の毎時における形成的授業評価票: 毎時授業後に、児童は形成的授業評価票に回答した。各クラスで平均点を算出し、診断基準により評定をつけた。
- (3) 教員対象の半構造化インタビュー: 単元前後における授業内の困りや不安について半構造化インタビュー調査を行った。分析に関しては、複数名の研究者により、意味の文節ごとにラベル化し分析した。

3. 結果及び考察

- 1) 教員対象の事前質問紙調査: クラス担任に、授業で使用するステップに関して、5つの全てのステップを習得済みである教員が1人、残りの教員は0~2個知っているのみであった。ステップの練習時間については、1つのステップにつき数分~20分程度で習得しており、1授業につき最短で10分程度最長で1時間程度の時間を練習に要した。このことから、教員が授業にあたって技能的な準備にかける時間は多くとも1時間未満であったことより、必要最低限の時間で習得可能であったといえる。
- 2) 児童の毎時における形成的授業評価票: 総合評価をみると、評定は1時間目から順に、3の1「4-4-4-5」、3の2「5-5-5-5」、4の1「4-4-4-4」、4の2「4-4-4-4」と3年生は後半にかけて評定が上昇し、4年生は、高値を維持している。このことから、本研究の習得-活用型モデルの授業計画は児童にとっておおむね満足できる授業であったといえる。また、「楽しさ」の項目では、3の1の2時間目（評定2）を除きおおむね高い評定（全て評定4以上）であった。これは、ステップやウォームアップでの活動が楽しさに好影響を与えていたといえる。また、3年生は両クラスとも2時間目の評定がどの項目も相対的に低い値を示した。このことより、3年生にとって2時間目のステップの難度が高かった可能性が考えられる。
- 3) 教員対象の半構造化インタビュー: 教員対象の半構造化インタビューにおいて、事前事後ともに授業内の困りや不安については、「教師の知識・技能（事前: 35.3%、事後: 20.8%）」によるものが最も多く挙がった。また、事前においては、「子どもの反応（14.7%）」が事前・事後ともに「できない子への対応（事前: 11.8%、事後: 20.8%）」が多く挙がったことより、一部のできない児童に対するより簡単な動きの提示が必要である可能性が示唆された。

4. まとめ

本研究における習得-活用型の授業計画については、ダンスを専門としない教員においても指導可能であり、一定の成果のあがるリズムダンスの授業であった。また、使用したステップについては、教師は毎時あたり10分~1時間程度で習得可能であり、児童にとっては、概ね発達段階にあっていたと考えられるが、苦手な子のためにより簡単な動きの提示も必要であると考えられる。

* 1 : 調査はいずれも中学校現場を対象としたものであるが、小学校現場においても多忙の現状及びダンス授業への取組みに関して大差はないと考えられる。

* 2 : 本研究におけるステップは、達成目標として存在しているのではなく、個人のオリジナルなダンスを目指すためのきっかけや手助けとしての位置付けである。

＜引用・参考＞

片岡康子 (2000) 日本体育学会 50 回記念大会シンポジウムから 生涯学習社会におけるダンス学習を考える. 体育科教育, 48(1):38-41.

中村恭子 (2010) 中学校体育全領域必修化に伴うダンス授業の変容と展望 東京都公立中学校を対象とした調査から. 順天堂スポーツ健康科学研究, 1(4)通算第 16 号 : 472-485.

高田康史 (2015) 現代的なリズムのダンス授業の学習指導に関する研究-ステップ習得学習に着目して- 広島大学博士論文.

3. リズムダンスコンクールの実態から見えてくるもの 高橋和子

多くのリズムダンスコンクールが全国各地で開催されている。2012 年 7~8 月に横浜で開催されたストリートダンスの大会だけでも 11 個あり 56,000 人の来場者がいた。いまや、若者の愛好度は高い。しかし、クラス単位で体育着で出演する大会は滅多にない。その代表格が「全国小・中学校リズムダンスふれあいコンクール」(後援: 内閣府、文科省) であり、2015 年 12 月で 3 回目を迎えた。全国 4,000 名余りの代表チームが、東京赤坂 BLITZ に集合し決勝を競う大会であり、3 回目からは小学校部門も併設した。規定曲(指定された振りを行う事)と自由曲(曲は自由、30 秒以上ユニゾンを入れる事)を選択でき、規定曲は 6 月に HP 上で発表され、8 月には無料講習会も開催されている。正月の特別番組には、この大会に向かうまでの練習風景がドキュメントタッチで作成され放映されている。至れり尽くせりと言った感がある。開催趣旨は次の通りである。

「本大会は、2012 年 4 月より中学校保健体育において必須となったダンスの単元の「現代的なリズムのダンス」を学級単位で発表する機会を提供するものです。本大会の目的は、リズムダンスを通じ中学校の豊かな人間性の育成や体力の向上を目的とし、また生徒が全国大会という目標を掲げることで、より学習に興味をもつよう促し、教育の一環として貢献することを目指しています。更にリズムダンスの学習過程において、学級の仲間との結びつきを強め、学校教育を活性化する事を目的としています。リズムダンスは、今の中学生には大変関心が高いものです。ダンスが得意な生徒だけ(クラブ活動など)が出場するのではなく、一般生徒が学級単位で参加することによって、クラスが一丸となって協力することができるが、この大会の特徴です。いじめ問題が生じない、生徒間の絆が深まる活動の一つになり、学校生活が豊かになることができるコンクールを目指します。」

私は第 2 回・3 回とも決勝を参観した。会場は熱気にあふれ、必死で踊っている姿は実にすがすがしく、大勢の子どもたちがこの大会に一丸となって向かっていることに感動を覚え、ダンス必修化の影響を改めて実感した。

3 回目の文部科学大臣賞の栄冠に輝いたのは、船とバスを乗り継ぎ 20 時間かけて長崎の離島からやってきた 16 名の中学生であった。ほとんどの生徒が保育園時代から知っているというチームワークの良さが生きていた。舞台での躍動的な踊り以上に私の心を揺さぶったのは、出番前に上袖で待機している姿であった。舞台上で踊るライバルに 16 名が笑顔で全身を弾ませながら手拍子を打ち、踊り終わると大きな拍手を贈ったのである。他の 24 チームは緊張して仲間と手を握り、集中を高めようと目をつぶっていたりしているのである。長崎の中学生は、与えられた振りをなぞるのではなく、リズムに乗って踊るのが本当に好きになってしまったのである。この姿こそ、この大会の趣旨を体現していたように思えた。このような風景が授業でも見られたらよいなあと思う。そのためには、指導者の役割が大きい。振付ダンスが多い中、リズムに乗って踊る楽しさを味わうことが、何よりも優先されることを願うと共に、コンクールもそうありたいものである。

第3章 ダンスの指導法について

【第3章の概要】ここでは、ダンスの基本的内容や導入として活用できる事例を紹介すると共に、ダンス指導の特徴を明らかにした。また、ダンスの学習法は、戦後70年間、アクティブ・ラーニングを先導してきたことについても言及した。

1. ダンスの基本的内容を考える 体育科教育学会ラウンドテーブル 高橋和子・伊藤史織

1. 設定の趣旨：平成24年度から中学校ダンス必修化が完全実施され4年が経過した。そこで全国の中学生1万人に対して履修したダンスの種類と具体的な内容を調査した（平成26年度文部科学省委託事業報告書）。その結果、「現代的なリズムのダンス」は約8割の生徒が受けており、「振付ダンス」「発表」が多く、「リズムに乗り自由に踊る」と答えたのは5割弱。「創作ダンス」は約6割が受けており、その内容は「簡単な作品創作」「発表」が多く、「即興的に表現する」と答えたのは約3割。「フォークダンス」は約4割が受けており、主な内容は「外国のフォークダンス」であった。文部科学省の現行学習指導要領（解説）等で提示されている「基本的な内容」は余り教えられていないことから、今回は「表現系・リズム系・フォークダンス」の基本を抑えた[内容]と指導法のコツ（表中にはアンダーライン加筆）を体験した後、受講者に模擬授業を行って頂いた。

2. 実技内容〔映像あり〕

「表現系」では即興表現に主眼に置き、「走るー止まる」という課題を、教師の指導も発達段階に応じてシンプルに提示した。低学年や中学年では、イメージから動きを見つけて動けるように言葉かけも雰囲気をだし、短めに繰り返し行えるようにした。

- ① 低学年用 教師の言葉かけで共に動く〔魚・鳥になる〕サメやワシが来ると隠れる
- ② 中学年用 教師は挟み込み方式で指導〔忍者登場〕抜足、差足、忍足…アッ！忍術
- ③ 高学年用 課題提示・グループ学習〔走るー止まる〕からイメージを浮かべ創作

「リズム系」では「リズムに乗り自由に踊る」を主眼に、仲間のリーダーの動きをまねたり好きに動いたりと、色々なやり方を提示した。①ジャンケンダンスで仲間と交流、②列で相手方に攻め寄りながらポーズを取る、③円形でリーダーの動きを瞬時にまねる、④身体部位や弾む動きを入れる、⑤簡単な定型の「手遊び」と自由に「臍と頭の位置を大きく変える」との組み合わせ。

「フォークダンス」は型を覚えて仲間との交流を楽しむ。指導のコツは、踊りの背景や特徴（フォークダンスはステップ・動き・隊形・組み方、民踊はナンバ・組まない・大地を踏む等）を伝え、指導者の口伴奏に合わせて踊りの全体を知り（全習法）、その後、習得すべき大事な動きを取り出して動くやり方（分習法）で行う。「ジェンカ,マイムマイム、オクラホマ・ミクサー,春駒」

3. 模擬授業と体験後の意見交換：初めて踊る参加者も大勢いたが、3領域のダンスとも、全身で大きさにメリハリも付け、仲間と関わりながら踊っている姿が見られた。基本的な内容の「ねらい・やり方・指導のコツ」も紙で掲示後、班に分かれ、その中から教師役が模擬授業を行い、振り返りも行った。「児童・生徒は動くのか」「どんな言葉をどのタイミングでかけるかが重要」「実践して試行錯誤あるのみ」等、前向きな反省が多く出された。短時間の体験でもポイントを絞った指導の有効性を実感した。

2. 中学男子も取組みやすい導入の工夫

横須賀市立武山中学校 斎藤昌子

1. ダンス授業の現状

学習指導要領でダンスは、イメージをとらえたり深めたりする表現、伝承されてきた踊り、リズムに乗って全身で踊ることや、これらの踊りを通した交流や発表ができるようにすることが求められている。

ダンスの単元は「創作ダンス」「フォークダンス」「現代的なリズムのダンス」の3つがある。「フォークダンス」では、ソーラン節やエイサーなど小学校で取り組んできた経験、「現代的なリズムのダンス」では、ヒップホップ系のダンスパフォーマンスを映像で見る機会が増えたことなどからイメージがつかみやすく、取り組みやすい。それに対して「創作ダンス」は、指導者が動きのイメージをつかみにくかったり生徒が表現することに抵抗があつたりすることから授業で扱いにくい単元となる傾向にある。

2. 「創作ダンス」の取り組み

授業では「現代的なリズムのダンス」を扱うことが多い。生徒がリズムに合わせて決まった振り付けで踊ることに抵抗がないのは、動きのイメージがつかみやすく到達点が明確であるからである。特に男子生徒においては、ステップ、動きが決まっていれば、曲をかけて振りつけを練習し、踊れるようになったことで達成感を感じることが多い。指導者も、他の運動と同様にできるできないがはっきりとしているので、指導がしやすい。

指導に難しさを感じるのが「創作ダンス」である。「創作ダンス」は、多様なテーマから表したいイメージをとらえ、動きに変化をつけて即興的に表現したり変化のあるひとまとまりの表現にしたりして踊ることができるようになることをねらいとしている。イメージを形ある動きに換えていくことを、どう指導していくかが大きな課題である。特に動きづくりで大切なことは、場の雰囲気である。生徒一人一人が積極的に、笑顔で取り組めること。そして身近なテーマから思いついた動きを即興的に表現したり仲間の動きをまねたりする活動の楽しさを体感できる授業を開いていきたい。

授業のキーマンは男子生徒のノリであると感じる。テーマや動き方を理解すると次々と動きを発展させ場の雰囲気をつくってくれる場合が多いのである。自由な発想や動きを引き出す授業で大切なことは、表現の場が安全で安心な場であるということ。指導者は、どんな動きもOK!、肯定的な声かけ、笑顔で授業をすすめていくことをこころがけることが大切である。そこで、重要なことは導入であると考える。体ほぐしの運動や、ゲーム、遊びを取り入れ、自由な発想から動きを引き出し、動きの中から表現したいテーマを導きだせると、自然な流れから創作につなげていくことができる。ゲーム感覚の導入は、動きを見合うことへの抵抗感を和らげる効果もある。

2-1 導入：からだほぐしから表現へ

①鬼ごっこ：2人組、ひとりが鬼になる。色々なものになって追いかけ逃げる。はじめは単純な追いかけっこから徐々にテーマのある具体的な動きへと変化させていく。最後は2人でポーズ。例：走る・スキップ・モデル歩き・無重力状態・バッタになって・鷲・キリン・豚



- ② 光と影：2人が前後に立ち前の人への動作を後ろの人がまねをする。前の人気が振り向いたら前後交代する。
- ③ だるまさんが転んだ：「だるまさんが転んだ」遊びの応用編。鬼がポーズを指示する。
例：「右手を挙げて！だるまさんが転んだ」
カッコイイポーズで・アリになって・サッカー・コンサート・悲しい感じ・デート
- ④ 群像：4人組になり、テーマに基づいて1番目の人人が8呼間でポーズをとる。そのポーズをもとに即興的に発展させて順番にポーズを加え4人で1つの群像ができる。テーマごとに最初のポーズをとる順番を変え誰もが1番目を経験できるよう配慮する。
例：直線・曲線・洗濯機・富士山・ハワイ・スカイツリー・ボクシング・体育祭・青春
発展形：チームでテーマを決め自由に動き他のチームがその表しているテーマを当てる。



ここに挙げた導入教材では、テーマに対して即興で動いてみることが重要なポイントである。動きを引き出すにはテーマの設定に工夫が必要である。初期の段階では、動きをイメージしやすいよう、具体的で単純なテーマを設定し、ペアやグループでの役割を明確にしていくとよい。

また、よい発想や動きに対して、タイミングよく声かけをし、その場ですぐに評価（よいところを具体的に褒める）をしていくと、ダイナミックな動きや、変わった動き、発想が生まれやすくなる。自由に動く楽しさが少しずつ実感できると、抽象的なテーマも表現できるようになり、生徒が自らテーマを設定していくこともできる。「なんでも有り！」という雰囲気を指導者が作ることができれば授業の導入は成功であると考える。

2-2 展開～グループ創作の過程～

①テーマ決め

導入の動きを参考にテーマを決める。動いていて楽しかったもの、もっと発展させたいもの、ほかのグループが考えそうもないものなどヒントを与えていく。なかなか決まらないグループに対しては、導入時のテーマの中から探してもよいことを伝える。

②「はじめーなかー終わり」の構成

テーマから一番表したい場面や動き（見せ場）を考える。見せ場ではスローモーションで動く、同じ動作を繰り返す、中心となる動きを引き立てるように全体のバランスを考えるなど動きを工夫できるようなアドバイスをしていく。そして、一番表したい場面をクライマックスとし、その前後を「はじめ」「終わり」で構成し、動きに変化がつくように助言する。

グループの中で、積極的なリーダーの生徒が動きを決めて、他の生徒はリーダーの創った振りを覚えて踊るような場面を見かけることがある。最初の約束で、グループのメンバー全員が必ず1つ以上アイデアを出し合い、動きに取り入れることを創作の条件として伝えておくとよい。



2-3 まとめ

①他のグループと見せ合いの場をつくる。

2つのグループで動きを見せ合い、アドバイスをする場面をつくる。表したいテーマが見る人に伝わっているか、動きのよいところ、もっと良くなるヒントなどをお互いに出し合う。導入、展開の場面からテーマに沿って動くというスマーロルステップを繰り返すことで、「発表」に対する抵抗感が少なく取り組める。

②踊りこみ

見せ合いの場での意見を参考に、発表に向けて踊りこみをする。場の使い方、大きな動き、表情などを意識していく。何度も繰り返し踊っていくことで、自分たちの作品が好きになり自信をもった動きができるようになってくる。発表会に向けて本番と同じ形で仕上げの練習を行う。

③発表会

グループ発表会の方法は、全員の前で発表することにこだわらない。練習の動きや、集団の様子から、見せ合いの場を拡大した形で行ってもよい。

発表会は、お互いのよいところを認め合う場である。発表のグループに大きな拍手をして発表会の場を盛り上げ温かい雰囲気の中で進行したい。発表の様子は、作品のよいところ、工夫しているところ、印象に残った動きなどをカードに記入したり、感想を発表したりする。ダンスは、踊って楽しむだけでなく、見る場面を通してお互いのよさや、新しい発見があることに気づく楽しさを体験させたい。

3. 授業を通して

導入で、充分な身体と心をほぐす授業展開ができると、自由な発想や動きが表れて動きの連続～作品づくりにつながっていく。

生徒たちは「表現する」という言葉に抵抗感が強い。抵抗をなくすために、指導者は生徒への声かけを意識する。動きや発想のよいもの、何かしようとしていること、些細なことでも見逃さず「いいねえ」「おもしろいねえ」「まだまだうごけるねえ」「すごい！」など目の前で起こっていることをその場で褒めまくる。身体で表すことが表現であることを動きの中で体感できるよう生



徒一人一人を見取ることをこころがけたい。声かけを重ねていくことが生徒の自信にもつながる。学習ノートに「先生に褒められてうれしかった」と書く生徒が増えるのがダンスの授業である。私のダンスの授業のキャッチフレーズは「楽しくなければダンスじゃない！」である。まずは指導者が生徒と共に楽しむこと、面白がることが授業のベースであると考えている。

3. カポエイラの動きからの導入【映像あり】

湘北短期大学保育学科 小笠原大輔

1. 動きを生み出すための「きっかけ」の必要性

乳幼児段階では太鼓やタンバリンなどのリズムや幼児向け音楽に合わせて、体が勝手に動き出し、テレビのキャラクターやスポーツ選手、お笑い芸人などを真似た動きから独創性のある動きまで多彩な踊りを目にすることができます。ところが年齢が増すにつれ、恥ずかしさやどう見られているかに気を取られたり、「思考」がかえって邪魔をしたりすることで、自由に動きを生み出したり踊ったりすることが困難になってくる。しかし、動き出すきっかけ（動かざるを得ない状況）さえあれば、そのきっかけから動きが生まれ、更に次の動きへと繋がっていく。ダンス及び表現あそび教材として、スポーツのワンシーンからの発展や、忍者ごっこ、戦いごっこなどがあるが、これらがなぜ教材として扱いやすいかといえば、もちろん実際にもしくはテレビなどで見たことがありイメージしやすいということもあるが、それ以上に「対戦」という形式が要素として組み込まれている点が大きく、この形式の中で当たり前に出てくる動きのやり取り場面で「きっかけ」が必然的に生まれてくるからであろう。「対戦」は自分の中にもう一人以上いてはじめて成立する（もちろん架空の相手との対戦もあるが）。一方が手裏剣を投げる動きをしたら、もう一方はその動きをきっかけとして「避ける」という動きが繋がって生じてくるし、スポーツのワンシーンなどは説明するまでもなく、オフェンスに対してディフェンスが応じて動きが連なる。そのきっかけに応じた動き（避ける、守るなど）をデフォルメすることで創作ダンス的な表現に発展させていくことができる。

2. 戦うが目的は倒すことではない格闘技

ブラジルの伝統武芸であるカポエイラは、楽器演奏・歌・動きが三位一体となり見事なエネルギーに満ち満ちている芸術であり、これをその場に会したメンバーで輪（ホーダ）になって行う一連の活動はホーダ・ジ・カポエイラと呼ばれ、2014年にはユネスコの人類無形文化遺産に認定されている。カポエイラのアクロバティックな動きをブレイクダンサーが数多く取り入れていることから、派手で難易度が高いイメージもあるが、決してそれだけではなく、むしろ相手と呼吸を合わせ、調和を重んじ、相手との動きのやり取りを楽しむことこそが最も重要であるとされている。音楽的要素もかなり重要で、伝統楽器であるビリンバウ等と歌によってその場の全てが統括され、誰か一人が好き勝手な振る舞いをすることは許されない。常に相手を敬い、調和を重んじるという点では、日本の武道と同じである。

3. ダンス教材として

中学校学習指導要領解説（平成20年7月文部科学省）保健体育編のダンス領域では「コミュニケーションを豊かにすることを重視する運動」と記されている。カポエイラでは、相手との動きのやりとりを楽しむことが活動の主であることから、領域のねらいに適うものであり、且つ先述のとおり「対戦」形式であるので、次々と動きのきっかけが現れ、次の動きが繋がりやすくなることからも、ダンス領域においてかなり有効な教材となることが期待できる。こうした理由から筆者はかねてより部分的ではあるがカポエイラの動きをダンスの授業に盛り込んでいる。

もちろんカポエイラ特有の珍しい動きやカッコイイ動きというのも受講者にとっては興味・関心をひくものであり、そういった動きの習得も授業参加のモチベーションを引き上げてくれるが、やはり一番の目的で一番の楽しさは「ともに動く」ことである。カポエイラは周知のとおり脚技が多いが、もちろん上肢による攻撃もある。ダンス未経験者にとってはいきなり脚で何かするのには難しく、また万が一、相手の体に脚が当たってしまった際には、ダメージが腕によるそれと比べて、その重さから大きなものになりかねないため、導入としてはまずは上肢で攻撃し、それを避けることから始める。ちなみに授業時では「攻撃」という言葉は極力避け、その意味合いから「ちょっかいを出す」「挨拶を出す」という表現を多用している。また、逆立ちや側転といったお馴染みの姿勢や動作もカポエイラでは頻出するので、器械運動領域マット運動との領域を越えた動きの関連性を体験することもできる。更には先述のとおり、カポエイラは格闘技でもあり日本の武道に通ずるところがかなりあることからも、武道領域としても扱うことも可能ではないかと考える。指導要領では武道領域の記載として「原則として、その他の武道は、示された各運動種目（柔道、剣道、相撲を指す）に加えて履修させることとし、地域や学校の特別の事情がある場合には、替えて履修させることもできることとする。」（下線は筆者による追記）とあることから、一味違った武道として体験することも可能ではないかと考える。確かにカポエイラは指導要領でいうところの「我が国固有の文化」ではないが、逆に国際理解の一助となるという観点からも、導入を考えてみてもよいかもしれない。※但し、カポエイラは歌と楽器もあって初めてカポエイラと呼べるのであって、動きのみを抽出したものはカポエイラとは呼べないことから、誤解を生じぬよう気をつけなければならない。

4. 授業実践例（対象：大学生） 簡単に授業内容を記す。

- ①軽い準備体操から始める。カポエイラでは手の平を床につき体重を支える動きが多いため、手首は特に入念に行う。習熟度によっては頭で体重を支える動きも行うため、頸部は更に入念に行う。
- ②ジンガ（図1）と呼ばれるステップを行いウォームアップ。その後、避ける動作（エスキーバ、ココリーニヤ、ネガチーバ等：図2、3、4）と腕による攻撃（ガロパンチ：図2）、各種移動ステップなどを織り交ぜながらジンガを行う。
- ③基本の蹴りを行う。そもそも目的が「相手に蹴りを当てたり倒したりすることではなく、相手とともに動きのやり取りをする」ことであるので、次の動きに繋がりにくい直線的な蹴りはあえて行わず、回転系の蹴り（メイア・ルーア・ジ・コンパッソ、メイア・ルーア・ジ・フレンチ等：図3、4）のみを行う。
- ④二人組になり、向かい合ってジンガをしながら攻撃と避けを組み合わせて繰り出す。動きの選択肢は教員が決める（『ガロパンチ』出して『ココリーニヤ』で避けてなど）。最初のうちは、衝突の恐れおよび恐怖心があるため、二人の距離は絶対に当たらない距離で行い、慣れてきたら徐々に近づいて行うようにする。
- ⑤攻撃側と避ける側を予め決めておき、攻撃及び避けの種類の選択は受講者自ら決める。動く前に二人で「○○出すから、△△で避けて」などと決めてから行い、慣れてきたら、それも決めずに即興的に相手の動きに合わせて動く。
- ⑥攻撃側と避ける側は決めずに、お互いジンガを行う中で流動的に役割を交替しながら動き、即興的に動きの選択をして繋げていく。

⑦倒立や各種側転などを行う。

基本的に毎授業がこの流れで行われる。慣れてきたら、①準備体操以外の②以降はペアで行う。

⑤⑥は約束組手のようなものであり、教員側で次から次へと動きの組み合わせを提示していく。一つ終わるごとに相手を替え、毎時間多くの相手と組めるよう配慮する。人によって呼吸やリズム、得意な動きや好きな動きが異なるため、その違いを楽しむ目的もある。

上達のコツ及び安全のために、「常に相手の目を見続ける」「攻撃が右から来たら左に避け、左から来たら右に避ける。絶対に向かっていかず、受け流すようにして流れには逆らわない」の2点に関して、毎時間頻繁に声掛けを行う。

さらに授業後半では、以下の内容が加わる。

⑧一方が蹴り、もう一方が避けるのではなく、二人とも同じ動きをする。その際、はじめは予め二人で「〇〇してから△△して、そのあと側転してから□□する」というように動きの内容を決めてから行う。次に一方は同様に自己の中で動きのメニューを決めておくが、口に出さずに行い、もう一方がそれを真似ながら行う。リードする側はただゆっくりやればよいというわけではなく、相手が次の動きを予想しやすいように動き出しのアクセントや“間（ま）”を作ったり、目・表情で促したりなど、ノンバーバルな伝達を行いながら、動きを連ねていかなければならぬ。最終的には、リードする側も予め動きのメニューは決めずに、その場その場で即興的に動きを連ねていく。

⑨側転などの移動動作を用い、相手のいる場所を奪いに行く（場所取り合戦）。もう一方はそれに応じて、側転などの動きで避けながら相手が元々いた場所に移る。カポエイラは人の輪の中で行うため、移動は平面的にはならず、お互いある程度一定の距離感を保ちながら移動していくので円運動のようになり、見ている側も奥行きのある動きにより飽きることがない。

⑩習熟度にもよるが、倒し技も入れる。本気で投げ飛ばすことはせずに、バランスを崩し崩される面白さを味わう程度とする。

⑪最終的にペアを固定し、動きを構築して発表会を行う。また、自由に相手を入れ替えて全て即興的に動きを出し合う（もちろん相手の動きに応じて）ゲームを行う。

5. 受講者の様子（感想：抜粋）

動きの楽しさから動きや体に対する発見まで感想は多岐に渡っている。上達の為に自主的に授業外でトレーニングを行う者まで現れた。中でもやはり二人で動きを組み立てていくことや、即興的に反応して動き続けることが楽しいようである。コミュニケーションに関する記述も数多くみられた。また、授業中は常にカポエイラの音楽をCDで流しているが、その音楽に興味を持つ者やポルトガル語に興味を持つ者もあり、学びの多様な広がりも期待できるといえる。

6. さいごに

回転系の蹴りでは蹴り脚の膝は十分に伸ばしておく必要がある。見た目に美しいからという理由はもちろんあるが、それよりも膝を曲げることにより相手に当たってしまった際のダメージが増大すること（ボクシングのフックのようになる）、伸ばしていたら当たったとしてもふくらはぎか大腿の柔らかい部分が相手に当たるだけで済むが、膝を曲げてしまうことにより最悪の場合、硬い踵が相手に入ってしまうことになるからである。遠慮したり「危ない」と思ったりすると反射的に膝を屈曲してしまいがちであるが、「相手に怪我をさせないために、より相手の方に脚を伸ばす」という一見矛盾するかのような言い回しではあるが、これも毎度毎度口酸っぱく言葉がけ

をした点である。受講者は意識していても自分の体を思うように動かすことがいかに難しいかを実感していた。安全面での考慮と動きの質の向上が関係してくる点に着目している者もあり、「ダンスの振付ではつい無意識になってしまふことも多いが、『怪我をさせてはいけない』という気持ちが強く、なんとしてでも膝を伸ばすことにものすごく意識を向けた」とその形が現れる意味を知ることで、よりイメージ通りに動けるようになったという一例としてみることができる。特に男女ペアで、女子が避ける際の男子の蹴りは、男子同士のそれとは比べ物にならないくらいに美しいものであった。

- ①常に相手を見て動く
- ②相手の動きに逆らわず受け流す
- ③出した脚は引っ込めずに、しっかりと伸ばす

上記の3点をその都度注意し、確認しながら行なうことが怪我防止のための注意点である。これらを守りながら、児童・生徒並びに学生が仲間とともに動きを紡ぎ合っていく楽しさを経験する機会が増えていくことを期待するとともに、これがダンスのバリエーションに発展していくよう、今後も授業内容を改良しながら進めていきたい。

- ・毎時間いろんな人と組めるから楽しい。・みんなで輪になってカポエイラした時的一体感がすごかつた。
- ・どう動こうか迷っても相手が攻撃をしてくれるので、避けざるを得ず、自然に体が動いてくれた。
- ・攻撃はするが相手に当たらないように気をつけなくてはならないため、より一層自分の体を意識するようになった。
- ・相手や自分の体のどこに重心があって、そこをどちらの方向に押されると崩せるかを探るのが楽しい。
- ・避けるための側転ではどちらの方向にも行かないといけないので苦手だった方向もいつの間にかできるようになっていた。
- ・体力差、経験差、性別に関係なくできるところがいい。・消極的な性格であったが、積極的になった気がする。
- ・相手と動きを合わせたり技をかけるタイミングを見計らったりするために相手とアイコンタクトを取ったり、動き方がわからない時にお互いに教え合ったりと、コミュニケーションが取れるきっかけもたくさんあるので、コミュニケーション能力も磨けるなと思いました。・体力が続く限り延々と続けていられる。
- ・格闘技という言葉からイメージされる荒々しさではなく、洗練された俊敏な動きの連続の中にダンスの華やかさがあった。
- ・できる、できないに関わらず、色々な動きに挑戦することができるのが楽しく、毎回新鮮な気持ちで取組めた。
- ・一緒に技を出し合えることが嬉しいという思いが日に日に強くなっていた
- ・カポエイラを習うようになってから、家ではピラティスをするようになったり筋トレをするようになったりした。
- ・攻撃する時に実際に相手の身体を触れることがないので、お互いダンスをするような気持ちで行なうことができた。
- ・身体を触れないで、男女ペアでも行きやすかった。・非常に軸のしっかりとした身体が必要とされる。
- ・少ない技の中でも技同士の組み合わせを変えることで、パターン数を増やし、攻撃する、防御する、方向転換する、合わせるという技を、自由に選択できる楽しさを感じることができた。



図1 人組でジンガ



図2 ガロパンチ（左）とエスキーバ（右）



図3 ココリーニヤ（青服）とメイア・ルーア・ジ・コンパッソ（黒服）



図4 ネガチーバ（左）とメイア・ルーア・ジ・フレンチ（右）

4. 男子が取り組みやすいダンス実践のコツ

小笠原大輔

高橋（2015）が報告した平成26年度文部科学省委託事業「中学校における柔道・ダンスの指導状況等の調査」では、「男子生徒にとってのダンスは、それほど楽しい領域ではないようであり、指導に当たっては、男子生徒が夢中になって表現したり踊れるような工夫がより一層求められると言える。」とある。そこで、男子が取り組みやすいダンス教材をいくつか紹介する。

1. 「ふざける」を利用した表現—“スポーツモノボケ”—

男子はふざけるのが好きであり、クラスのお調子者でよく先生に注意されるのは大抵男子である。この男子の傾向をダンスに利用する。

ダンス教材として、児童・生徒にとって身近でイメージがしやすく、かつ必ずといっていいほど何かしらの動きが伴う、スポーツの動きやポーズを題材に創作していくものがある。これにお笑いのジャンルの一つ「モノボケ（＝日用品などの“モノ”を使い、それを何か別のものに見立ててポーズをとったり、演技をしたりすること）の要素を加えてみる。これをスポーツモノボケ（筆者考案）という。まずは初步段階として、2種類以上のスポーツを組み合わせる「混ぜ混ぜスポーツ」を行う。図1は、数人でマラソン競技を表現しているところに、一人だけ背泳ぎの者が入ってきて、しかも次々とランナーを抜いていってしまう様子を表現している。これは「一人だけ違う競技である」という面白さに、「通常ならば床の上を泳ぐことはできないのに、強引に陸上と水中を混ぜている」ナンセンスさがプラスされて更に面白さを増している。他にも例えば数人でサッカーを表現しており、攻め上がり最後のシュートシーンのところで、何故かゴールキーパーがしゃがんで野球のキャッチャーのように構えてしまう、相撲を表現している2人のところに次々と人が加わり、いつのまにかラグビーのスクラムになっていく、ボーリングのボールを投げたところを表現している人に対して、ピンの役で立っていた数人が一斉にしゃがんで野球のキャッチャーの構えをする、砲丸投げで、選手に投げられた砲丸を回転レシーブで拾い、トスを上げ、スパイクを決めるなど、自由に創造（妄想）して、本来ならばありえない状況を作ってしまう。これらは、ポーズでもよいが、やはり動きの中で最後にオチが来るのが面白く、予想を大きく裏切ることができるよう、頭を柔軟にしてアイデアを出さなくてはならない。またオチをより効果的に見せるためには、前半部のスポーツの動きを分かりやすく伝わりやすく



図1 あれ？ 一人だけ背泳ぎ？ しかも走るより速い！

表現する必要がある。そのため、蹴ったり打ったり投げたりといったスポーツ動作も曖昧にならぬよう、あたかも本当にそのスポーツを行っているかのように見せる演技力・表現力が必要となってくる。

次の段階としては、いよいよモノボケ要素が強くなる。各種スポーツのポーズなり動作なりを抽出して、これに全く別の意味をあてがい、ひとつの風景を創作してしまう。例えば、野球のバッターの構えをしている者が一人いる。そこに数名がぞろぞろと入ってきて、彼を背にして全員整列して椅子に座っているような姿勢になる。最後に、一人入ってきて、みんなの前に立つ（図2）。実はこれは教室の風景で、一人だけ着席せずに場違いなことをしているというナンセンスなユーモア作品となる。着席を演じている者とバッターを演じている者は腰や膝の角度がほぼ同じであることが余計に面白みを増している。また、教師役も生徒役も誰一人としてバッターの方を見ていない点も面白さに影響を及ぼしている。更に、ここに音楽を流し、それに合わせて着席しているものが順にバッターになったり、バッターが着席したりと様々なパターンで繰り返せば、一つのダンス作品となってしまう。そこに教師役の者が板書している時だけそれが可能で、生徒側を向いている時には全員着席しているというルールを付加すれば、「先生の隙を窺っている生徒と先生の関係性も見えてきて作品の厚みが増す」）。図3は同じくバッターのポーズであるが、彼の前に数人が現れ、干されている布団になれば、たちまちベランダで布団を叩いている風景に変わる。簡潔に言うとバッターは動かずして「教室のおかしな風景」にもなるし「布団叩きのお母さん」にもなるのである。

以上はオチの前後とも人間のままであるが、オチでモノになるということも可能である。例えば、必死に腕立て伏せをしている者がいる。もう限界となり、少し休むために膝をつきハイハイのような姿勢になる。そこにカップルが入ってきて、その背に座る。腕立て伏せをしていた者はそこでベンチとなり、一瞬のうちに公園デートの風景に変化する。または限界まで来てもうダメだ、というようにうつ伏せで倒れる。そこに一人が入ってきて「おやすみなさい」と言って、彼の上にきれいに重なるように寝る。この瞬間、腕立て伏せをしていた者は布団になる。このようにスポーツのポーズがそのままモノになってしまう【ヒト⇒モノ】は前述の【ヒト⇒ヒト】に比べ高難度となるが、見る側の予想を裏切ることで可笑しみを生み出してくれるダンスになる。お調子者でふざけることが好きな子ほど斬新な発想で面白い作品を作る。



図2 教室の風景「一人だけ何かがおかしい？」



図3 バッターが布団叩きに



図4 誰もが目にしたことのあるポーズや動きを組み合わせて

2. 創作ではなく構成・編集から始める—お笑い芸人の動きを料理する—

これもまたふざけたり人を笑わせたりするのが得意な男子に有効なダンス創作法である。テレビでは毎日のようにお笑い芸人（具体的な名前は伏せる）が活躍する姿を目にすると。中でも真似がしやすくノリがいい“リズム系ネタ”はユニークな振付も相まって、児童・生徒のみならず乳幼児でも面白がって歌いながら動いて（踊って）いる。ただ、これらのネタを単に真似するだけでは面白くないし、ダンス作品とは呼べないが、この動きを用いて、上手に構成・編集するだけで、立派なダンス作品へと変化を遂げる（図4）。この構成力・編集力は、ダンス未経験の教員でも比較的容易に力を発揮することができる。なぜならば、例えばゴール型種目ではフォーメーションがあり、ゲーム中に微調整を繰り返しながら刻々とその図形が変化していく。これをそのままダンスの構成に当てはめることができるからである。同じ図形でもどちらを向くかで、バリエーションは増えるし、また空間的変化のみならず時間的にも変化を施す（動き出しのタイミングを人によって変える）ことで、更にバリエーションが無限に広がる。特に数学が得意な教員は「図形」「組み合わせ」といった点で腕の見せ所であろう。また、文章を構成する力や作曲する能力もこのダンスの構成力・編集力に活かすことができる。美術の構図もまたそうである。「ダンスをどうする」ではなく「各教員の専門を活かしてダンスを面白くする」更に言えば「各教員の専門を活かせるダンスにしてしまう」という考え方でもよいのではなかろうか。たとえそれが真似事であっても子どもたちは大いに喜んで思いきりやる動きというものを持って（知つて）いる。既に＜材料＞（＝動き）はあるのだから、あとはどう＜料理＞（＝並べ替える、構成・編集）するかをこちらから提示したり助言したりすればよい。

3. ロジカル・ダンスーからくり仕掛け（仕組み）が好きー

原因と結果がはっきりしており、且つそこに至るまでの仕組み・構造が複雑であればあるほど面白く感じる。Eテレの番組『ピタゴラスイッチ』内の“ピタゴラ装置”がいい例である。図工の時間に女児が粘土や空き箱を使ってキレイなお城や家を作り、そこにカラフルなシールや色紙、絵の具を使っての装飾に励む一方で、男児は取りあえず建物らしきものだけ作っておき、そこにコースを作り、仕掛けを作り、いかに面白くビー玉を転がせるかを競い合うのは見慣れた風景である。“リケジョ”と呼ばれる理系女子が増えてきてはいるものの、今もなお理工系学部で男子の

占める割合が80~90%であることからも、男子のこの趣向には納得がいく。ダンスにおいても「○○がこうなると、その勢いで△△がこうなり、その結果□□が逆方向に回転する。その影響で××が転がって…」といったように、理屈で動きや関係性を決定づけていくダンス創作法は男子にはもってこいの方法である。初めは移動・回転といった単純な動きから始める。もちろんこれだけでも十分であるが、更にそこに<移動方法の変化（走る、スキップ、側転等）><スピードの変化>などの脚色をしていく（但し、はじめに様々な移動の仕方を提示してしまうのではなく、子どもの方から「普通に走るのではつまらないから、何か他のやり方を見つけよう」という発案・願望が生まれてから、「こんなのもあるよ」といくつかヒントを与えてあげるのがよい）。おまけに動きの中や、他者との接触の際に自由に表情をつけてみる（=装飾）。「こっちに来るなー」や「飛んでいけー」、「まずい！ぶつかる！！」などの心情になって行えば、ドラマチックにもなる。人と人との動きの繋ぎ目の際には身体接触を伴うことが多く、例えば、走ってきた相手と腕を組んだのちに遠くへ飛ばす、というシーンでは「どの角度・強度でやれば上手くいく、もしくは痛くない」といった調節を自他の体を通して行う。身体接触を伴う遊び経験が減少してきている昨今においては、もしかしたら加減が難しいかもしれないが、だからこそこうした遊びダンスが重要となってくる。表現は後付けで構わない。とにかく動きを繋げる面白さ、言わば“人間版ピタゴラ装置”を仲間と共にじやれ合いながら作ることがダンスの第一歩となる。更に発展させたものでは『風が吹けば桶屋が儲かるダンス』（筆者考案）も面白い。その謡のとおり「ある動きがスタートするが、それにより、一見すると全く関係がないと思われる所に影響が及び、予想外の結末になる」ような仕組みを作るのである。具体的には、結末シーン（一人でも複数でもよい）は既にスタートから行われている。そこにピタゴラ装置のように次から次へと動きが連鎖していき、最終的に結末シーンに繋がることで、観る側は「あ。そういう流れが原因で、この人（達）はこの動きをしていたのか。」と腑に落ちる。即ち、過程がタネ明かしとなるように作るのである。これはある意味謎解き感も味わえるので、楽しさも倍増する。例えば、教員側が開始シーンと結末シーンを指定してしまい、その途中過程をグループ毎に創作するというやり方（「風が吹く」「桶屋が儲かる」は決まり事として、その途中を好き勝手に創作する）も、面白い。共通の条件（≒制限）を設けることで他のグループの工夫した点が目に見えて分かるようになる。

4. アクロバット

男児は女児に比べ戦隊ものや特撮ヒーローものを好む傾向が強い。登場人物が側転や宙返り等を頻繁に行う影響もあり、男児はヒーローになりきり回ったり転がったりするのが好きである。これはどうやら中学生や高校生になっても変わらず、特別授業などの講師として呼ばれて学校に行くと、彼らはこうした大きな動きを教わりたがる。体操競技の専門的指導者でない限り、安全面の観点から大技を指導することは難しいため、比較的難易度と危険度が低く、それでいて格好よく見える動き（テクニック）を紹介すると（例：図5）、非常に熱心に反復練習を行う。特に授業で行うダンス自体に興味を示さない男子学生には効果てき面である。しかしながら、これは指導者の技能によるところが大きいため、誰にでも指導可能というものではない。それでも、体育科教員であれば各々専門種目があると思われる所以、その種目特有の洗練された動きをダンスの動きとして多少強引にでも組み込んでみるとよい。その動きの前もしくは後に側転等の大きな動きを繋げるだけで、目を見張るほどの素晴らしいダンスへと変化する。これを構成・編集すれば尚よい。



図5 変則的な側転にも挑戦

5. さいごに—男性体育教員への期待—

県教育委員会や県女子体育連盟主催の実技講習会等に講師として参加する機会が多いが、そこで感じるのは男性教員のパワーと可能性である。力強い動きが得意であるという点はもちろんであるが、それ以上に、普段指導しているルールのある身体活動である“スポーツ”とは異なり、ルール（反則）の無い、全く自由な身体活動である“ダンス”の場では、まさに心身ともに解放されるのか、非常にのびやかに笑顔で動き回る姿が印象深い。勝負事ではないという点も大きいのであろう。筆者の「それいいですよ！」の声により、男性教員の“ふざけ度合い”にますます拍車がかかる。「ふざける」は旺文社国語辞典によると「興にのってたわいもないことをして遊ぶ」ことであるが、これはまさしくダンスそのものである。それが許される場であることに児童・生徒が気づけば、より自由な発想で動きが生まれてくるはずである。

女性参加者の感想で「やはり男の先生が一人入るだけで、その場の空気が活性化され、よりオープンな雰囲気になる」「男の先生はバカバカしいことを思い切りやってくれるので、私たちもいつの間にか羞恥心がなくなる」といった声が強く印象に残っている。“クラスでふざけるのはいつも男子”は大人になっても変わらないのであろう。一方、男性参加者からは「ダンス研修会の先生が男の先生でよかった。いくつになってもダンスの先生が女性だと緊張する」という感想をよく耳にする。これは恥ずかしさからだけでなく、女性に格好悪い姿を見られたくないという見栄もあるのかもしれない。そしてこのことは生徒・学生にも当てはまるかもしれない。以上より、男性体育教員によるダンス授業にかけられる期待もますます大きくなるといえる。これまで女性体育教員に任せ（押し付け）きりになっていたダンス領域であるが、もしかしたらしっかりとふざけることのできる男性教員の頑張りが今後のダンス教育の行く末を左右するのかもしれない。自分の専門種目と遊び心をフル活用して、コピーするダンスではなく生み出すダンスを繰り広げてもらいたい。そして、もちろんテレビでは男性芸人のみならず女性芸人も多く活躍されていることを鑑みれば、女性体育教員のふざけっぷりにも大いに期待を寄せる次第である。

5. 幼児期に培われる身体表現の基礎力

共立女子大学 足立美和

1. はじめに

幼児期は自分の感情や思いを言葉で表現することはまだ難しいが、体の動きや表情、しぐさで、感情や思いを素直に表すことのできる時期である。幼児期の表現活動において、体の動きで行う身体表現は、幼児期の子どもたちの豊かな心と健やかな体を育むのに最適な活動であると考えられる。幼児期の身体表現活動は、自分の思いを他者に伝える喜び、他者と共感する嬉しさ、他者の思いを感じ取る楽しさを経験でき、からだ丸ごとのコミュニケーション能力を育む活動ともいえる。それはいわば、対人関係力の基礎ともいえる。そして、必修化になった中学校体育のダンスにおいても、からだ丸ごとのコミュニケーション能力は必要とされているが、その基礎を培う幼児期の身体表現の活動を充実させるには、幼児を取り巻くいくつかの課題があるといわざるを得ない。

2. 幼児の体の動きと感動体験

身体表現によって自己の感情や思い、想像の世界を表現するのに、様々な種類の動きを使った方がより豊かに表現できることは、発達の未熟な幼児でも同じである。しかし、近年の幼児の体の動きは、幼児らしからぬ体の硬さや関節の不器用な使い方から、動きの可動範囲が限られていたり、出てくる動きのボキャブラリーが単純で乏しかったりすると感じる。たとえば、日常の遊びの様子を見ても、膝を抱えてしゃがめずにお尻を直に地面に着けて砂場遊びをしていたり、遊具などの狭い隙間をくぐれずにあきらめてしまったりする姿を見かける。深く身を落として低い姿勢で横に移動したり、背中をうまくくねらせて隙間を潜り抜けたりする動きなどを、うまくできない幼児も少なくないと感じる。こうした多様な動きは身体表現活動の中で、より幅の広い表現を生み出すことのできる一つの要素であるが、今の幼児の体の現状ではそのような多様な動きが自然と出てくることを期待することはできない。中には「動くのは面倒」「疲れるからいや」という幼児さえいる。こうなってしまうと多様な動きという以前に、体を動かす楽しさを幼児期に経験できないとう、結構深刻な問題になってしまう。

また、イメージから生み出される動きの種類についても、いまひとつ広がりに欠けているようを感じる。動物の真似っこや木の葉や水しぶきなどの身近な自然の真似っこなどでは、画一的な動きを見かけることが多い。これは、子どもたちがそのようなイメージを持つような状況に出くわす機会が少ないか、そういう現象を興味深く見たり感じたりしていないのではないかと推察する。子どもたちが表現したいという欲求に駆られるには、心が大きく動かされるような感動体験をすることが必要になる。感動体験の一つの例として、美しい自然や環境に出会うことなどが挙げられるが、それはアラスカのオーロラを見たり富士山のご来光を見るような特別なことではなく、ダンゴ虫が丸まる瞬間を目撃したり、夕日がゆっくり流れる雲に隠れていく姿を発見したりするような、ごく身近なことでよいのだと思う。ところが、最近の幼児はとても忙しく、降園後は習い事で分割みの子さえいる。そんな日常の中で、幼児の頃から地を這う虫を見続けたり、じ

っくりと空を流れる雲を眺めあげたりする心と時間の余裕がないのかもしれない。本来幼児は、大人の気づかない小さくも豊かな世界の出来事に、細やかに心を動かすことができるはずである。しかしいくら幼児でも、時間と心にゆとりがなければ、感動体験の機会も見逃しがちなのだろう。

幼児期から特定の学力や能力の獲得を急ぐのではなく、幼児期でないと育てられない体(動き)の育ちと心の育ちに十二分に時間をかけるよう心掛けなければならぬ。

3. 指導者の感覚や動きの経験と言語化する能力

幼児の身体表現の指導については、様々な教材や指導法が提示され、身体表現の経験の浅い教員でも取り扱かりやすいガイディングがいくつも提案されている。しかし、指導のハウツーはあっても指導者自身にいくつかの課題があると考えられる。

身体表現活動では、子どもたちをイメージの世界に誘い、身体の動きを引き出す指導者の言葉かけのバリエーションが、まず一つの課題であると思う。雨が降る音と言ったら「ザーザー」という擬音語をよく用いる。ところが、それだけでは幼児から多様な動きを引き出すことは難しい。とめどなく降り続ける大量の強い雨、静かな中で糸のように降る雨、風とともに窓に打ち付ける激しい雨など、想像力を働かせ様々な雨のシーンを思い浮かべ、多様な擬音語やオノマトペを駆使して、子どもたちに言葉かけを行うことが必要となる。特に低年齢児には場面説明のような言葉かけはなかなか伝わらないため、擬音語やオノマトペによる感覚的な誘いの方が動きをひきだせることが多い。生活が同じ条件や環境にあったとしても、日頃から自分を取り巻くもの(雨音や風の音、光、街の音、匂い等)に心を向けているかどうかによって、そこで感じ取れるイメージは大きく違ってくる。五感を十分に働かせることで、日常の中に日々違ったシチュエーションが生まれていることに気付ける。そして、身体表現では自分が経験した様々なシチュエーションを子どもたちに向けて言葉で表現する、感覚の経験を言語化する能力が求められる。

また、体の使い方や動きの方向、高低、速度などにヒントを加えながら、子どもたちから動きそのものを引き出すことにも注意を払うことが必要である。そこでもうひとつの課題は、指導者自身が体の動きでどれだけ遊んだかという経験値と、様々な種類の動きを引き出すために、体の部位や動きに直接的に働きかける言葉かけにフォーカスされる。指導者自身が様々な体の動きを経験していかなければ、子どもたちの動きを引き出すヒントになる言葉かけは思いつかない。できるかできないかは別にして、自分の経験があればどうにかそのコツだけでも言葉にして伝えることはできると思う。

このように、幼児期の身体表現の経験は、小中学校での表現運動での基礎力となるにも関わらず、幼児では「様々な動きを生み出すからだ遊びの経験」と「人に伝えたくなる感動体験」が、指導者では「五感を駆使した感覚の経験」と「様々な動きの経験」、そして「感覚や動きの経験を言語化する能力」が課題になっていることが分かる。

6. ダンスの学習指導は、体育に何をもたらしたのか

東京学芸大学 松田恵示

1. はじめに

ここでは、ダンスの指導法をめぐって、特に「創造性」という点に着目して検討してみたい。「創造性」という言葉は、ダンス教育や少し広く体育科教育においても現代において大切にされる教育の目標の一つであり、また、学習指導要領といった日本の教育政策においても、要となる教育の観点でもある。

例えば、平成25年に示された「第2期教育振興基本計画」においては、これからの教育を、「自立」「協働」「創造」の3つの言葉から特徴づけている。大きく変化し続ける社会において、「創造」するという力が大切なものとして脚光を浴びているが、もちろんこれは、教育において、あるいは人間の「生」において、これまでもそしてこれからも普遍性を持ち続けるひとつの価値であろう。もちろんダンスは、こうした広い意味での「創造性」を担う重要な教材でもありうるが、より重要な点は、ダンスを教育し学習するという営み自体が固有に持つ、他の教育や文化に対しての特徴の一つに、この「創造性」という要素が欠かせないという点である。

第二次世界大戦後、すでに70年をむかえようとしている今、ダンスの学習指導は、体育に何をもたらしてきたのか。ここでは、ダンスの学習指導についてその原理を明確にするためにも、この問い合わせに「創造性」という言葉をキーワードにして考察するものである。

2. 戦前から戦後への移行期におけるダンスの学習指導の源流

体育史学者の鈴木明哲は、「戦中戦後の学校体育実践資料：松本千代栄氏に聞く(fulltext)」と題した論文において、日本女子体育連盟の創設期に中心的な役割を担った松本千代栄氏に対して、1941年から1943年、そして1946年から1952年の間、奈良女子高等師範学校附属国民学校(1947年からは小学校)に教師として勤務した経験を聞き取り分析している。

私が奈良の自由教育を感じたのは5月5日の子供の日、端午の節句にあった学芸会でした。クラスの子供達が出し物をすることになっておりました。その中の踊りの部分で私にふりを教えてくれ、と言って各学級の子供達が来ました。赴任してはじめの1ヶ月でしたので、「日の丸の旗」、「ハトポッポ」を習っていたわけです。1936(昭和11)年の「学校体操教授要目」教材でしょうか。私自身、よく知らない教材でした。学芸会のふりはどうしようと思ったけども、仕方がないから、低学年にはタイやヒラメの演技で、喜んでいる踊りとか、それぞれの劇の中で作ってしまいました。そこで私は「ガツン」と頭を打たれたわけです。あの「日の丸の旗」、「ハトポッポ」は何なんだろうかと。自分が教材として習ってきたものは何なんだろうかと。これではこの子供達には間に合わない。もっと子供達は自分でいろいろ制作し、考えることができる力がある。劇の衣装を自分で作っている。ピアノが弾ける子もいましたし。(鈴木,P.117)

私が教育というものに初めて疑問をもった瞬間でした。奈良の教育全てに対して関心をもって見ていたわけではなく、その自発的な子供達にショックを受けました。私が習ってきた教材では間に合わないことを、この子供達はたくさん色々要求してくると、そのことがショックでした。それと疑問を感じたことはほかのことは自分でできるのに、生まれつきもっている手足ができるダンスを何故私に習おうとするのだろう、ということでした。ほかのことと同じようにダンスも自発的に

できるだらうと思いました。私は思つたらすぐやることにしておりますから,すぐにピアノを弾いてスキップをやって。その当時は基本体操や応用体操とかを教えるようになつてゐましたが,それらは教えないで,「スキップをやって好きなように跳びましよう」と言いました。そうすると子供も色々考えて飛び跳ねますね。そういう風にして色々試してみましたが,「やあ一,自分が教えなくてもやるもんだなー」とか,「でもこの先どうするんだらう?」と思ひました。現代ではどうってことないでしょうけど。私は考えました。子供に教材を「教える」と言うことはいいことなのだろうかと。今記憶に残つてゐる授業はたくさんありませんが,スキップを両方からやって来て,出会つたところで「自分たちの好きなことをしなさい」という指導をしていました。中学年の子供は一人が臼を作つて,一人が餅つきをして「ウサギの餅つき」をしました。その二人が舞台の袖に帰つていくと,また次の二人が「何々」と言って自分たち二人でかち合うことをやって帰つていきました。「教えなくてもやるはずだ」その辺のところを私は克明にノートをつけておりましたが,残念ながら戦争中になくしました。とにかく試行錯誤でやっていました。結論的に自分にはこの子供達の先は見通せないと思いました。私がちょっとやると,そこまであつという間にやつてしまふ。またまた一週間考えてきても,またそこまでやつてしまふ。(鈴木、同前)

ここには、戦後の舞踊教育が「振り写し」的教育から、「表現」と「創作」の教育へと変化していく源流を感じることができる。こうした語りに対して、鈴木は、「まずこの聞き取り調査で明確にしなければならない最初の点は,松本氏がたとえ戦争中であつても教師は子供たちを創造的に教育するべきであるという教育信念を抱き続けていたことである」と述べている。聞き取りの中での松本氏の「子供というのは本当に 創造的に育てるべきだと,戦争中も頑なに信じて志を変えられずにいた」という証言に、「1920 年代からの大正自由教育における体育が戦後にも連続していたという仮説の実証に対して, 總ばくかの可能性を与えてくれる」と強調するとともに、「さらにこの信念は戦後日本における舞踊教育,そして体育にも浸透していくこととなる」と鈴木はまとめている。つまり、身体を対象とし、訓練や鍛錬といった文脈の中で主に行われていた当時の体育科(体操科)にあって、すでに舞踊教育では、子どもたちの持つ主体性や自発性の意味について敏感に感じ取っていたとともに、教育における「創造性」という観点にいち早く照準しているという事実を示すのである。

また、ここに見られる「ウサギの餅つき」という教材が、音楽に合わせた自由なごっこ遊び、つまり「表現遊び」であることはなお重要である。つまり、「創造性」という観点は、こうした教材、あるいは学習の内容に連なつて生じたものであり、ここに現在でいうところの「表現運動/ダンス」領域の学習指導の源流を見るとともに、鈴木のいう「体育にも浸透する」という位置関係を捉えることができる。 「表現」「創作」「ダンス」「学習指導」「創造性」という一連のキーワードは、こうして不可分の、あるひとつの流れを作り出していることが、まずは確認できるところであろう。

3. 「表現」とはなにか

次の表は、朴と村田が、日本と韓国のナショナルカリキュラムについて、ダンスの内容の変遷を論じた際にまとめられた、日本的小・中・高等学校における、ダンスの内容の名称と学習内容の変遷を表したものである(朴・村田、p.42、2011)。

表1 日本の小・中・高等学校における、ダンスの内容の名称と学習内容の変遷

p.42

改訂年度	朴 村田						中学校	高等学校
	小学校			1学年 2学年 3学年 4学年 5学年 6学年				
昭和22年 (1947)	ダンス			ダンス			ダンス	ダンス
	・表現遊び ・生活環境から取材して表現させる			・表現 1. 自然運動によって基礎的身体を作る 2. 生活環境や生活感情から取材して創作的表現に導く			・表現 ・表現技術 ・作品創作 ・作品鑑賞 (民踊その他適当なもの)	
昭和24年 (1949)	リズム遊び	リズム遊び	リズム運動	リズム運動	リズム運動	リズム運動	ダンス	ダンス
	・むすんでひらいて ・たこあげ ・電車ごっこ	・のぎく ・みんなで楽しく ・マウンテンマーチ	・ぶらんこ ・波 ・バージニアリール ・困った小人	・ダンス一般 ・身体移動を主とする基礎運動 ・身体の柔軟性を養う基礎運動 ・生活体験から取材して表現 ・既成作品による表現 ・作品の創作 ・フォークダンス	・ダンス一般 ・身体移動を主とする基礎運動 ・身体の柔軟性を養う基礎運動 ・生活体験から取材して表現 ・既成作品による表現 ・作品の創作 ・フォークダンス			
昭和28年 (1949) 昭和31年 (1956)	リズムや身振り遊び	リズムや身振り遊び	リズム運動	リズム運動	リズム運動	リズム運動	ダンス	ダンス
	・歌を伴う郷土的な遊び ・模倣と基礎リズム	・歌を伴う郷土的な遊びと フォークダンス ・模倣と基礎リズム	・フォークダンス ・経験の表現と基礎リズム	・フォークダンス ・表現	・フォークダンス ・表現	・表現 ・フォークダンス		
昭和33年 (1958)	リズム運動	リズム運動	リズム運動	リズム運動	リズム運動	リズム運動	ダンス	ダンス
	・簡単な歌に 伴う遊び ・模倣遊び	・簡単な歌に 伴う遊び ・模倣遊び	・簡単な歌に 伴う遊び ・簡単なフォー クダンス ・模倣遊び	・簡単なフォー クダンス ・表現	・フォークダン ス ・表現	・フォークダン ス ・表現	・フォークダンス ・舞踊創作	
昭和43年 (1968)	ダンス	ダンス	ダンス	ダンス	ダンス	ダンス	ダンス	ダンス
	・歌に伴う遊 び ・動物、乗り 物などの模倣 遊び	・歌に伴う遊 び ・動物、乗り 物などの模倣 遊び	・簡単なフォー クダンス ・模倣遊び	・簡単なフォー クダンス ・模倣遊び	・フォークダン ス ・自然表現生 活事象など の表現	・フォークダン ス ・自然表現生 活事象など の表現	・フォークダンス ・創作ダンス	・フォークダンス ・創作ダンス
昭和52年 (1977)	基本の運動	基本の運動	表現運動	表現運動	表現運動	表現運動	ダンス	ダンス
	・模倣の運動	・模倣の運動	・軽くして柔ら かい感じ ・対応した動 きの感じ	・軽く柔らかい 感じ ・力が急に爆 発する感じ	・激しい感じ ・力強く作業 が進行する 感じ	・鋭い感じ ・対立する感 じ	・楽しく柔らかで滑らかな 感じの表現 ・激しく対立する感じの 表現 ・力強くまとまって活動す る感じの表現	・創作ダンス (フォークダンス)
平成元年 (1988)	基本の運動	表現運動		表現運動	表現運動		ダンス	ダンス
	・模倣の運動	・表現 ・フォークダンス		・表現 ・フォークダンス	・創作ダンス ・フォークダンス		・創作ダンス ・フォークダンス(その他のダンス)	
平成10年 (1998)	基本の運動	表現運動	表現運動	表現運動	ダンス	ダンス	ダンス	
	・表現リズム遊び ア. 表現遊び イ.リズム遊び (歌や運動を伴う伝承遊びや 簡単なフォークダンス)	・表現 ・リズムダンス (フォークダンス)	・表現 ・リズムダンス (リズムダンス)	・表現 ・フォークダンス (リズムダンス)	・創作ダンス ・フォーク ダンス ・現代的なリズムダンス (その他のダンス)	・創作ダンス ・フォーク ダンス ・現代的なリズムダンス (社交ダンスなどのその他のダンス)	・創作ダンス ・フォークダンス ・現代的なリズムダンス (社交ダンスなどのその他のダンス)	

こうした変遷を見ても、戦後すぐに「表現」(小学校、1947)や「創作」(中学校、1947)という言葉が使われ、スパートニク・ショックから自由主義諸国において教育の現代化が謳われ極端な技能主義に体育が走っていた時期にやや薄くなるものの、すぐに回復し、現代まで、大正期の源流として先に見た「表現運動/ダンス」領域の学習指導の特性が、戦後70年間ほぼ一貫したものであることがわかる。

ところで、鍵となっている、ここで使われる「創作」に礎を置いた「表現」とは、いったい何を指すのであろうか。

「表現」という言葉は語義的には、例えば「①内面的・精神的・主体的な思想や感情などを、外的・客観的な形あるものとして表すこと。また、その表れた形である表情・身振り・記号・言語など。特に、芸術的形象たる文学作品（詩・小説など）・音楽・絵画・造形など。「適切な言葉でーする」「一力」「一方法」、②外にあらわれること。外にあらわすこと。」〔英語 representation や expression の訳語。ロプシャイト「英華字典」（1866～69年）に display の訳語としてある。また、「哲学字彙」（1881年）に presentation の訳語として「表現力」と載る〕（大辞林 第三版、三省堂、2006）と説明されている。つまり、英語の”presentation”という言葉の意味に表されるように、「外ないし表に」目に見える形で「あらわれる/あらわすこと」という本義の上に、英語の”expression”のように、そもそも目に見えにくいものである内面性や精神性、あるいはイメージといったものを、「形のあるもの」にあらわすことを主には指しているということになる。もちろんそこでは、ある「形のあるもの」を、別な「形のあるもの」として表し直す、ということも含まれる。

ここで、ダンスや学習指導の場面で扱う「表現遊び」が、身体を使った表現であるとすれば、「形のないもの（あるいは形のあるもの）を、身体を使って形にする」ことがダンスや「表現遊び」の本質であるとともに、そもそも「形のないもの（表現するもの）」と「形のあるもの（表現されたもの）」という、2つのものの間にある、ある種のズレが、「創作」や、さらには「創造」という言葉との接点を生み出していることに気づく。ここに、そもそもズレがなければ、創作や創造といった、作品間や、それを支える一人一人の間に生まれる個性と、だからこそそれがもたらす「凄さ」「面白さ」「よさ」といったものが、生まれないからである。

ただ、そのズレを、単に埋めようとしてしまえば、それは「正しさ」や「答え」を探す活動になってしまふ。子どもたちの動きが画一化されてしまい、表現遊びはいつしか、表現の仕方の勉強になってしまふ。勉強という語感は、努めて強いられるものであるだけに、「定着」させることには長けた活動であることを強く感じさせてくれる。しかし、松本氏が、先の聞き取りの中で、「子供に教材を「教える」と言うことはいいことなのだろうか」と自問したのは、おそらくこの面を越えなければならない、という松本氏自身の戸惑いと確信を指しているのではないかと思われる。ダンスや表現遊びが、「創作」という活動を通して「創造」へと誘うのは、そのズレを埋めようとするのではなく、そのズレや崩れのなかに、これまでに出会ったことのない「新しさ」や「面白さ」や「ものの本質」といったものを生み出すからであろう。つまり、ズレは「定着」の道具ではなく、「生成」の契機となっているのである。

ダンスや表現運動の学習指導では、「イメージ」の存在がよく取りあげられる。「激しい」とか「元気に」などの言葉は、イメージを喚起させる言葉である。イメージとは、「心に思い浮かべる像や情景。ある物事についていだく全体的な感じ。心像。形象。印象。また、心の中に思い描くこと」（デジタル大辞泉、小学館、2015）と説明される。つまり、「形のないもの」であり、「デフォルメ可能なもの」であり、だからこそ、他者のイメージが「形のあるもの」に現されたときに、そのイメージの「ありえなさ」に、あるいは自己を超えた世界との遭遇に、人は「凄さ」「面白さ」「よさ」に漂う。またそのことで、自と他の新しい世界の「生成」を感じるのであろう。

このように考えてくると、ダンスや表現運動の学習指導において目指されているものは、身体を使った「表現」や「創作」のなかに、「形のないもの」が「形のあるもの」に現されたときに生じる「生成」と、「生成」された「形のあるもの」に触れて、自己の内にある「形のないもの」が

逆に「生成」する、双方向的な「生」の創造ではないか。なにも、「形のないもの」を「形にする」という技法を学ぶわけではなく、「形のないもの」と「形のあるもの」が、双方向的に無限に響き合い、両者がともに創造されていくプロセスそのものが、学習の内容として大切にされてきたのではないかということである。こうなると、「表現」「創作」「ダンス」「学習指導」「創造性」という一連の不可分のキーワードは、すべて一貫した文脈の中で繋がっていくことになるし、なによりも、このような面を、先の松本氏が「子供というのは本当に創造的に育てるべきだと、戦争中も頑なに信じて志を変えられずにいた」理由ではないかと思われるのである。

4. 「リズム」への新たな取組

ダンスや表現運動の学習が育んできたこのような「創造性」という観点は、特に昭和52年以降の学校体育で顕著となる「運動の楽しさ」の重視という面に、子供の主体性や自発性という中継点を経由して、影響を大きく与えたものと思われる。しかしながら、「運動の楽しさ」という言葉を、このような「生成」の問題として捉える環境が、日本の学校体育にはまだ整っておらず、ダンスや表現運動が持つ本質的な部分をうけつがれなく矮小化した学習指導がひろがったのもまた事実である。こうしたなかでも、「体ほぐしの運動」など、その影響の中に新たな学習内容として根付いてくる運動が取り扱われるようになったことも急いで触れておく必要があろう。

加えてここまで述べてきた、ダンスや表現運動が持つ「表現」の側面と、実は同じくらいの大きさで位置付いている、「リズム」の側面が、近年は大きく広がってきてている。ダンスや表現運動が、「表現」「創作」という窓から「創造性」を拓き世界を生成することについては前に述べたが、同様に、「リズム」は、拍子とテンポを「踊っているものと観ているもの」、「踊っているもの同士」という2つの位相で共有させることで、本来は個別、個人的なものとして現れる「生きられた時間」を他者と合一化させる。「シンクロナイズ」あるいは、「同期」といってもよい。そして、そうして他者と共有された「生きられた時間」は、ダンスや表現運動(リズム遊び)によってやはり同じく「生成」される。そしてそれらは、「生成」という次元において、「表現」と重なり合い、ダンスや表現運動に独特の「創造性」と世界=時空間の「生成」を促すのである。

この意味で、ダンスや表現運動の学習指導は、「リズム」という側面を通して、またもや強く学校体育に、「主体性」「協働性」「創造性」をもたらそうとしている。そして、これらの観点が今後の学校教育政策で重点化されるものであることを考えたとき、ダンスや表現運動の学習指導の70年が積み重ねてきた、そして主張され続けているある一点=「創造性」という財産を深く理解するとともに、この財産の活用の仕方を、学校体育が深く受け止め広げていくことが必要ではないかと思われる。そのためにも、ダンスや表現運動の学習指導の本質の共有と、それを「形にしてあらわす」授業づくりの日常化とモデル化が、現在求められている。今回の報告全体では、こうした成果と課題の解決策がまとめられているということになる。

＜参考文献＞

- ・松田恵示、「「権威主義」vs「個人主義」あるいは「振り移し」vs「表現・創造」」、女子体育, 56, pp. 38-43, 2014
- ・朴 京眞, 村田 芳子, 日本と韓国のナショナルカリキュラムにおけるダンスの内容の変遷に関する研究—日本の学習指導要領と韓国の教育課程を対象として—、(社)日本女子体育連盟学術研究 27, pp. 39-53, 2011
- ・鈴木明哲、戦中戦後の学校体育実践資料：松本千代栄氏に聞く、東京学芸大学紀要. 芸術・スポーツ科学系, 64, pp. 113-125

7. アクティブ・ラーニングを先導するダンス学習

東京学芸大学 鈴木直樹

1. はじめに

平成 24 年の「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて(答申)」では、「教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称」としてアクティブ・ラーニングが定義づけられた。また、平成 26 年 11 月の「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について(諮詢)」においては、教育改革への取り組みの為に、知識の伝達だけに偏らず、学ぶことと社会とのつながりをより意識した教育を行い、子どもたちがそうした教育のプロセスを通じて、基礎的な知識・技能を習得するとともに、実社会や実生活の中でそれらを活用しながら、自ら課題を発見し、その解決に向けて主体的・協働的に探究し、学びの成果等を表現し、更に実践に生かしていくようになることが重要であるという視点が示された。このように課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習(いわゆる「アクティブ・ラーニング」)が強調され、能動的な学習ができる子どもを育てる未来の教員達自身が能動的に学んでいくことが求められるようになった。

すなわち、「教師」中心(「教え」)から「子ども」中心(「学び」)へと教育の考え方が移行している中で、知識として何を教えるかではなく、また知識として何を学ばせるかでもなく、学習者自身が学ぶべき知識を、教師とともに自身や仲間との連携・協働によって能動的・主体的に修得していくしくみをどのように作り出すかが必要となっている。

2. ダンス学習の基本的な考え方

表現運動やダンスの学習は、運動会や体育祭の種目の練習に置き換えられることが多く、決められた動き方を学び習う学習形態が多いのが現状である。また、2008 年の学習指導要領の改訂に伴い、中学校でダンスが必修化されたことにより、ダンス・表現運動への注目が高くなり、教師の内容理解が促進されてきた一方で、適切な実践を行うことができていない上述したような現状は今なお多い。齋藤ら(2015)は、内容を理解していても、学習指導を適切に行うことができない要因を教員養成課程での学びの中で、適切な学習スタイルを経験していないことにあるとしている。実際に、小学校の教員免許を取得する上で、体育の指導法や実技を受ける機会は数少なく、中学校の教員免許を取得する場合も、指導法と関連させた学びができていないことが多い。また、現職教員となった後もダンス学習について学ぶ機会が多いわけではなく、一般的にイメージしやすいダンスという印象による教材作りが行われてきたのが現実である。ところが、このような現状とは対照的に、ダンス学習の基本的な考え方はいち早く確立してきたといつてもよい。

昭和 22 年に文部省より示された学校体育指導要綱には、創作して自己を表現するダンスが体育にとり入れられた。すなわち、ダンス学習という場が、既成作品を踊るという受動的な立場から、自ら創り出すという能動的な場へ転換したといえる。ここでは、ダンスが自己の身体を素材として感情や思想を表現する活動となり、身体活動を通して、知的かつ情緒的な活動を促進し、創造性を育成することが求められた(穴迫, 1968)。このような転換には、「教師」中心の「教え」

から「子ども」中心の「学び」への転換を見出すことができ、教師の統制的な画一指導から、子どもが主体の創造的な活動の支援を重視するような方向性を見出すことができる。

このような中で松本（1987）によって確立された「課題学習」はダンス学習の全面的な特質として「踊る・創る・観る」といったダンスの全体験(まるごと体験)の歓びを味わう学習法であるとされている。すなわち、「課題学習」とは、「踊る・創る・観る」の三活動を一時間の中で行い、即興的な体験を積み重ねてダンスの技能を高め、仲間と創る喜びを共有していくことをねらった問題解決学習である。このような学習では、教師が学びのきっかけとなる「課題」を提示し、その課題を解決しながら学習者自身が自分のダンスを創造していくことになる。したがって、ダンスの「課題学習」は、教師の課題の投げかけに始まり、学習者が主体的・協働的に学ぶことができる場に誘い、その学びを支援する働きかけによって展開されていく。

1968年に穴迫（1968）はダンスの集団による創作過程を明らかにしているが、ここで対象とされた授業も「課題学習」であるといえ、50年前にはすでに基本的な考え方が確立され、授業で実践されていたことをうかがい知ることができる。

3. アクティブ・ラーニングとしてのダンス学習

国立教育政策研究所（2013）では、21世型能力を「①思考力を中核とし、それを支える②基礎力と、使い方を方向づける③実践力の三層構造」から捉えており、ダンス学習における問題解決のプロセスで発揮される能力そのものと言える。また、このようなダンスの学習は、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習であるといえ、それはアクティブ・ラーニングそのものであるともいえる。

ダンス学習では、「創作」が学習内容として求められてきたこともあり、動きを身につけ、定着させるといった獲得型の学習ではなく、動きを生み出すといった創造型の学習が展開されてきたといえる。そこで、指示ではなく、発問を中心とした指導法によって、子ども達が意思決定して学ぶことを働きかけ、課題と出会い、仲間と出会い学び合う場を生み出すように支援をしてきた。このようなダンス学習で基本にしてきた発問を中心とした学習形態は Inquiry Based Learning (IBL) などともいわれる。このような学習では、発問（問い合わせ）は数多く行うことも重要であるが、同時に、良質の発問（問い合わせ）をする必要がある。良質の発問（問い合わせ）とは、思考や活動を促進し、内発的に動機づけられ、主体的・協働的に学びを進めたくなるものでなければならない。そして、それが課題の発見とその解決につながるものでなければならない。すなわち、そのような発問は、「踊る力」「創る力」「観る力」、指導者として「引き出す力」を高めていくようなものでなければならない。加えて、活動している学習者が自己を見つめ「探る」ものであり、共感する「伝える」ものでなければならない。このような「発問（問い合わせ）」を大切にし、学び深めるダンス学習の形態は、近年では他の運動領域でも中心的になってきた。

例えば、ボール運動・球技では発問を中心にしてゲームを通して学ぶ学習形態が主流になってきている。Teaching Games for Understanding (TGfU) や Game Sense といわれるゲーム中心、プレーヤー中心の指導法も認識面に働きかけ、問題を発見し、解決を促す学習の進め方といえる。この指導法では「ゲーム」と「教師の発問」の質が大切であるとされ、ダンス指導の基本的な考え方と同様の考え方によって、学びを生成することが求められている。細江ら（2014）もまた、運動のおもしろい世界を味わいながら、気づきを促し、それを基盤にして学びが深まる指導方法

の提案をしている。そこでは、指示ではなく、発問（問い合わせ）を中心とした指導が重視されている（細江ら、2014）。このようにアクティブ・ラーニングとして主流となってきた指導法の基本的な考え方は、ダンス学習の基本的な考え方と共通する点が多く、ダンス学習において古くからアクティブ・ラーニングとして学習論が確立されてきたことを改めて理解することができる。

4. おわりに

以上、ダンス学習が創作をベースとして、古くからアクティブ・ラーニングとしての考え方を確立してきており、体育のアクティブ・ラーニングを先導してきたことを整理してきた。そこで、アクティブ・ラーニングに基づく体育授業を考える上で、積極的にダンス学習に着目すべきである。すなわち、アクティブ・ラーニングのフレームワークを研究が積み重ねられてきたダンス学習に求め、そこから体育におけるアクティブ・ラーニングの確立を目指していく必要があるのではないかと考える。

＜参考文献＞

- 1) 穴迫洋子 (1968) 学校におけるダンスの研究 一ダンスの創作過程について(1). 大阪教育大学研究紀要. 第17巻 (第V部門) (昭和43年)
- 2) 細江文利・鈴木直樹・成家篤史・細川江利子・山崎大志編著 (2014) 動きの「感じ」と「気づき」を大切にした表現運動の授業づくり. 教育出版
- 3) 国立政策研究所 (2013) 教育課程の編成に関する基礎的研究 (報告書5) 社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原理
- 4) 松本千代栄, 「おどり・つくり・みる」女子体育, 女子体育連盟, 29-3, 1987. pp. 8-9.
- 5) 斎藤祐一・菊地孝太郎・田島香織・鈴木直樹 (2013) 持久走および長距離走に対する認識形成プロセスに関する研究. 東京学芸大学連合博士課程 学校教育学研究論集(28): 65-80

第4章 外部指導者活用ダンスプログラム

【第4章の概要】ここでは、外部指導者活用の実践事例を、横浜市の「横浜市芸術文化教育プラットフォーム」や「Dance Dance Dance@ YOKOHAMA 2015 次世代育成プログラム」、神奈川芸術劇場、附属鎌倉小学校での取組みを紹介し、コーディネーターの重要性について記述した。

1. 横浜市芸術文化教育プラットフォームの取組み

特定非営利活動法人 S T スポット横浜 理事長 小川智紀

1. S T スポット横浜の活動

S T スポット横浜（以下「S T」）は、横浜市内最小となる公設民営ホール・S T（佐藤亮太館長）を運営する芸術機関として1987年に活動を開始した。レンタルスペースの提供に留まらず、開館以後現在に及ぶまでコンテンポラリーダンスや現代演劇の自主事業公演を展開し、多くの芸術家に愛されてきた。2004年度からは地域コミュニティに向けた活動を担う地域連携事業部を設置し、本稿で詳述する学校での芸術家による授業実施のほか民間の文化団体支援や障害者アートに関する事業を行っている。

2. 横浜市芸術文化教育プラットフォームの概要

S Tが事務局代表を担う、横浜市芸術文化教育プラットフォーム（以下「P F」）は、横浜市文化観光局、横浜市芸術文化振興財団、S Tによる協働事務局のもと、学校にさまざまな分野の芸術家を派遣し、教員とともに授業を作りあげる事業を実施しており、事業開始の平成16年度から27年度までのべ10万人近くの児童・生徒がプログラムに参加した。対象となっているのは、横浜市立の小・中学校および特別支援学校で、これまでにのべ828校にのぼる。全体の9割が小学校での取り組みだ。分野別では、全体の4割が音楽分野、ダンスは107校で全体の12%の実施にあたる。平成27年度に実施したダンス分野での取り組みは26校を数える。取り組む芸術ジャンルは、決められたプログラムから選択する形式ではなく、毎年3～4月に提出される各学校の希望調書をもとに計画が立てられるため、ほぼ現場の教員の希望に沿っている。

3. コーディネーターの果たす役割

実際に学校とアーティスト間で調整を行い、現場の企画・運営を担当するのは、コーディネーターと呼ばれる人々である。その仕事は、教員から詳しい希望内容を打合せるところから始まる。学校現場における教育の専門性と、コーディネーターが持つ芸術分野の専門性を掛け合わせて、充実したプログラムを作り上げるために尽力する。アーティストの選定や予算

管理も彼らの仕事だ。市内外で活動する芸術活動の専門家がコーディネーターとして事業に協力しており、

その団体数は37。平成27年度にダンス分野の取組をコーディネートしたのは、横浜赤レンガ倉庫1号館、横浜市民ギャラリーあざみ野、吉野町市民プラザなどの横浜市内の文化施設や、芸術家と子どもたち、Offsite Dance Project、S TといったN P Oである。彼らの調整がなければ、



山下彩子による六浦南小学校の取組:2015
S T スポット横浜がコーディネーター

芸術家側の一方的なプログラム提供になるか、学校側の要請のみに応じる御用聞きになるか、いずれにしても充実したプログラムの実施はおぼつかない。調整機能が万全に機能することで、プログラムに初めて応募する教員も、学校の実情に応じた取り組みが可能になる。

4. ダンス分野での多様な取り組み

2015年度にダンス分野で行われたプログラムは、日常のしぐさなどを身近なダンスにしていく小6対象の「ダンスで対話する」、遊びや即興をもとに校歌をダンス作品にしてしまう小3対象の「みんなでおどる校歌ダンス」、体育館や通学路で踊ってみる小3対象の「いつもの場所で動いてみる」など。いわゆる型が前面に出てくるようなダンスよりも、子どもたちにあわせてプログラムを柔軟に組み替えられるコンテンポラリーダンスが、学校との親和性が高いように思われる。実施された教科・科目は、体育か総合的な学習の時間が多かった。また特別支援学校では、ダンサーと現代音楽家、現代美術家、演劇人といった座組みを組む等、他分野と融合させた取組を行うことが多い。特に重複障害のある子どもたちにとっては、ダンスを含めた空間全体で芸術を捉えることが、プログラムを実施する上で重要なためだ。



岡田智代による浦舟特別支援学校の取組み
S T スポット横浜がコーディネーター

5. 今後に向けて

P F 事務局で行った 2014 年度の調査によると、教員が「今回の取組みにより、子どもたちにとって最も力がついたと思われる項目」(図1)は、取組全体(134 校)では「表現力」「感受性」「想像力」の順となる。ダンス分野の実施校(22 校)では、「表現力」に続くのは「協調性」「コミュニケーション能力」となる。プログラムを進める中で、子どもたちが揃って同じ振り付けを一糸乱れず踊るイメージをダンスに対して抱いていた教員からは、驚きの声が上がることも多い。子どもたちのダンスを豊かにする鍵は、教員のダンス観の変化であるとみても差し支えあるまい。

また、ダンサー自身が学校教育に関わる際に、論点を整理しておくことも重要である。多くの場合、ダンサーは学校教育とは違う環境でダンスの専門的なレッスンを受けた記憶がある。しかし、学校教育でそういう技法だけで授業に関わることは想定しづらい。こういった課題に対応するため、2013 年以降、ダンサーが中心となった民間団体「スクール・オブ・ダンスプロジェクト」

が横浜で、ダンサーたちに向けた研究の場を作る等、動きも活発になってきている。同時に、コーディネーター達が、ダンスと学校教育に対する専門性を高める機会を作ることも将来的には必要となってくるだろう。その際は、ダンスの比重が高い文化芸術の専門施設と、高等教育機関とが長期的な視点を持って連携していくのが最良だと考える。

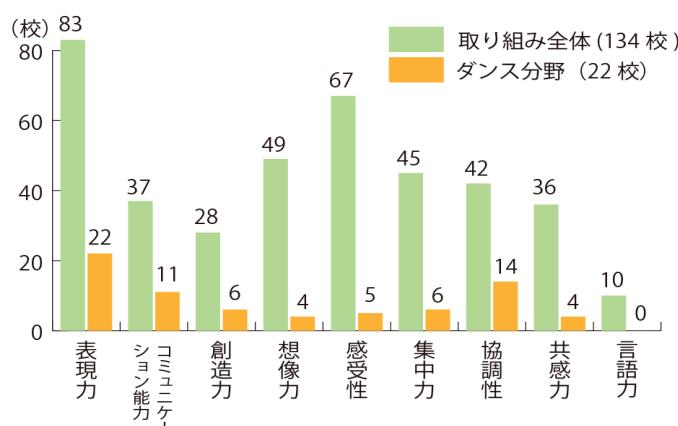


図 1 「子どもたちにとって最も力がついたと思われる項目」
(複数回答:平成 26 年度)

2.KAAT 神奈川芸術劇場の取組みから探るアウトリーチの意義

共立女子大学 伊藤史織

1. ダンス指導の壁

中学校でのダンス必修化の影響により、メディアでは人気グループのキレのあるダンスが度々取り上げられ、子どもが憧れを示す一方で、一部の教員にダンスは「技術が必要で難しい」というイメージが植え付けられているようである。この「ダンスイメージの壁」を含め、高橋(2016)はダンス指導における3つの壁を指摘している。一つは、今年度の全国体力・運動能力、運動習慣等調査で明らかになった、男子がダンスを、女子が柔道を「やりたくない」という「性差の壁」。そして、もう一つは「指導者の壁」。ダンス指導が困難だと感じている教員に理由を尋ねると、「小中高でダンス授業を受けていない、教員養成大学でダンスが必修化されていない、教員採用試験でのダンス実技がない、ダンスの指導内容が分からないので教えたことがない」等、教員自身のダンス経験や指導法・知識の乏しさが明らかになったのである。

2. 劇場におけるアウトリーチ

これらの課題を改善すべく、現在躍をかっているのが、アウトリーチ事業である。この事業は、公共劇場や芸術団体がコーディネーターとなり、アーティストを学校に派遣し、子ども達や教員の為に作品の上演やワークショップを実施することが主流となっている。学校教員とは違った視点で子ども達の表現を引き出したり、アーティストの感性に触れることで、創造性や独創性が刺激されるなどの効果が注目され、徐々に需要が高まっている。特に、横浜市では、学校でのアウトリーチの実施率も高く、近年ではコーディネートを務める劇場や団体も増えているという。しかし、事業の歴史としてはまだ浅い為、学校や子どもとの関わり方などについて不明確な点や課題もあると聞く。このような流れを受けて、平成26年度にKAAT 神奈川芸術劇場では、これからアウトリーチ事業の実施を考えている劇場や団体、そして学校に対して、研修機会が設けられた。

【 KAAT 神奈川芸術劇場「ダンス指導者養成講座」】

KAAT 神奈川芸術劇場では、平成26年度の事業の一つとして、公共ホール職員や地域コーディネーターとしてダンスの指導家を目指すダンサーや振付家、アートマネージャー等を対象に「ダンス指導者養成講座」が実施された。内容は、ダンスを実体験するだけでなく、ダンスの現代にいたるまでの歴史や多様性、子ども達への指導方法など多角的に研修を行うことを目的とし、舞踊評論家による座学やジャンルの異なる振付家によるシンポジウム、そして教員や教育関係者に向けたワークショップ等が開催された。中でも、教員や教育関係者に向けたワークショップでは、実際に小学校や中学校でワークショップの実施経験があるアーティストがダンスのレクチャーを行い、参加者のダンスに対する疑問や意見を題材にディスカッションが行われた。今回は、ワークショップの事例の一部をあげ、教育的観点からアウトリーチの意義を探る。

伊藤キム 第1回ワークショップ (講師:伊藤キム、アシスタント:大熊聰美)	
参加者	7名
項目	内容
趣旨	教育現場でストリートダンス、ヨサコイではない身体を使うダンスを教えるノウハウを与える機会を提供する指導者を養成することを目的とし、「からだ遊びダンス」の実践を通して子どもたちのダンスや表現を引き出す為の実践や、全国で実施されている劇場のアウトリーチ事業についての情報・意見交換を重ね、よりよいダンス・表現の実践について考える。
導入	挨拶・趣旨説明 講師・アシスタント・参加者紹介
実践	<p>「からだ遊びダンス」の体験</p> <p>1.ウォームアップ: 小さくて柔らかいボールを投げ合う (動きながら) 2.まねっこゲーム: リーダーの動きを全員でまねる。リーダーは講師から順に参加者へと交代していく、慣れてきたらグループに分かれて実践 3.しじみゲーム: 3人一組で2人が手をつないで輪をつくり、その中に1人入る。外側の2人はしじみの「殻」、中の人は「身」とし、掛け声に合わせて組み合わせを変える 4.輪になってリズム遊び: 輪になって時計回りに「拍手」を送る。「拍手」の部分をポーズ・名前・好きな食べ物など変化させてもよい。 5.音楽を流して: 講師の動きをまねる。8呼間の中で動きにバリエーションを持たせていく。8呼間目に手を叩く、5・6呼間の間に走りまわり 7・8呼間目でポーズなど 6.風船運び: 2人でひとつ風船を膨らませ、手を使わずに体で挟んで運ぶ。他のペアと混ざって組み合わせを変えたり、エアーで風船があるつもりで動く。 7.人形: 2人1組になり、1人は仰向けでねる。 【グニヤグニヤ】もう一人は自由に形を変え、座らせたり立たせたりする。寝ている人は、なるべく自分で動かないようにする。 【カチカチ】寝ている人は仰向けの状態から動かされるがままに形をとどめる。彫刻家になったつもりで表情や向きなども変えてみる。 8.ひとり人形: 床に寝たところから、まるで人に動かされているようにひとつひとつ形をつくっていく。パートナーがいないでできることをやってみる。 9.音で動く: ピアノの音が鳴った時だけ動ける。単音でもなっている間は動いてよい。 10.あやつり人形: 2人組になって1人が操る役になり、もう一人は見えない糸で操られているように、相手に合わせて動いていく。</p> <p><伊藤キムさんへの質問></p> <ul style="list-style-type: none"> ・45分の授業でのワークの選択・組み立てるポイント→前半はゲーム感覚で深く考えずにできるもの。後半は頭を使って自身での工夫が必要なものを扱う。 ・ダンスや表現に対して苦手意識を持つ子どもや、より興味を持たせるための工夫→導入の段階で、子どもの警戒心を解くような雰囲気づくりをする。時には、今回扱ったような簡単なボール遊びを取り入れるなど、ダンスと関係のないことを取り入れることも必要。また、ワークを無理に強要せず、興味をもつたらやらせるようにする。 <p><宿題></p> <ul style="list-style-type: none"> ・今回のワークショップをベースに参加者が気になっていることを調べてくる ・学校で実践しているワークや題材の紹介
フィードバック	

伊藤キム 第2回ワークショップ (講師:伊藤キム、アシスタント:大熊聰美)	
参加者	7名
項目	内容
導入	挨拶・前回の振り返り
実践①	<p>参加者 (小学校教諭) のワークを体験</p> <p>1. ビニール素材の活用→ビニール袋・傘用の袋を放りなげ、質感を表現する。膨らませて風船のようにし、体の様々な部分を使って渡し合う。</p> <p>2. イメージカルタ→「もしも天井が落ちてきいたら」「激しい流れだ。イカダでわたれ!」などの言葉を書かれたカルタを床にばらまき、二人組になって、めくったカルタに書かれている言葉や情景を表現する。</p> <p>3. 音楽を聴いて動く→異質やリズミカルな音楽などを流し、感じたままに動く。</p> <p><体験者より質問></p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループで動きをつくる時のポイント→一人で作ったものを真似してしまう可能性があるので、リードをとる人が偏ないように教師が配慮する ・のらない子どもの対策は?→今の子どもの感覚に合った現代的なリズムの音楽を使う
実践②	<p>参加者 (大学非常勤講師) のワークを体験 ※新聞紙を使った2人1組で行うワーク</p> <p>1. 風を受けて走ろう!→手をつなぎ体の前面に新聞紙をはりつけ落とさないように走る。</p> <p>2. どこまでのれるかな?→1枚の新聞紙をひろげたところから折りたたんでいき、どこまで2人でのり続けられるか挑戦する。</p> <p>3. からだでキャッチ!→一人が新聞紙を投げて、もう一人がそれを背中・おなか・右足など体の様々な箇所でキャッチしていく。</p> <p>4. なりきろう!→一人は新聞紙をなびかせたり、丸めたり、投げたりして、新聞紙を様々に変形させていく。もう一人はその新聞紙の様子を即興的に体で表現する。応用編として、エアーでの実践も行う。</p> <p><体験者より感想・意見></p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分では考えられない動きを相手から与えられる ・新聞紙を使うと造形的なことができそう。図工の授業にも発見できるのではないか
事例報告	<p>アウトリーチの現状</p> <p><企画者の意見></p> <p>ダンス必修化をサポートしたいという思いから、公共劇場からダンサーを派遣したいと考え、企画を立ち上げた。小学6年生を対象に実施した際、自分をさらけ出すのが苦手だった子どもが、自然と恥ずかしくなくなった事例を見て、成功を感じた。しかし、時間・予算不足、研修会やマニュアル伝達会など、教員への趣旨や効果の説明にかなりの時間を要し、実践の難しさを感じた。</p> <p><課題・展望></p> <p>アウトリーチ事業のほとんどが公募型で費用や時間のある学校の子どもしか体験することができない。多くの子ども達がアーティストと関わられるよう、教育委員会を巻き込んだ事業展開・ソフトづくりの必要がある。また、アウトリーチを体験した学校側も、その場限りにならないよう、子ども達の今後に活かされるような形に変容させ継続させることを目指したい。</p>

3. 誰もが体験できる機会を得るために

ワークショップに参加した教員のほとんどは、ダンスだけではないにしろアウトリーチの経験があり、それぞれにプロの「凄さ」を語った。メディア・スポーツ界・舞台などで活躍するプロのパフォーマンスを間近で体感した子ども達は、キラキラと目を輝かせ、講師達の言葉に真摯に耳を傾け、直向きに取組んでいたと振り返る。そして、今回、教員自身もアーティストならではの指導の視点や魅せ方に触れ、アウトリーチを活用することの重要性を改めて実感したという。学校・劇場・アーティスト、それぞれとの対話の中で、強く議論された点や課題について取り上げ、このワークショップとアウトリーチ事業の意義を明らかにしたい。

1) やりたくてもできない学校

教員からは、予算・時間が限られており、それをなんとか屈して応募しても当たらないという、アウトリーチをやりたくてもできない学校側の現状が指摘された。それに対して劇場側からは、「応募してもあたらない」という問題に対して、コーディネート団体にあたる芸術団体や公共劇場側の人材不足が応募枠を拡大できない要因のひとつとして考えられるとの返答がされた。これは、平成25年度の第65回舞踊学会大会シンポジウム「劇場におけるアウトリーチ～ダンス・プログラムの可能性」においても、(公社)全国公立文化施設協会アドバイザーの柴田英紀氏(2013)が指摘しており、「公益財団法人全国公立文化施設協会の加盟館の約8割が貸館事業と鑑賞事業中心の劇場で、人材も財源も少ないなかでの事業展開がなされ、小さい劇場では常駐する職員3人で総務・事業・経理・舞台技術を兼務する」現状について述べている。

そして、「予算・時間」については、学校側も劇場側も強い課題意識があり、また「校長」や「教育委員会」の理解がこの課題解決の鍵を握るという意見があがった。実際に、この両者どちらかの理解があると、アウトリーチ実施への動きが早いという、コーディネーターとしての実感も報告された。これらの意見を総合して、校長や教育委員会等の教育における上層部にアーティストのワークショップを体験してもらうことで、アウトリーチへの理解が深まるのではないかという共通の見解が生まれた。

2) アウトリーチにおけるアーティストの存在

ワークショップにおいて特徴的だったのは講師の提示する実践内容について、参加者が学習指導要領を基盤とする学校における子どもの学習の方針に寄り添っているかという観点で、議論がなされた点である。講師の伊藤キム氏は「専門家じゃないとできないというものはあまり意味がなく、普通の先生でも経験のない方でもできるようなもの」をこのワークショップを通して考えたいと、学習指導要領に寄り添った実践内容を提示した。その上、実践中に何度も参加者に対して「取り組み易いか」「子どもに有効か」ということを尋ね、丁寧な教材研究の場が作り出された。このように参加者だけが一方的にアーティストの手法や思考を受け取るだけでなく、講師自身もアウトリーチにおけるアーティストのあり方を探る、双方にメリットのある時間が提供された。

3) 中学校でこそ実践を

今回取り上げた KAAT 神奈川芸術劇場「ダンス指導者養成講座」を始め、アウトリーチに携わる団体の多くが、中学校でのダンス必修化をきっかけに、事業が発端したり強化される場面が見受けられる。しかし、その対象は小学校の場合が多く、必修化の拠点であり、対応に戸惑う声も多い「中学校」での実施が難しいという。その要因を教育委員会所属の参加者は、中学校の「スケジュール文化」による多忙な状況によるものと指摘し、半年前から学校側とやりとりをするこ

とや、放課後を活用したプログラムの提案をした。コーディネーターとして活動する公共劇場の職員は、その提案に賛同し「自分を塞ぎ込みやすい時期である中学生にこそ体験してもらい、次世代育成という視点で10年～20年先の子どもの成果を見越して、アウトリーチを取り入れてほしい」と中学校で実践することへの意義を語った。

以上のことから、ダンスにおけるアウトリーチ事業を通して、子どものみならず、教員やアーティストにも子どもの成長や指導観を再考する場が生まれることが示唆された。そして、この活動を誰もが体験できる機会を得る為には、単に事業の数を増やすことだけではなく、学校・アーティスト・劇場が自身の強みを提示しながら、それぞれの立場に寄り添うことが必要不可欠であることが明らかになった。教育の現場では、子どもに注目をおくことはもちろんだが、今回の事例のように、子どもをとりまく大人に焦点をあてることで、アウトリーチの体験が一時のものだけに終わらず、多くの子ども達の中に長く響き続けるものへと変化させる手立てを探る絶好の機会であったと考える。KAAT 神奈川芸術劇場を始め、今後とも多くの公共劇場や芸術団体において、このような場が設けられることを願ってやまない。

＜引用・参考文献＞

- 高橋和子(2013)学校教育におけるダンスの歴史的変遷と教育的価値，舞踊学会,第36号,122-123
高橋和子(2016)改訂期のダンスでいま、何がどう問題か,体育科教育学研究,
伊藤史織(2015)開かれた場所から始まる化学反応～常識・分野・世代を超えるダンスの力～,女子体育,
第57巻第4・5号,40-43
柴田英妃(2013)劇場と実演芸術家の創造環境はどう変わらるのか?～劇場法及びその指針の制定を受けて,
舞踊学会,第36号,120-121
NPO法人STスポット(2015)「横浜横浜市芸術文化教育プラットフォーム・学校プログラム」
平成26年度事業報告書「アーティストが学校へ」,横浜市芸術文化教育プラットフォーム事務局

3. 開かれた場所から始まる化学反応：常識・分野・世代を超えるダンスの力 『女子体育』クラブ・NPOダンス 2015年4月掲載 伊藤史織

1. はじめに

自分自身のことを「中間の人間」と例えることがある。それは、常に私が複数の所属を持つことに由来している。年によってその所属は変化しているが、現在は「ダンス」を主軸に地域・劇場・教育の現場でアシスタントや助手という立場で活動を行っている。経験も知識も十分とは言えないが、様々な環境や人の間に挟まれている私の視点から、これまで携わってきたプロジェクトや事例を紹介し、ダンスの「今」と「力」をお伝えしたい。

2. 日常空間が舞台に

近年、公共の場に集まり突如パフォーマンス（ダンスや演奏）を行うフラッシュモブ(flashmob)という行為が、話題を呼んでいる。日本ではメディアが外国のフラッシュモブ映像を取り上げたことをきっかけに、誕生日やプロポーズ、結婚式のサプライズ演出に使われ「人を喜ばせる」為に用いられることが多いという。私自身もショッピングモールを舞台にしたプロジェクトに制作助手として参加したことがある。買い物をしている主婦がノリノリで買い物かごを振り回し、カフェでくつろいでいたはずのサラリーマンがコーヒーを片手に踊り始める。突如繰り広げられるこれらのパフォーマンスに、さぞ鉢合わせた人々は感激し目を奪われているのではないかと思われた。そんな矢先、一人の怪訝そうな顔をしたご婦人に声をかけられた。「これは許可をとってら

っしゃるの? こういうことは、事前に告知して頂かないと…」。さらに、とある家族連れは「迷惑だ!」と店へ怒鳴り込んできた。前述したように、フラッシュモブは突如行うことに主眼を置いているため事前の告知はない。また、ショッピングモールへの許可は得ているが、具体的な内容は知らせていない為、各店舗の従業員は当日になって初めてそのパフォーマンスを知ることになる。この時は、スタッフが迅速に対応し事なきを得たが、話題性に関係なく、これらの行為を快く思わない存在(人達)がいることを強く実感した出来事であった。しかし一方で、子どもはこのパフォーマンスに目を輝かせ食い入るように見ており、中には一緒に踊りだす子や、「行っちゃダメ」と母親に阻止される手を振りほどき、こちらに走り寄ってくる子どもの姿があった。たとえ大人が非常識だと感じたものでも、面白そう・楽しそうであれば受け入れ、体が動いてしまう。それは、子どもだけでなく、世代を超えて子ども心を持った大人をも惹きつけるフラッシュモブの神髄を見たような気がした。

3. 劇場におけるアウトリーチ

劇場法の施行により、劇場のアウトリーチ・プログラム(普及・活性化事業)が積極的に展開され始め、特に教育分野では平成20年に中学校学習指導要領改訂を受け、ダンス領域においてニーズが高まっている。特に、東京都や横浜市では、NPO団体や劇場がコーディネーター役となりアーティストを学校に派遣し、教員との共同授業の実施や特別活動の時間を利用したワークショップの体験・作品観劇を行うものや、応募によって集まった子ども達をアーティストがワークショップを通して作品創作をし、劇場の舞台で上演をするものなど、子ども達がプロや本物に触れる機会がこうしたプログラムによって実現されている。

子どもがプロのアーティストの価値観や作品に触ることは、子どもの表現意欲を刺激し創造性を育むだけでなく、ダンスの指導に悩む教員の手助けにもなるとして、アウトリーチの有効性は高い注目を集めている。しかし、教育現場に関する知識を十分に持たないアーティストやコーディネーターの存在により、学習指導要領から大きくかけ離れているものが実践されるケースも少なくなく、受け入れを懸念する声も耳にする。例えば、ヒップホップやストリート系のダンスは人気が多く、メディアで大きく取り上げられるようなグループやダンサーが指導にくるとなれば、子どもたちのダンスに対する興味や意欲は一気に向上することだろう。けれども、これらのケースの場合、振りを教え込む形だけになりやすく、学習指導要領で求められるような即興的な動きやリズムにのって自由に身体を動かすこと、そして子どもの個性を引き出すような指導がなされないのが現状である。



エスカレーターで踊る女性



中庭で踊る子どもたち

プロや本物が子どもに与える影響というものは、実に大きい。だからこそ、コーディネート役となる劇場・NPO団体やアーティストには、それぞれの価値観を提供するだけでなく、「子どもを育む」という観点や教育現場が何を求めているかをしっかりと把握した上で実践に臨むことが期待される。

4. 開かれた学校

最後に、小学校が主体となったアートプロジェクト『鎌倉なんとかナーレ』を紹介したい。『鎌倉なんとかナーレ』は、当時、横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉小学校（以下、鎌倉小）の教諭であり、『鎌倉なんとかナーレ』企画者である高松智行教諭により実現された。鎌倉小を「アート（日常の教育活動を超えた試み）」の拠点として位置づけ、アーティスト、NPO団体、教員、保護者、地域住民、学生、児童生徒など、多様な個性が作品展示やパフォーマンス、各種公演、ワークショップなどをとおしてコミュニケーションを図り、学校の有り様について再考するプロジェクトである【高松智行,鎌倉なんとかナーレ記録集. 2013】。私はそのプロジェクトの一環として、2012年に「日常?!ダンス」というフラッシュモブから着想を得て、学校空間（教室・廊下・中庭・通学路など）を舞台としたパフォーマンスを小学4年生の子ども達と共に行った。

「日常?!ダンス」の実現に至るまでは、担任との6回にわたる協同授業の実践や、ダンス部に所属する大学生の協力が必要不可欠であったが、子どもの表現力や踊りたいという気持ちに溢れる姿を多くの人に見てもらいレスポンスを受け、そこからさらに向上していく子どもの姿を追うことができたのは、何より小学校が開かれた場であったからこそだと実感している。また、実践の過程の中で、指導観やダンスに対するイメージが変化したり、普段は見ることのできない子どもの姿を目の前にして、学校や子どもに持っていた先入観を改めたりと、子どもを取り巻く大人たちも、まるで化学反応のごとく変わっていった。

企画者の高松教諭は、「子どものために」という既存の価値で子どもを囲い込むことではなく、大人自らが多様な個性と出会い、既存の価値を越境していくことを、このプロジェクトにおいて大切にしておられた。だからこそ、常識・分野・世代を超えて、それぞれが一個人として存在し、学校がそれぞれの価値観や思考を共有する場と化していたのだろう。

5. まとめにかえて

劇場・学校・地域は、時に「閉じた」空間と言われることがある。それは、長く培った伝統や方針が詰まっており、それを壊さぬよう、汚さぬよう、後世に伝えるため大切に守られてきたからだろう。しかし、それぞれの常識・分野・空間は、限られた人しか踏み入れられない狭い世界であっていいのだろうか。これまで述べてきた実践例は、その場所が「開いた」時、子ども達が躊躇なくその世界に足を踏み入れ、翼を得た鳥のように自由に飛び回り、行き来し楽しむ姿や、大人でさえも変化していく様子が垣間見えたはずである。私が「中間の人間」をし続けているのも、ダンスに「閉じた」場所を「開く」力があることを実感し、それを繋いでくれる子ども達の存在に、深く感銘を受けているからなのかもしれない。ここであげた事例に留まらず、多くの人に開かれた場所で化学反応が起きる瞬間を目撃し、体感してもらいたい。そして、これからもその場所が発展し繋がっていくよう、様々な場が開かれ、子ども達の目を輝かせるような出来事が生まれてくれることを願ってやまない。様々な主張や思いが交錯する中間は、時に激流に飲まれるような苦しいこともあるが、私自身も子ども達のように点と点を繋ぐ存在になれるよう努めたい。



教室がダンスの舞台に？！

4. Dance Dance Dance@YOKOHAMA 2015 次世代育成事業【映像あり】

高橋和子

横浜市は前述した「横浜市芸術文化教育プラットフォーム」のほかにも、子どもが参加できるダンスプログラムを多く企画している。そのきっかけになったのは、2012年の「Dance Dance Dance @ YOKOHAMA 2012」である。2013年には「横浜音楽祭り 2013」、2015年には「Dance Dance Dance @ YOKOHAMA 2015」と継続して開催してきた。事業は横浜市文化観光局が担当し、市を挙げて支援している（事業報告書より）。そのコンセプトには、横浜市が「幅広い市民参加や次世代育成、世界水準の文化芸術による都市の魅力の国内外への発信、賑わい創出と経済活性化」を掲げていることと連動している。「Dance Dance Dance@ YOKOHAMA 2015 次世代育成プログラム」においても、子どもたち（幼児から大学生）に提供された企画は、①発表機会の提供、②ワークショップの実施（プロアーティストの派遣）、③鑑賞機会の提供であった。詳細は下記に記述する。これらを実施するにあたって、事業担当者は過去の企画の振り返りやアンケート調査を行い、参加者のニーズに合った企画にするよう、柔軟な思考と実践を心がけていた。その結果、多くの参加につながり、企画に対して、高い満足度も得られた。

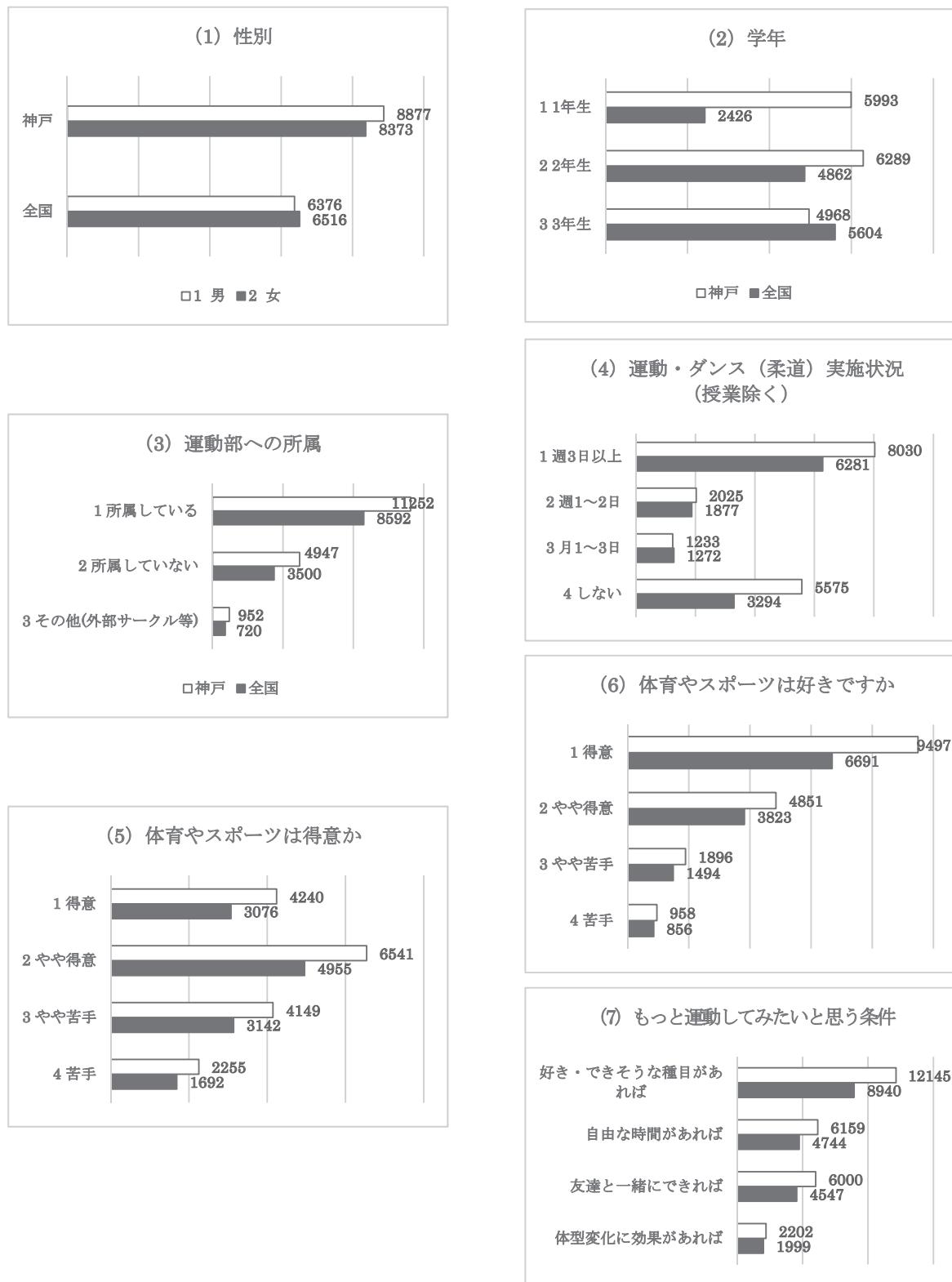
以上見てきたように、子どもや学校を巻き込んでダンスを振興・普及するイベントはこれからも益々増えることが予想される。横浜市の取組みのように、企画者やコーディネーターが未来を生きる子どもたちに何を願っているかを明確に決め、実施されることを願っている。

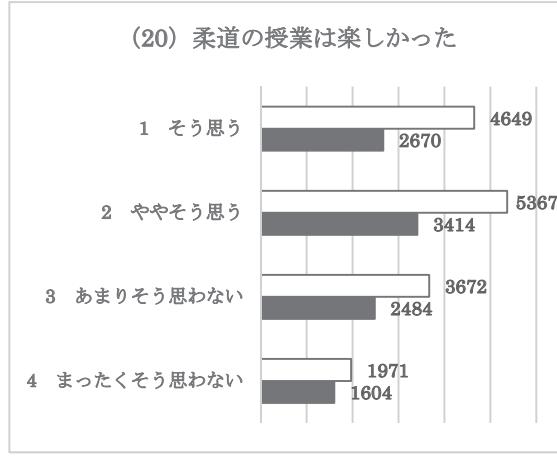
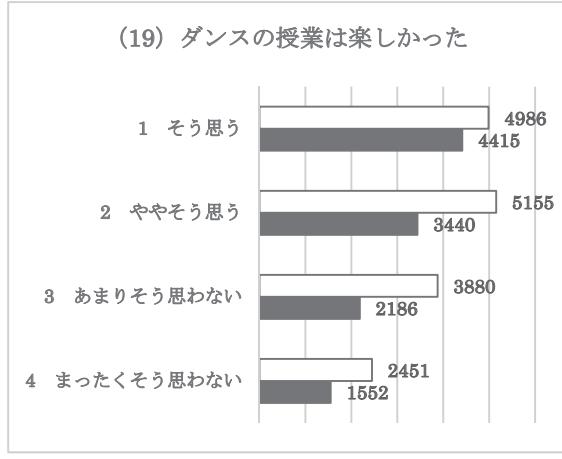
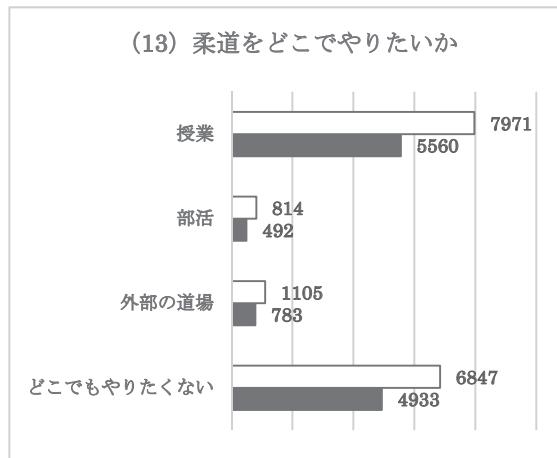
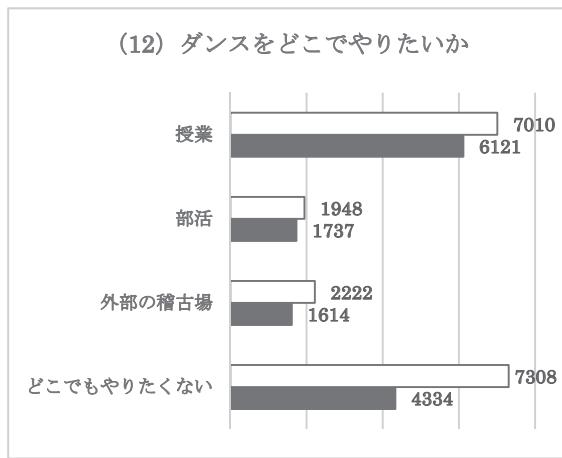
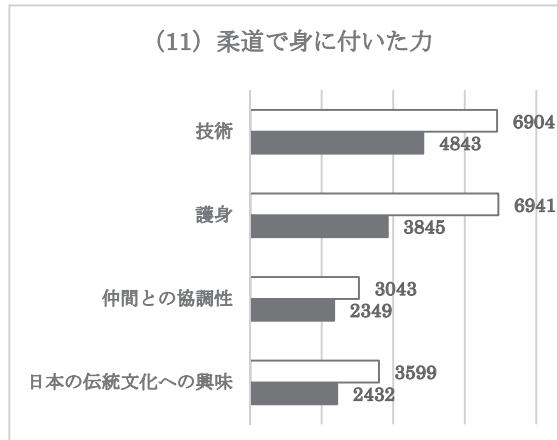
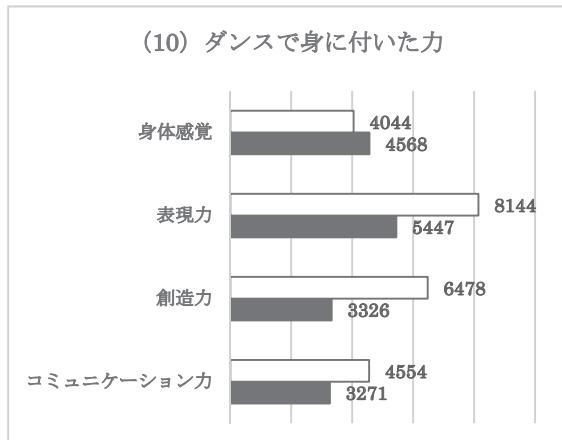
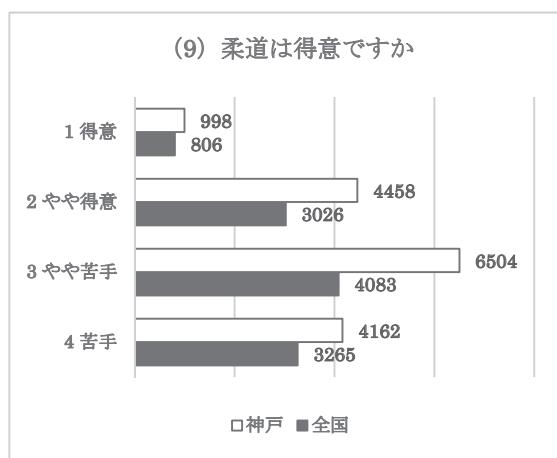
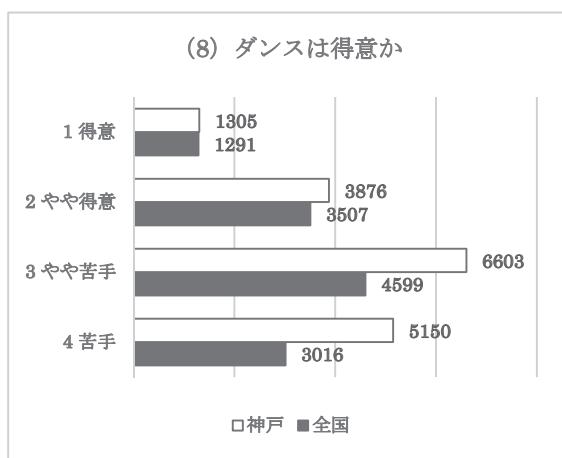
企画		参加校	備考
①発表機会	2	58校	観客120,000人
②ワークショップ	4（実施日39日）	48校	EXILE、5団体のプロアーティスト
③無料鑑賞	10	572人	横浜バレエフェスティバル他

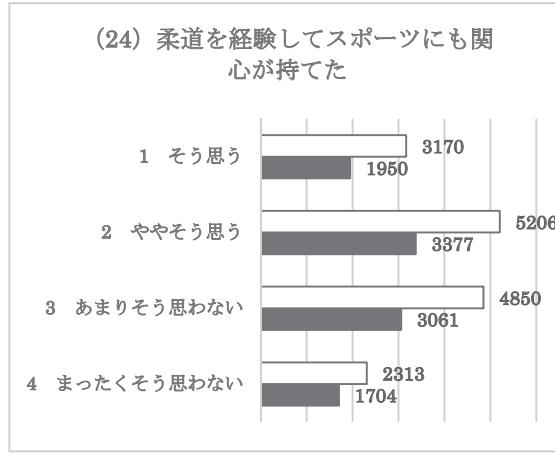
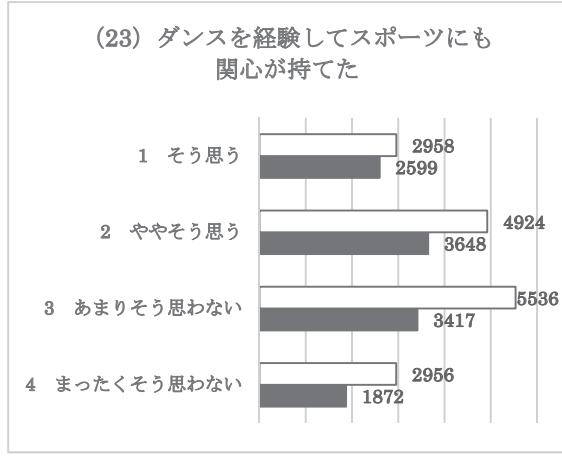
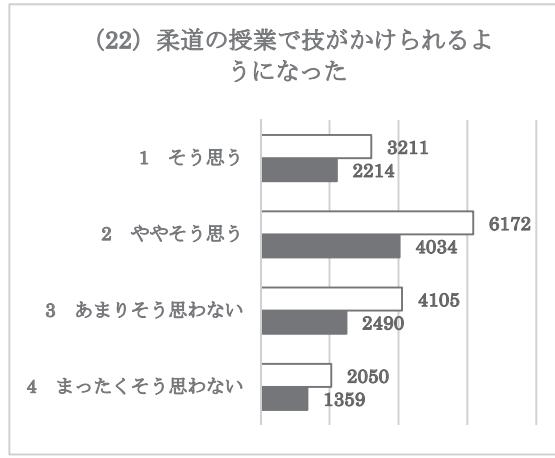
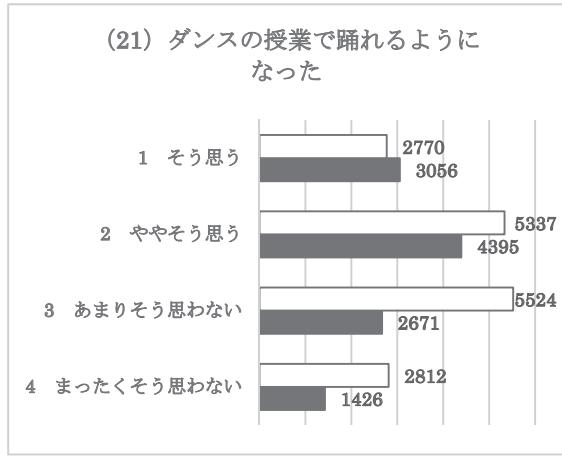
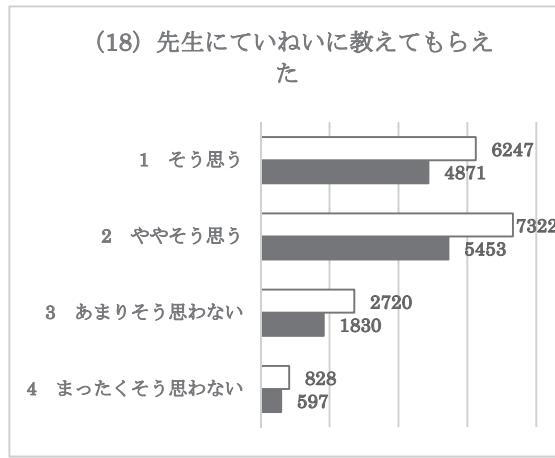
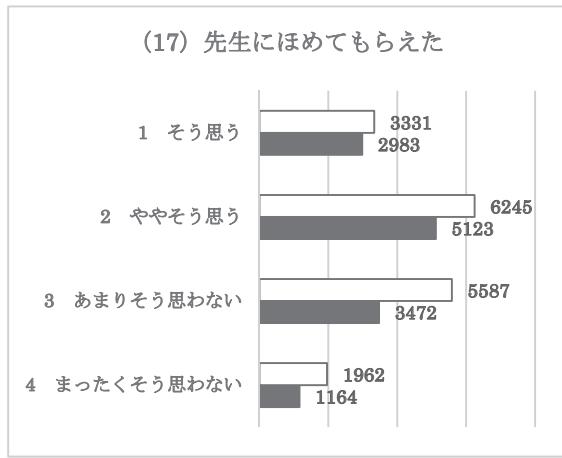
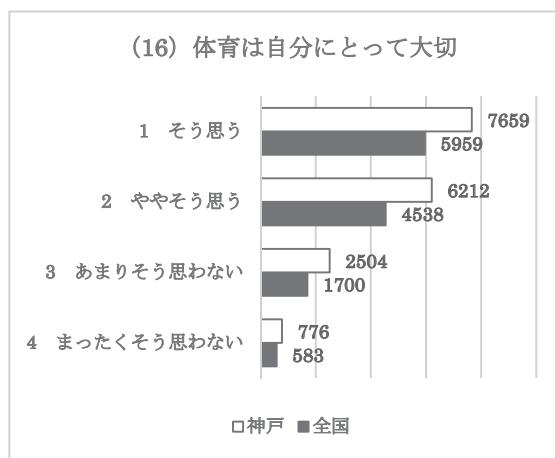
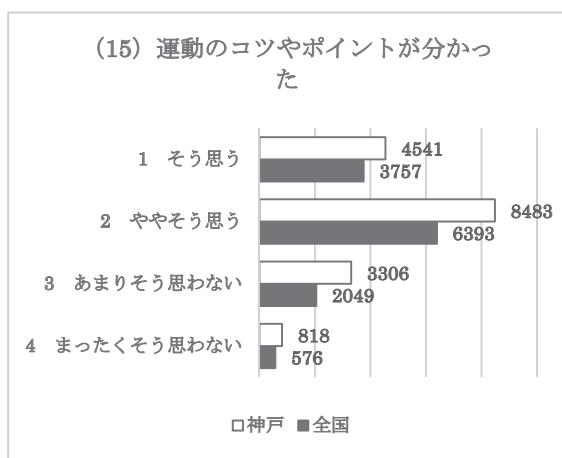
資料編

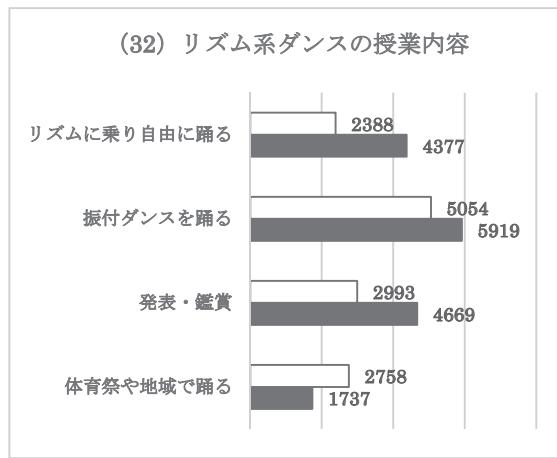
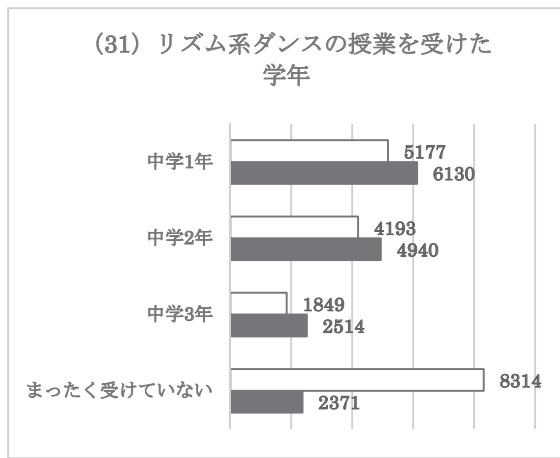
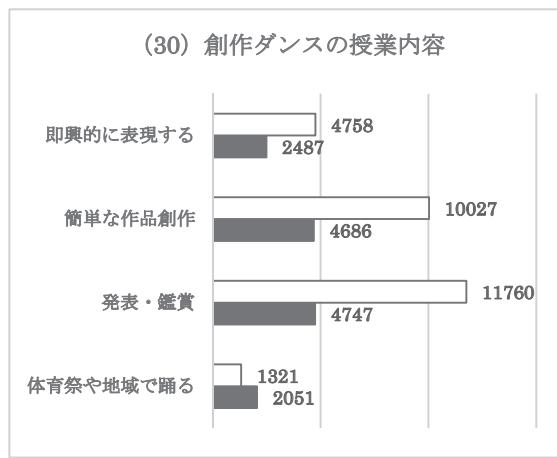
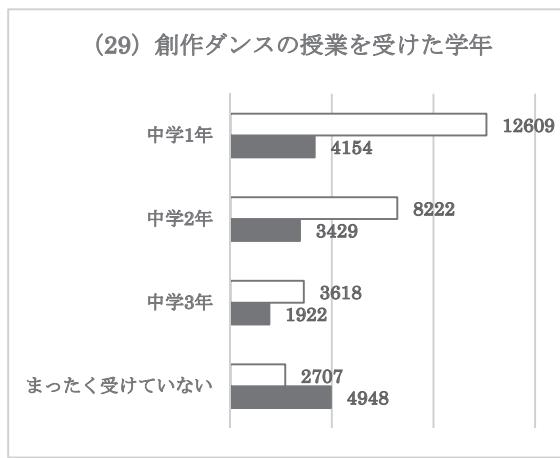
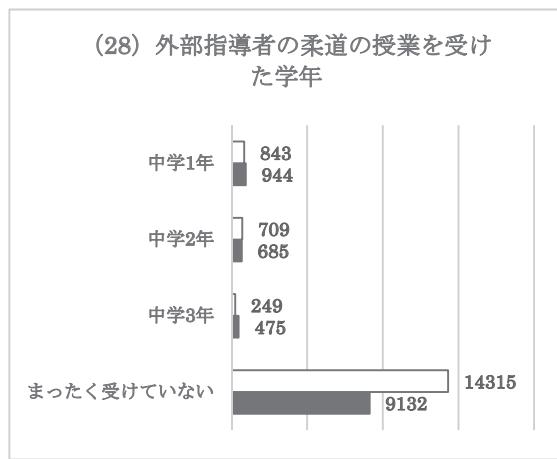
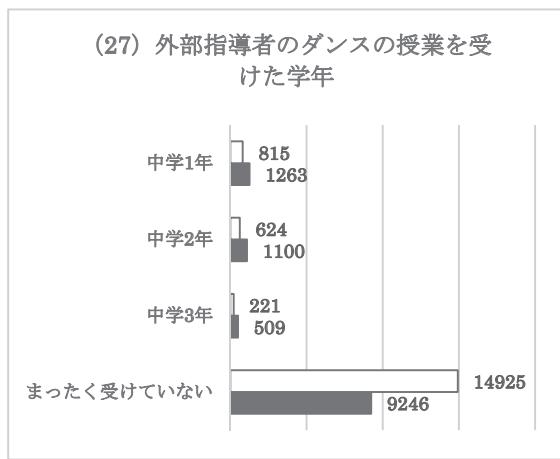
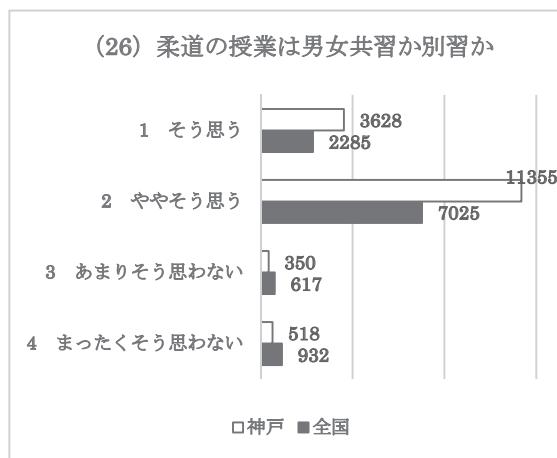
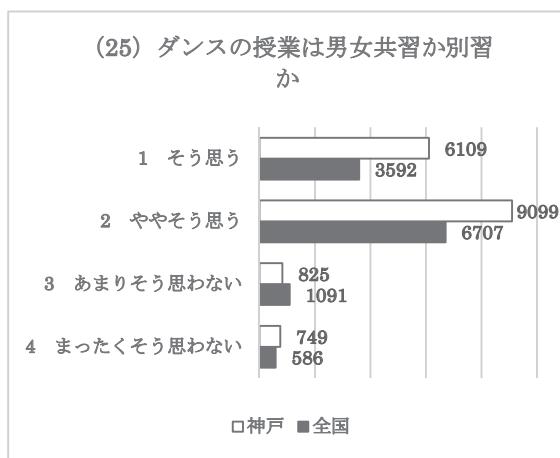
1. 「全国の中学校における柔道とダンスの指導状況等調査」集計結果(図表) 高橋耕平

1-1 中学生(神戸市・全国)

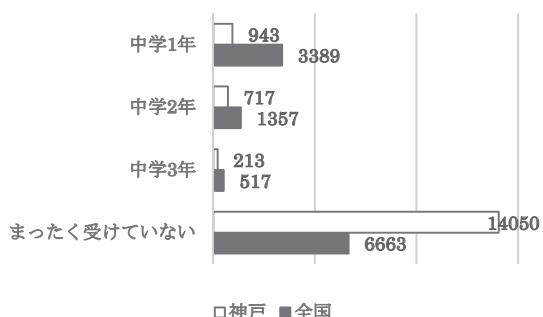




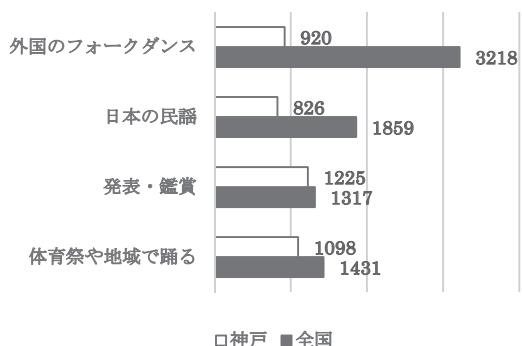




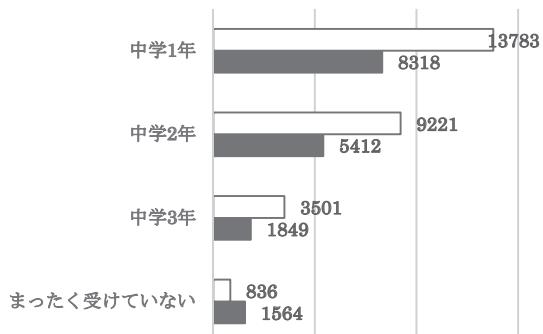
(33) フォークダンスの授業を受けた学年



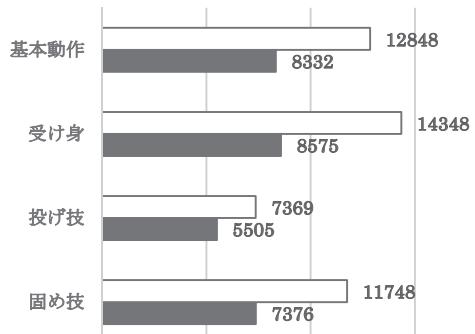
(34) フォークダンスの授業内容



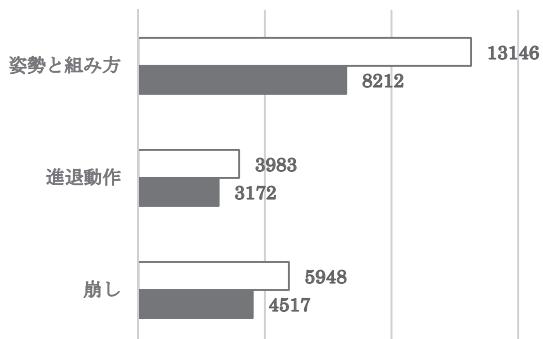
(35) 柔道の授業を受けた学年



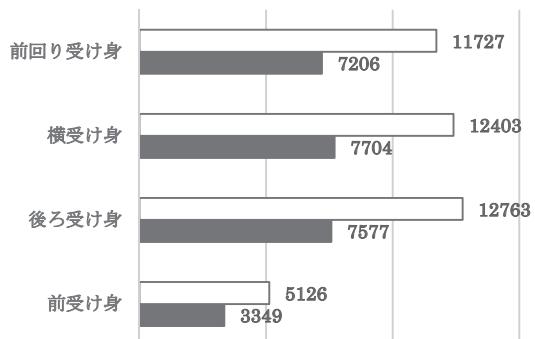
(36) 柔道の授業内容



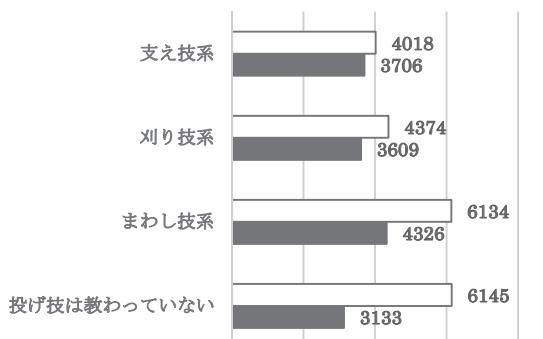
(37) 柔道の基本動作は何



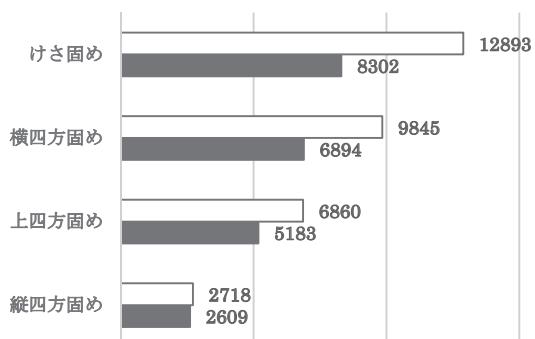
(38) 柔道の受け身は何



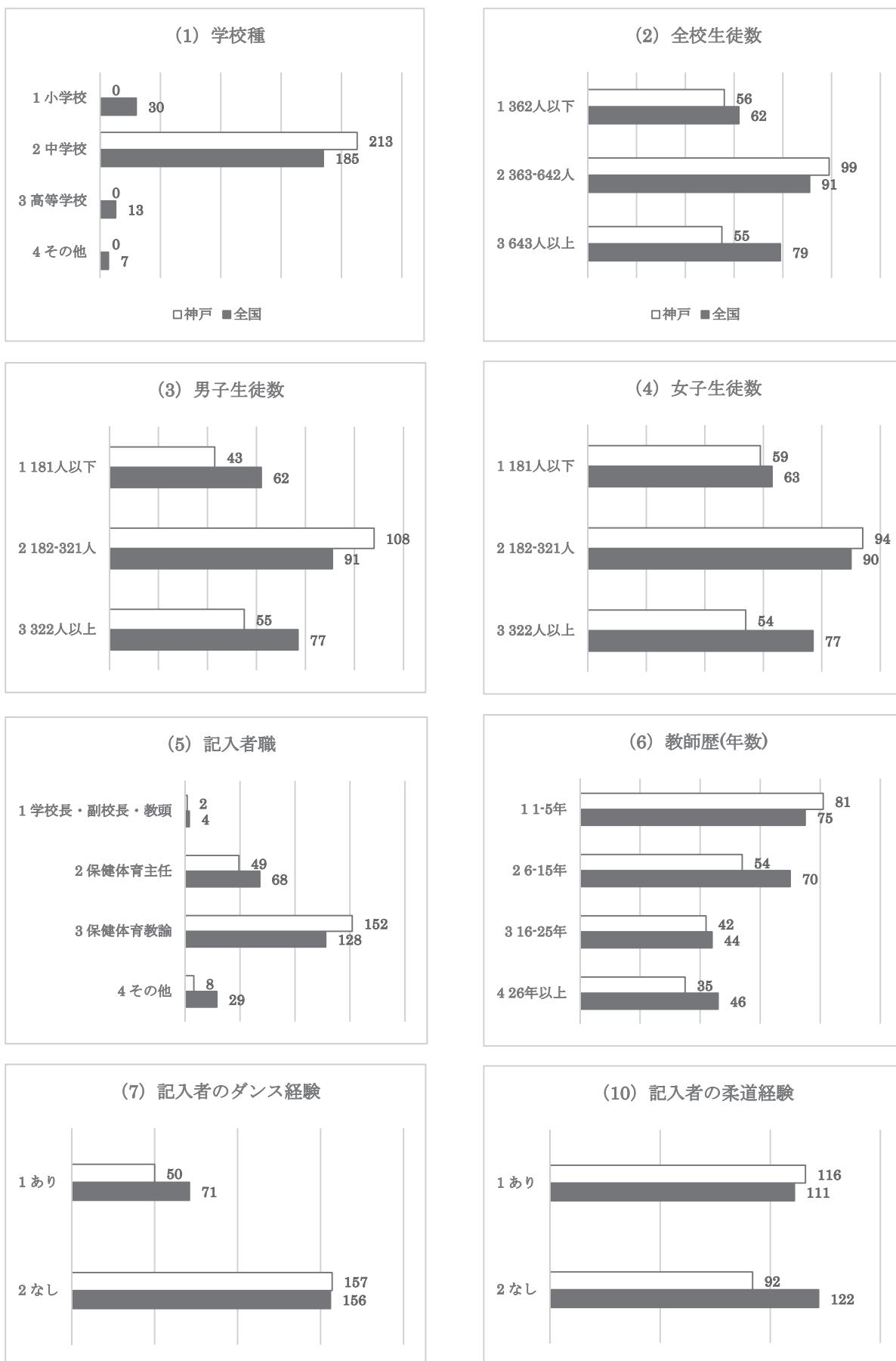
(39) 柔道の投げ技は何



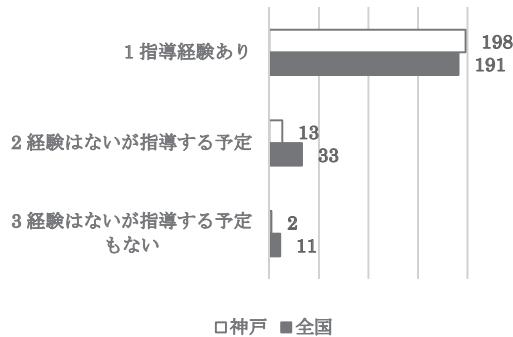
(40) 柔道の固め技は何



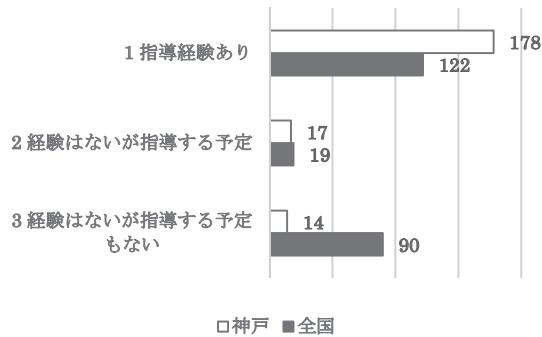
1-2 教員（神戸市・全国）



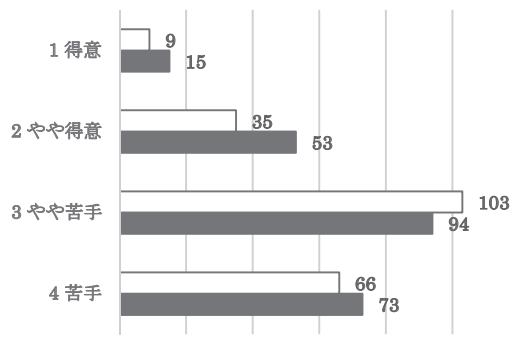
(8) 記入者のダンス授業の指導経験



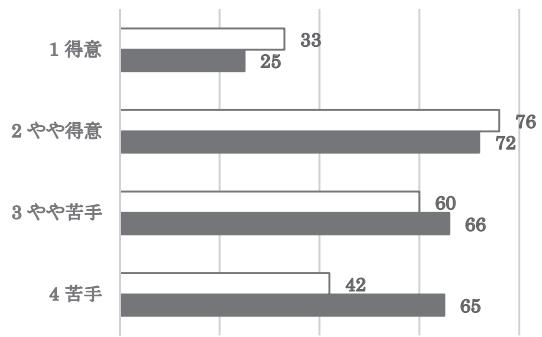
(11) 記入者の柔道授業の指導経験



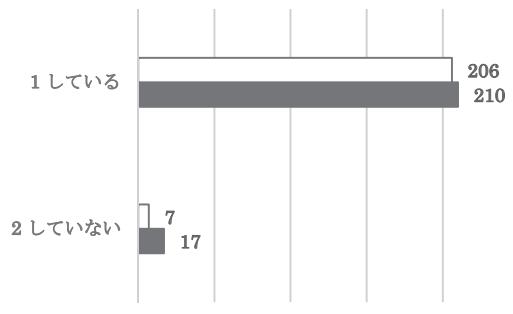
(9) ダンスは得意ですか



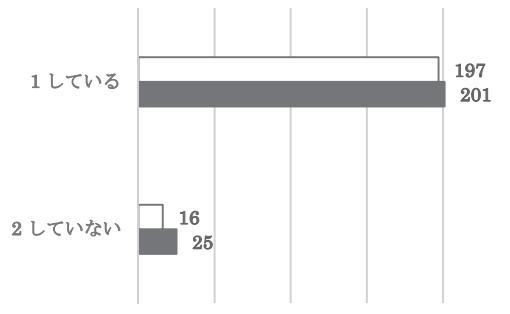
(12) 柔道は得意ですか



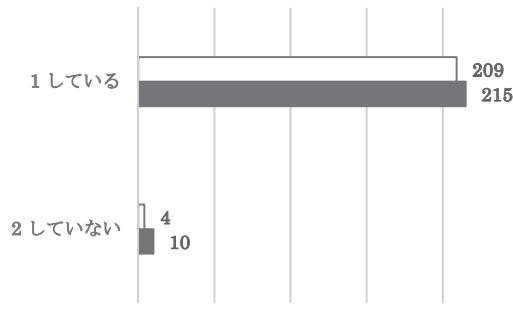
(14) 授業の冒頭で授業目標を児童・生徒に示している



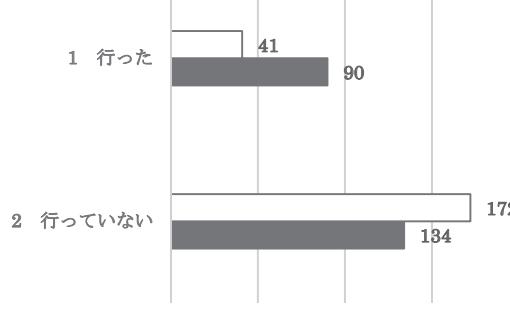
(15) 授業の最後に学習の振り返りをしている



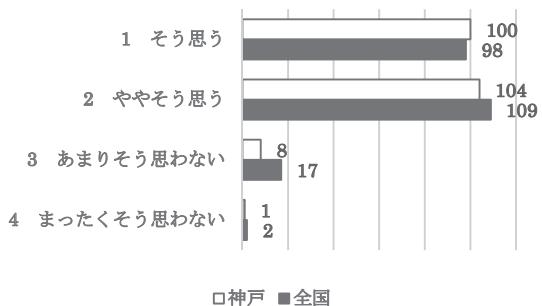
(16) 児童・生徒同士で助け合うことを大切にしている



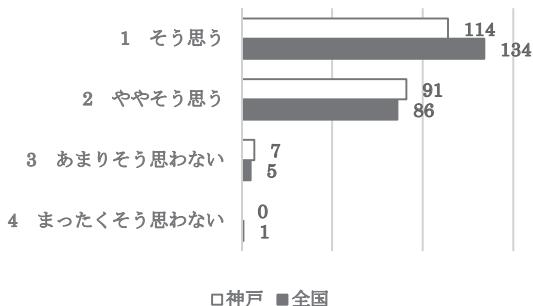
(17) 昨年研究授業を行った



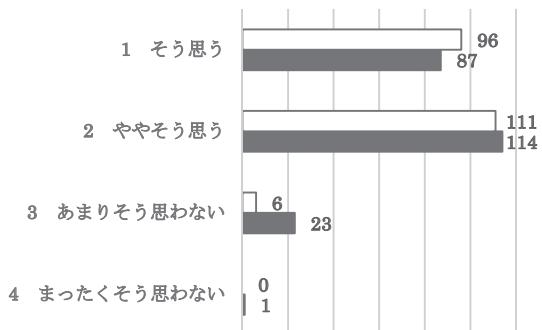
(18) 運動のコツやポイントを指導している



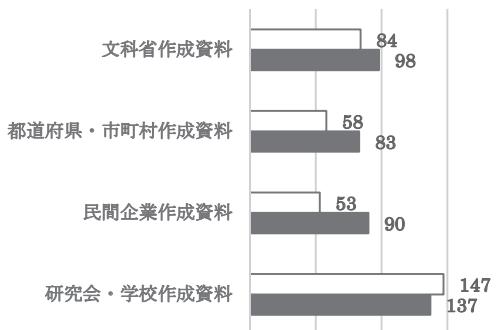
(19) 児童・生徒をほめるようにしている



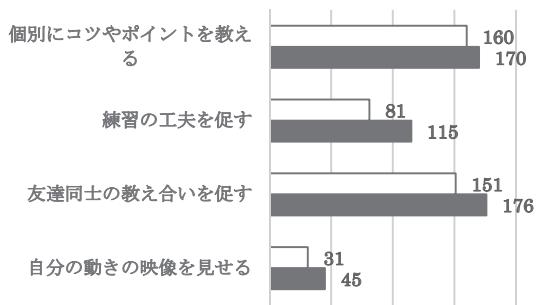
(20) ていねいに教えようとしている



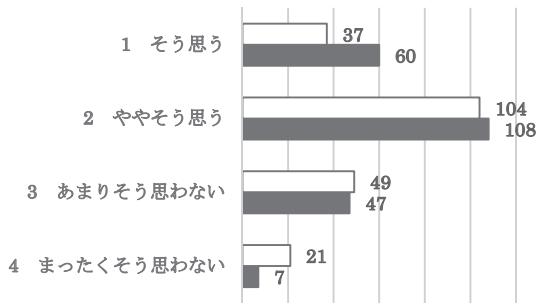
(21) どんな資料を活用しているか



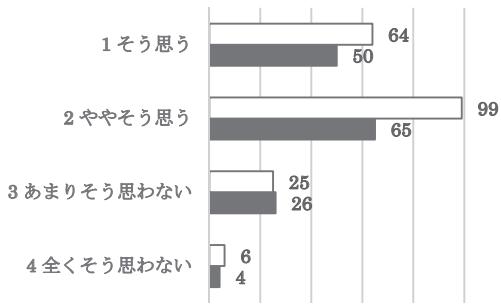
(22) 努力を要する児童・生徒への取組



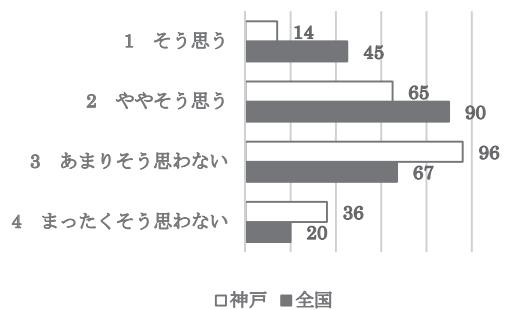
(23) ダンスの授業はやっていて楽しいですか



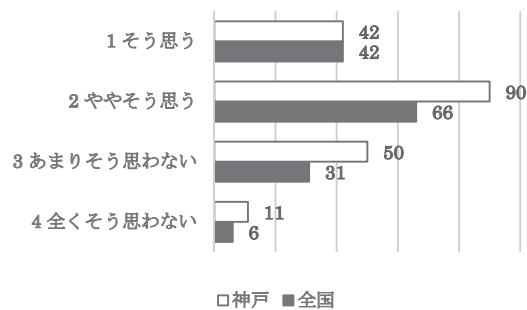
(32) 柔道の授業はやっていて楽しいですか



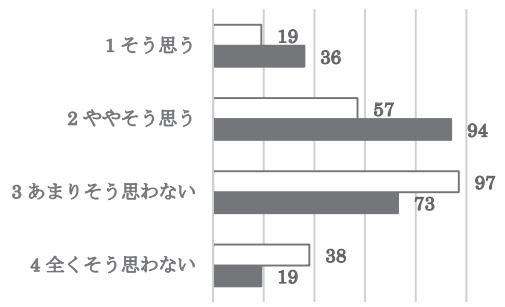
(24) ダンス授業を通して自分が踊れるようになった



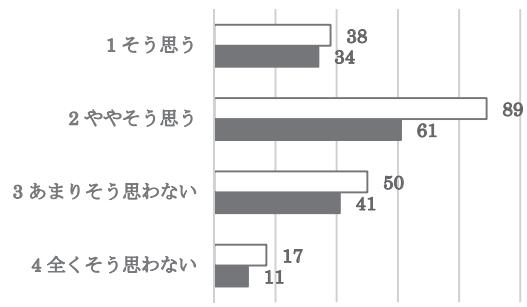
(33) 柔道の授業を通して自分が上達した



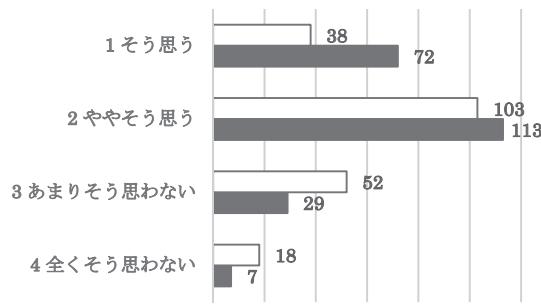
(25) ダンスを経験してスポーツにも関心が持てた



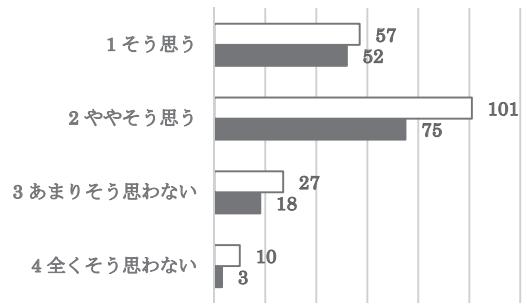
(34) 柔道を経験してスポーツにも関心が持てた



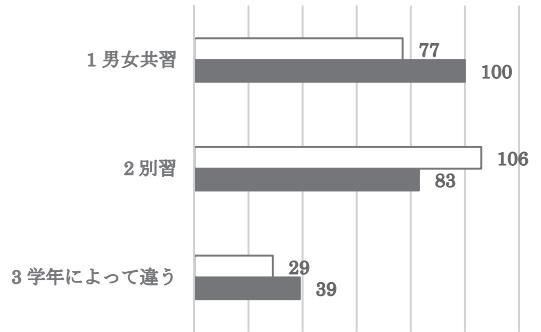
(26) ダンスは児童・生徒にとって大切なものである



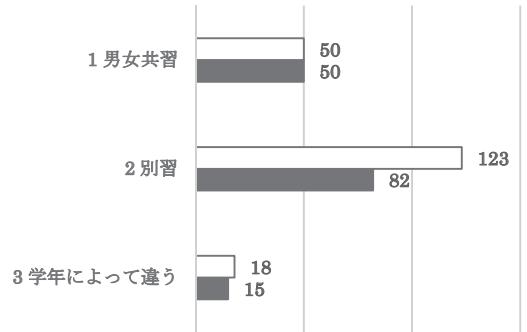
(35) 柔道は生徒にとって大切なものである



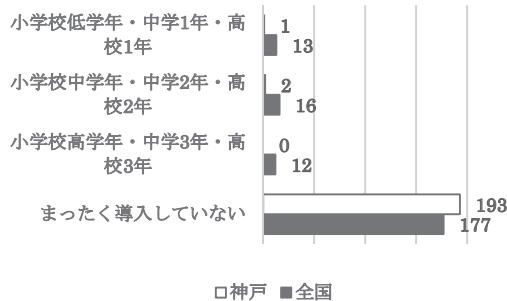
(27) ダンス授業は男女共習か別習か



(36) 柔道の授業は男女共習か別習か



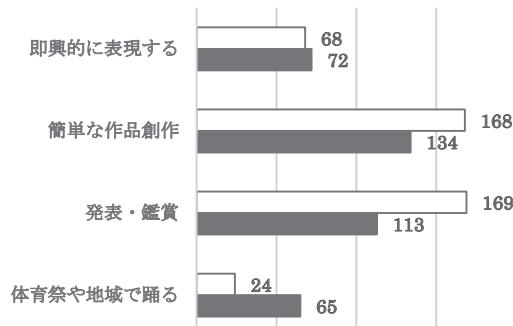
(31) ダンスの外部指導者を導入している学年



(42) 柔道の外部指導者を導入している学年



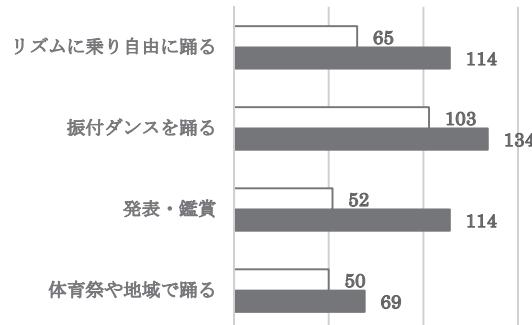
(28) 創作ダンスの授業内容



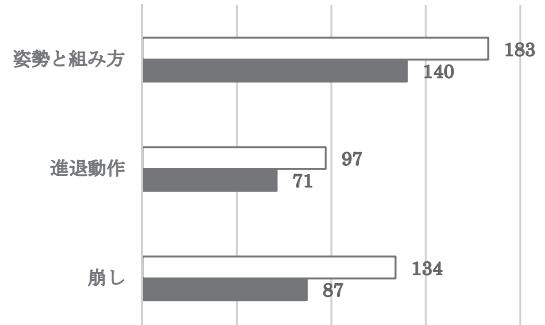
(37) 柔道の授業内容



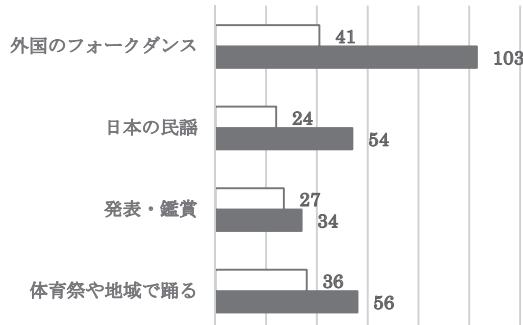
(29) リズム系ダンスの授業内容



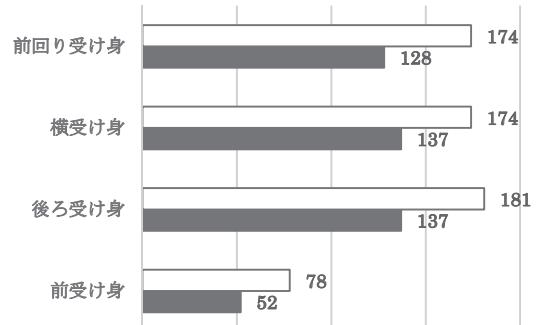
(38) 柔道の基本動作は何



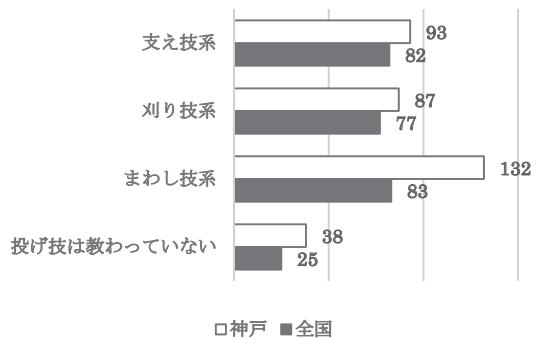
(30) フォークダンスの授業内容



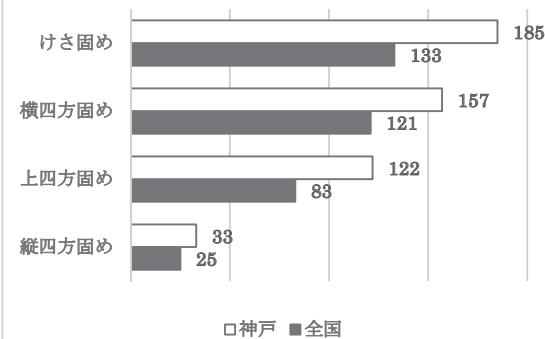
(39) 柔道の受け身は何



(40) 柔道の投げ技は何



(41) 柔道の固め技は何



2. 「全国の中学校における柔道とダンスの指導状況等調査票」

2-1 生徒用調査票

★マークのしかた


平成26年度 全国調査票 中学生用 (文部科学省委託研究)

以下の項目について、当てはまるもの一つにマークしてください

選択式の回答は、該当箇所のマーク○を塗りつぶしてご回答ください。

○: 空白マーク ●: 正しいぬりつぶし □: 不十分なぬりつぶし

記述式の回答は、回答欄からはみ出さないように記入してください。

この用紙は機械で処理します。回答欄以外に書き込みをしたり、用紙を汚したり、折り目を付けたりしないよう注意してください。

中学校名()

(1) 性別

○ 男

○ 女

(2) 学年

○ 1年

○ 2年

○ 3年

(3) 運動部への所属

○ 所属している

○ 所属していない

○ その他(外部のサークル等)

(4) 運動・ダンス(柔道)の実施状況(授業を除く)

○ 週に3日以上

○ 週に1~2日

○ 月に1~3日

○ しない

(5) 体育やスポーツは得意ですか

○ 得意

○ やや得意

○ やや苦手

○ 苦手

(6) 体育やスポーツは好きですか

○ 好き

○ やや好き

○ ややきらい

○ きらい

(7) もっと運動してみたいと思う条件は(複数回答可)

○ 好き・できそうな種目があれば
○ 自由な時間があれば
○ 友達と一緒にできたら
○ 体型変化に効果があれば

(8) ダンスは得意ですか

○ 得意

○ やや得意

○ やや苦手

○ 苦手

(9) 柔道は得意ですか

○ 得意

○ やや得意

○ やや苦手

○ 苦手

(10) ダンスでどんな力がつきましたか(複数回答可)

○ 身体感覚

○ 表現力

○ 創造力

○ コミュニケーション力

(11) 柔道でどんな力がつきましたか(複数回答可)

○ 技術

○ 護身

○ 仲間との協調性

○ 日本の伝統文化への興味

(12) ダンスをどこでやりたいか(複数回答可)

○ 授業

○ 部活

○ 外部のおけいこ場

○ どこでもやりたくない

(13) 柔道をどこでやりたいか(複数回答可)

○ 授業

○ 部活

○ 外部の道場

○ どこでもやりたくない

(14) <最近の健康状態について>当てはまるもの一つにマークしてください

		選択肢			
		まったくそう思わない	あまりそう思わない	ややそう思う	そう思う
1	泣きたい気分になる	○	○	○	○
2	悲しい	○	○	○	○
3	さみしい気持ちだ	○	○	○	○
4	心が暗い	○	○	○	○

★マークのしかた



		選択肢			
		まったくそう思わない	あまりそう思わない	ややそう思う	そう思う
5	一つのことに集中することができない	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
6	根気がない	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
7	難しいことを考えられない	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
8	怒りを感じる	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
9	腹立たしい気分だ	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
10	いらいらする	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
11	疲れやすい	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
12	体がだるい	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

<中学校時の保健体育の授業について>当てはまるもの一つにマークしてください

(15) 運動のコツやポイントが分かった

そう思う ややそう思う あまりそう思わない まったくそう思わない

(16) 体育は自分にとって大切なものであった

そう思う ややそう思う あまりそう思わない まったくそう思わない

(17) 先生にほめてもらえた

そう思う ややそう思う あまりそう思わない まったくそう思わない

(18) 先生にていねいに教えてもらえた

そう思う ややそう思う あまりそう思わない まったくそう思わない

(19) ダンスの授業は楽しかった

そう思う ややそう思う あまりそう思わない まったくそう思わない

(20) 柔道の授業は楽しかった

そう思う ややそう思う あまりそう思わない まったくそう思わない

(21) ダンスの授業で踊れるようになった

そう思う ややそう思う あまりそう思わない まったくそう思わない

(22) 柔道の授業で技がかけられるようになった

そう思う ややそう思う あまりそう思わない まったくそう思わない

(23) ダンスを経験してスポーツにも関心が持てた

そう思う ややそう思う あまりそう思わない まったくそう思わない

(24) 柔道を経験してスポーツにも関心が持てた

そう思う ややそう思う あまりそう思わない まったくそう思わない

(25) ダンスの授業は男女共習か別習か

男女共習 別習 学年によって違う ダンスの授業はなかった

(26) 柔道の授業は男女共習か別習か

男女共習 別習 学年によって違う ダンスの授業はなかった

(27) 外部指導者のダンスの授業を受けた学年（複数回答可）

中学1年 中学2年 中学3年 まったく受けていない

(28) 外部指導者の柔道の授業を受けた学年（複数回答可）

中学1年 中学2年 中学3年 まったく受けていない

(29) 創作ダンスの授業を受けた学年（複数回答可）

中学1年 中学2年 中学3年 まったく受けていない

★マークのしかた



- (30) 創作ダンスの授業内容（複数回答可）
 即興的に表現する 簡単な作品創作 発表・鑑賞 体育祭や地域で踊る
- (31) リズム系ダンスの授業を受けた学年（複数回答可）
 中学1年 中学2年 中学3年 まったく受けていない
- (32) リズム系ダンスの授業内容（複数回答可）
 リズムに乗り自由に踊る 振付ダンスを踊る 発表・鑑賞 体育祭や地域で踊る
- (33) フォークダンスの授業を受けた学年（複数回答可）
 中学1年 中学2年 中学3年 まったく受けていない
- (34) フォークダンスの授業内容（複数回答可）
 外国のフォークダンス 日本の民踊 発表・鑑賞 体育祭や地域で踊る
- (35) 柔道の授業を受けた（複数回答あり）
 中学1年で受けた 中学2年で受けた 中学3年で受けた まったく受けていない
- (36) 柔道の授業内容は何（複数回答あり）
 基本動作 受け身 投げ技 固め技
- (37) 柔道の基本動作は何（複数回答あり）
 姿勢と組み方 進退動作 崩し
- (38) 柔道の受け身は何（複数回答あり）
 前回り受け身 横受け身 後ろ受け身 前受け身
- (39) 柔道の投げ技は何（複数回答あり）
 支え技系（膝車から支え釣り込み足等） 戻り技系（大外・大内・小内） まわし技系（体落とし・大腰） 投げ技は教わっていない
- (40) 柔道の固め技は何（複数回答あり）
 けさ固め 横四方固め 上四方固め 縦四方固め

ご協力ありがとうございました。

2-2教員用調査票

★マークのしかた
悪い まあ 良い

平成26年度 全国調査票 教員用 (文部科学省委託研究)

以下の項目について、あてはまるもの一つにマークしてください

選択式の回答は、該当箇所のマークを塗りつぶしてご回答ください。
: 空白マーク : 正しいぬりつぶし : 不十分なぬりつぶし

記述式の回答は、回答欄からはみ出さないように記入してください。

この用紙は機械で処理します。回答欄以外に書き込みをしたり、用紙を汚したり、折り目を付けたりしないように注意してください。

- (1) 学校種 小学校 中学校 高等学校 その他
- (2) 全校生徒数 362人以下 363-642人 643人以上
- (3) 男子生徒数 181人以下 182-321人 322人以上
- (4) 女子生徒数 181人以下 182-321人 322人以上
- (5) 記入者(氏名) 氏名 学校長・副校長・教頭 保健体育主任 保健体育教諭 その他
- (6) 教師歴(年数) 1~5年 6~15年 16~25年 26年以上
- (7) 記入者のダンス経験 あり なし
- (8) 記入者のダンス授業の指導経験 指導経験あり 経験はないが指導する予定 経験はないが指導する予定もない
- (9) ダンスは得意ですか 得意 やや得意 やや苦手 苦手
- (10) 記入者の柔道経験 あり なし
- (11) 記入者の柔道授業の指導経験 指導経験あり 経験はないが指導する予定 経験はないが指導する予定もない
- (12) 柔道は得意ですか 得意 やや得意 やや苦手 苦手
- (13) <最近の健康状態について>あてはまるもの一つにマークしてください

		選択肢			
		まったくそ う思わない	あまりそ う思わない	ややそう思う	そう思う
1	泣きたい気分になる	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
2	悲しい	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
3	さみしい気持ちだ	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
4	心が暗い	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
5	一つのことに集中することができない	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
6	根気がない	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

★マークのしかた



		選択肢			
		まったくそう思わない	あまりそう思わない	ややそう思う	そう思う
7	難しいことを考えられない	○	○	○	○
8	怒りを感じる	○	○	○	○
9	腹立たしい気分だ	○	○	○	○
10	いらっしゃる	○	○	○	○
11	疲れやすい	○	○	○	○
12	体がだるい	○	○	○	○

<児童・生徒が受けているダンス授業について>当てはまるもの一つにマークしてください

(14) 授業の冒頭で授業目標を児童・生徒に示している

○ している ○ していない

(15) 授業の最後に学習の振り返りをしている

○ している ○ していない

(16) 児童・生徒同士で助け合うことを大切にしている

○ している ○ していない

(17) 昨年研究授業を行った

○ 行った ○ 行っていない

(18) 運動のコツやポイントを指導している

○ そう思う ○ ややそう思う ○ あまりそう思わない ○ まったくそう思わない

(19) 児童・生徒をほめるようにしている

○ そう思う ○ ややそう思う ○ あまりそう思わない ○ まったくそう思わない

(20) ていねいに教えようとしている

○ そう思う ○ ややそう思う ○ あまりそう思わない ○ まったくそう思わない

(21) どんな資料を活用しているか (複数回答可)

○ 文科省作成資料 ○ 都道府県・市町村作成資料 ○ 民間企業作成資料 ○ 研究会・学校作成資料

(22) 努力を要する児童・生徒への取組 (複数回答可)

○ 個別にコツやポイントを教 ○ 練習の工夫を促す ○ 友達同士の教え合いを促す ○ 自分の動きの映像を見せる
える

<児童・生徒が受けているダンス（表現運動）の授業について> 柔道の設問への回答は中高教員のみ

(23) ダンスの授業はやっていて楽しいですか

○ そう思う ○ ややそう思う ○ あまりそう思わない ○ まったくそう思わない

(24) ダンス授業を通して自分が踊れるようになった

○ そう思う ○ ややそう思う ○ あまりそう思わない ○ まったくそう思わない

(25) ダンスを経験してスポーツにも関心が持てた

○ そう思う ○ ややそう思う ○ あまりそう思わない ○ まったくそう思わない

(26) ダンスは児童・生徒にとって大切なものである

○ そう思う ○ ややそう思う ○ あまりそう思わない ○ まったくそう思わない

(27) ダンス授業は男女共習か別習か

○ 男女共習 ○ 別習 ○ 学年によって違う

(28) 創作ダンスの授業内容は何 (複数回答可)

○ 即興的に表現する ○ 簡単な作品創作 ○ 発表・鑑賞 ○ 体育祭や地域で踊る

(29) リズム系ダンスの授業内容は何 (複数回答可)

○ リズムに乗り自由に踊る ○ 振付ダンスを踊る ○ 発表・鑑賞 ○ 体育祭や地域で踊る



- (30) フォークダンスの授業内容は何 (複数回答可)
 外国のフォークダンス 日本の民踊 発表・鑑賞 体育祭や地域で踊る

(31) 外部指導者を導入している学年 (複数回答可)
 小学校低学年・中学1年・ 高校1年 小学校中学年・中学2年・ 高校2年 小学校高学年・中学3年・ 高校3年 まったく導入していない

<生徒が受けている柔道の授業について> 回答は中高教員のみ

(32) 柔道の授業はやっていて楽しいですか
 そう思う ややそう思う あまりそう思わない まったくそう思わない

(33) 柔道の授業を通して自身が上達した
 そう思う ややそう思う あまりそう思わない まったくそう思わない

(34) 柔道を経験してスポーツにも関心が持てた
 そう思う ややそう思う あまりそう思わない まったくそう思わない

(35) 柔道は生徒にとって大切なものである
 そう思う ややそう思う あまりそう思わない まったくそう思わない

(36) 柔道の授業は男女共習か別習か
 男女共習 別習 学年によって違う

(37) 柔道の授業内容は何 (複数回答可)
 基本動作 受け身 投げ技 固め技

(38) 柔道の基本動作は何 (複数回答可)
 姿勢と組み方 進退動作 崩し

(39) 柔道の受け身は何 (複数回答可)
 前回り受け身 横受け身 後ろ受け身 前受け身

(40) 柔道の投げ技は何 (複数回答可)
 支え技系 (膝車から支え釣り込み足等) 戻り技系 (大外・大内・小内) まわし技系 (体落とし・大腰) 投げ技は教えていない

(41) 柔道の固め技は何 (複数回答可)
 けさ固め 横四方固め 上四方固め 縦四方固め

(42) 外部指導者を導入している学年 (複数回答可)
 中学1年・高校1年 中学2年・高校2年 中学3年・高校3年 まったく導入していない

(43) 【自由記述設問】ダンスや柔道に関してご意見・ご感想がございましたら、ご記入ください

A large, empty rectangular frame with a thin black border, occupying the central portion of the page. This frame is likely a placeholder for a figure or diagram that has not been included in the document.

ご協力ありがとうございました。



3 / 3
調査 14年07月

ダンス領域を実践する上での成果と課題の把握並びにその解決策の方策

研究代表者 高橋和子

横浜国立大学教育人間科学部教授

分析担当 高橋耕平

横浜国立大学教育人間科学部非常勤職員

* 報告書・DVD 作成に当たっては次の方々に協力頂いた。(敬称略)

NPO 法人 ST スポット横浜 小川智樹・佐藤亮太

共立女子大学 足立美和・伊藤史織

神戸市教育委員会 田中浩一・赤木裕之

湘北短期大学 小笠原大輔

東京学芸大学 鈴木直樹・松田恵示

横須賀市立武山中学校 斎藤昌子

横浜国立大学 (教員) 福田幸男・山本光・梅澤秋久

(学生) 上原征大・モダンダンス部等

横浜市教育委員会 根岸淳

横浜市立橘中学校 三浦明希子

吉備国際大学 高田康史

横浜市文化観光局文化振興課横浜芸術アクション事業担当 大久保

* 調査に当たっては次の中学校、並びに各都道府県教育委員会協力に協力頂いた。

兵庫県【神戸市立中学校】

本庄・魚崎・本山・住吉・御影・本山・向洋・鷹匠・原田・葺合・布引
港島・夢野・湊川・吉田・有馬・大池・山田・鷺台・淡河・唐櫃・広陵
小部・有野・大原・長田・太田・鷹取・飛松・高倉・西代・横尾・塩屋
舞子・福田・垂水・湊翔・平野・神出・岩岡・玉津・長坂・落合・八多
西神・大沢・桜が丘・須佐野・歌敷山・多聞東・神陵台・桃山台・渚
本多聞・星陵台・伊川谷・雲雀丘・筒井台・鳥帽子・高取台・駒ヶ林
友が丘・桜の宮・鈴蘭台・星和台・白川台・竜が台・西落合・須磨北
垂水東・楠櫨谷・押部谷・王塚台・北神戸・太山寺・井吹台・有野北
神戸生田・兵庫(北分校含む)・丸山(西野分校含む)

* 西宮市立山口中学校

岩手県

山形県

千葉県

神奈川県

長野県

岐阜県

京都府

大阪府

香川県

鳥取県

福岡県

宮崎県

沖縄県

あとがき

文部科学省の委託事業として、平成 27 年度は主にダンスに焦点を当て、創作ダンスに取り組んでいる神戸市の実態調査を踏まえ、平成 26 年度の行った全国調査結果との比較も行った。その結果、創作ダンスによって身に付く力は「表現力」や「創造力」であることや、リズム系ダンスの実践における課題も明確になった。そこで、「リズム系ダンスの取組」「ダンス指導法」「外部指導者活用ダンスプログラム」「ダンス映像作成（リズム系ダンスの指導事例も含め、ダンス作品も掲載）」を検討した。また、ダンスの学習指導は学習指導要領に明記されている通り、戦後 70 年間積み重ねてきた「主体性」「協働性」「創造性」が特徴的であり、これらの観点は、今後の学校教育政策で重点化されることを再確認できた。しかし、表現系ダンスやリズム系ダンスの指導の難しさを実感する教員も多くおり、基本的な内容の指導よりは、「振り写し」や「作品発表」を中心に行っている現状も明らかになった。

今後の課題として、以下のことを解決する方策が必要である。

①ダンスの基礎・基本を押さえた具体的教材を web 発信や講習会を通して伝えていく。指導要領解説に挙げた「ひと流れの動きにして即興的に踊る」「簡単なひとまとまりの表現で踊る」「全身でリズムに乗って弾んで踊る」と言っても、紙媒体では理解されない現状が見えてきたからである。

②ポートフォリオを活用した生徒達へのフィードバック方法の開発。

③外部指導者の導入にあたってのコーディネーターの役割と育成の方法。

本事業において、文部科学省、横浜国立大学はじめ、多くの方々のご協力をいただきましたことに、心より感謝を申し上げます。



戯『鳥獣戯画から見た世界』

横浜国立大学教育人間科学部 高橋和子

〒240-8501 横浜市保土ヶ谷区常盤台 79-2

TEL 045-339-3393

e-mail akahashi-kazuko-fs@ynu.ac.jp